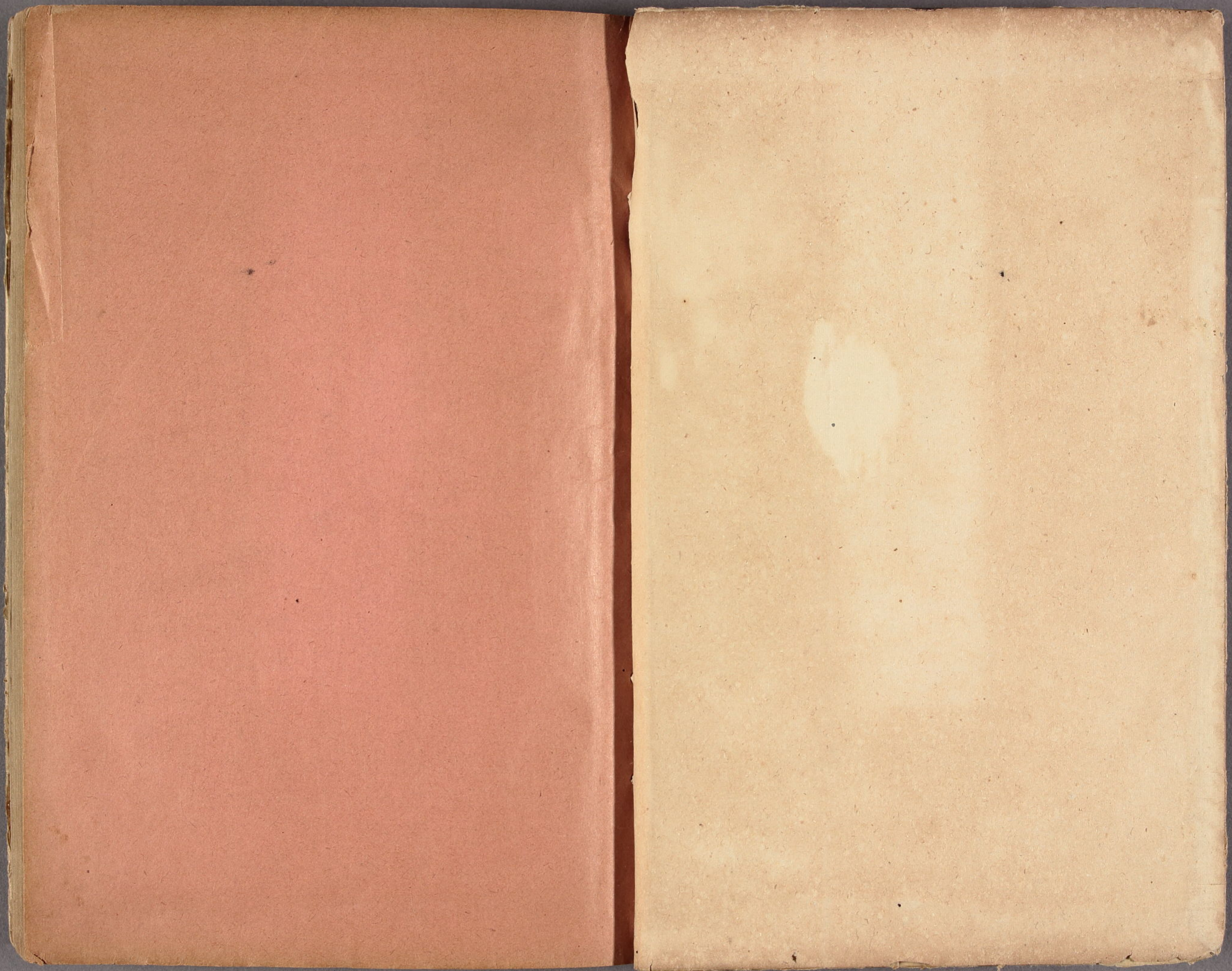




鰐頭
 挿畫
 俳諧
 秘事
 大全





俳諧秘事大全序

何謂文學乎曰無他能悉盡情緒妙使他撼動心情者謂之文學也俳諧者日本之文學矣何以此言乎曰有說夫春則綠樹深鬱夏則布帆來往秋則黃葉晒錦冬則白雪鋪銀四時之風光千態萬狀變化不窮之狀暨世態起伏人事得喪寄幽情於雙句寓逸思於片言有足大感動人者焉猶寒山子得三界橫眠閑無事明月清風是我家之句以爲絕調菅原道真得月輝如晴雪梅花似照星之句以爲有神助嗟呼俳諧之趣味妙處未必在多言也或曰俳諧以禪家學道爲奧義故其所

謂一言下悉盡舉一明三日機珠要意者猶拈禪家古
偈矣何其高尙深邃也抑屬于文學的者雖多之有切
於人情好尙者莫若千俳諧學之亦豈人世不一快事
哉雖然成彼瀟灑清迥以爽襟懷濤韻瑟瑟以快精神
之句決不容易業也其句法作法悉有規矩詞藻採擇
皆有法度安可不之知乎哉松井大人著此書其有慨
于此然邪為斯道初學示其作法叮嚀深切宛尙有如
彼望洋迷津之徒示鍼路焉若夫以才學竝馳馳騁異
曲同工雖謂存乎其人抑亦不可繪詞雕句不由如此
書者也嗟呼今此書一出則利斯道初學之徒豈鮮少

哉明治癸巳初夏識于尾州浪越香遠書院南聰之下

蓮窓居士

故、曲亭馬琴翁著 藍亭齋藍增補
 ○增補俳諧歲時記 葉草 中形横綴頗る美本全五冊
 改正 正價四拾五錢郵稅八錢
 本書は、季寄中の親玉にて、從來斯道の「虎の巻」も
 稱し、同學諸君の珍重去て置かざる奇書ありしが、惜
 哉、舊版は磨滅して字性の明瞭せざるのみならず、又
 携帶にも便ならず、故に今度原版に校訂を加へ、頗る
 鮮明なる六號活字を以て縮刷せしものなれば、携帶、
 常引共に便利なり、乞ふ同好の諸君、一本を購求して、
 發行所 東京橋區銀座三丁目 山中孝之助
 發賣所 名古屋市門前町二丁目 其中堂書店

自序

其角に酒呑癖あれば、去來は煙管をみかくか癖な
 り、仁義の教を導くも、三世の因果を説解くも、孔子
 と釋迦が癖なるべし、花は遠山の雲にまかひ、月は
 水面に銀波を流す、數年俳諧を學べども、よし野の
 奥、武藏野の果をしらす、獨り机に肱をあつけて、昔
 の人の咄を聴く、その聞く所忘るゝはやし、是予が
 ひどつの癖なれば、冊子を控へて何にまれ彼にま
 れ見るまゝ、きくまゝ、筆をとりてとるし侍りぬ、さ
 れど人には見すへきものならさりしを、例の忘れ

置て其中堂主人の眼にふれたり、此書むげになさんもをし、梓にのほせよと進めらる、その進むるは其人の癖にして、辭せざるも又癖なり、則俳諧秘事大全となつて其意に任す、世の中のみ見る癖の人々よ、此書にあしき癖あらは、憍ます矯らひ告げ賜へど爾云。

明治廿六年首夏

龜慕亭 鶴羨

挿書

俳諧秘事大全惣目録

○第一 俳諧の大意……………	一丁	○第十二 發句の切字……………	廿三丁
○第二 俳諧連歌の權輿……………	二丁	○第十三 作例……………	廿六丁
○第三 正風之鼻祖……………	十二丁	其一 下知の切……………	三十三丁
○第四 發句……………	十二丁	其二 心の切……………	三十五丁
○第五 脇句……………	十四丁	其三 二字切三字切……………	三十八丁
○第六 第三……………	十六丁	其四 を廻しに廻し……………	全丁
○第七 四句目振……………	十七丁	其五 大廻し……………	三十九丁
○第八 月花の定座……………	十八丁	其六 二段切三段切……………	全丁
○第九 句ひの花……………	二十丁	其七 玄妙切……………	全丁
○第十 揚句……………	廿一丁	其八 にけり三段けり……………	四十丁
○第十一 速吟遅吟の心得……………	廿二丁	其九 や哉……………	四十一丁

○第十四	古式切字十八といふは四十二丁	○第廿六	連聲の句……………六十七丁
○第十五	哉の分別……………全丁	○第廿七	序句……………七十丁
○第十六	や切の分別……………四十八丁	○第廿八	俳諧正式……………七十一丁
○第十七	六義の事……………五十二丁	○第廿九	執筆の手順……………七十四丁
○第十八	六難諸病の事……………五十六丁	○第三十	吟聲の手順……………七十七丁
○第十九	折句……………五十九丁	○第卅一	懷紙綴り方……………七十八丁
○第二十	折句の脊冠……………六十丁	○第卅二	兼題……………七十九丁
○第廿一	物名……………六十一丁	○第卅三	當座……………八十丁
○第廿二	廻文……………六十二丁	○第卅四	通題引方……………全丁
○第廿三	施頭……………六十三丁	○第卅五	探題取方……………八十一丁
○第廿四	字餘りの句……………六十四丁	○第卅六	硯引方取り方……………八十二丁
○第廿五	贈答……………六十五丁	○第卅七	料紙の受渡及取方……………八十三丁

○第卅八	短冊の披講……………八十四丁	○第五十	四字一平之事……………百六丁
○第卅九	詠草書方……………八十五丁	○第五十一	避三下三連之事……………全丁
○第四十	懷紙書方……………八十七丁	○第五十二	平仄起之事……………全丁
○第四十一	色紙書方……………八十八丁	○第五十三	漢和法式之事……………百七丁
○第四十二	短冊書方……………八十九丁	○第五十四	對句之次第……………百十丁
○第四十三	花に短冊附方……………九十七丁	○第五十五	通韻の事……………百十二丁
○第四十四	花の枝に短冊を附人に送り方……………九十八丁	○第五十六	假名書之事……………百十三丁
○第四十五	短冊書に種々忌方……………百丁	○第五十七	三鳥の事……………百廿四丁
○第四十六	御影の事……………百一丁	○第五十八	三橋の事……………百卅二丁
○第四十七	諸種俳諧の式……………百三丁	○第五十九	三木の事……………百卅三丁
○第四十八	第唱句の事……………百五丁	○第六十	四季山姿并四姬の事百卅五丁
○第四十九	二四不同之事……………全丁	○第六十一	五風の事……………百卅五丁

○第六十二	八柏の事……………	百卅五丁	○第七十四	八道志鳥の事……………	百五十三丁
○第六十三	七箇之事……………	百卅九丁	○第七十五	三疑題の事……………	百五十五丁
○第六十四	三の使の事……………	百四十一丁	○第七十六	三月盡九月盡の發句附 方の事……………	百六十三丁
○第六十五	<small>古今の序花に啼鶯水に 住む蛙の事</small> ……………	百四十三丁	○第七十七	終日終夜の事……………	百六十四丁
○第六十六	曲節地之事……………	百四十五丁	○第七十八	<small>嫁が君歳旦の詞とふる 事</small> ……………	百六十五丁
○第六十七	以心傳心の事……………	百四十七丁	○第七十九	月の鼠日の鼠の事……………	百六十六丁
○第六十八	都鳥の事……………	百四十八丁	○第八十	桂の花之事……………	全 丁
○第六十九	かた鶉の事……………	百五十一丁	○第八十一	<small>隠顯の月并花無き花の 正座の事</small> ……………	百六十七丁
○第七十	ひもす鳥の事……………	百五十二丁	○第八十二	<small>俳諧に火具を思む事</small> ……………	百六十八丁
○第七十一	姫離鳥の事……………	全 丁	○第八十三	芭蕉翁口授の事……………	百六十九丁
○第七十二	松むしり鳥の事……………	全 丁	○第八十四	諸秘訣の事……………	百七十七丁
○第七十三	閑子鳥の事……………	百五十三丁	○第八十五	<small>不易流行の句の心得</small> ……………	百九十六丁

○第八十六	發句諸流の事……………	百九十八丁	○俳諧式目……………	一丁
○第八十七	本草の異名并引歌……………	二百三丁	○四季詞寄……………	六丁
○第八十八	<small>俳諧の變化風派の分離</small> ……………	二百十七丁	○一月の部……………	七丁
○第八十九	蕉門十哲……………	二百十八丁	○二月の部……………	廿六丁
○第九十	先師鶴叟の俳系……………	二百廿六丁	○三月の部……………	三十四丁
○第九十一	後師醉雨の俳系……………	全 丁	○四月の部……………	四十六丁
○第九十二	俳諧の稽古心得……………	二百廿七丁	○五月の部……………	六十二丁
○第九十二	<small>人の方へ句を送る折紙 認標</small> ……………	二百三十丁	○六月の部……………	七十二丁
○第九十四	<small>俳名を送る折紙認標</small> ……………	二百卅一丁	○七月の部……………	八十四丁
○第九十五	<small>俳諧に教導職を置く、 權輿</small> ……………	全 丁	○八月の部……………	百〇六丁
			○九月の部……………	百十九丁
			○十月の部……………	百三十丁

籠頭の部

○十一月の部……………百四十三丁

○十二月の部……………百四十七丁

○非季詞……………百五十四丁

○正花の部……………百六十丁

○戀の詞……………百六十三丁

○非戀詞……………百七十丁

○月の心得……………百七十一丁

○去嫌のあらまし……………百七十四丁

○補言……………百七十八丁

○俳諧耳袋……………百七十九丁

○蕉門草枕……………百九十三丁

覽頭 挿畫 俳諧秘事大全惣目録尾

俳諧之式目

- 百韻 四折
 初表八句 五句日月ノ定座
 初裏十四句 九句日月十日三句日花
 二ノ表十四句 十三句日
 二ノ裏十四句 初裏二同
 三ノ表十四句 二ノ表二同
 三ノ裏十四句 初裏二同名殘表十四句
 名殘裏八句 七句日花
 ○五十韻 貳折
 百韻之初折二ノ折ナリ
 ○七十二候 三折
 百韻之三ノ表裏一折ヲ扱タルナリ

覽頭 挿畫 俳諧秘事大全

鶴羨 松井宗匠著



第一 大意

俳諧は和歌に繼ぐの文學あり、俳諧は孔孟の教に順ふの國教なり、俳諧は佛果を得るの悟道なり、然れ共連歌より出たる連歌の俳諧にして、則連歌の只ことあり、教無くして教あり、道無くして道あり、式あくして式あるを俳諧の道とは云ふなりけり、或人間ふ、俳諧は何の爲めにするものなるやと、答て曰ふ、俳諧は人倫五常を心に治め、花に吟じ、月に嘯ふ、き以て文化の開明を育するにあり、又問ふ、俳諧は貞享元祿の頃を盛なりとす、今日とは進退如何なるやと、答て曰ふ、貞享元祿俳諧盛なりと

○四十四説席ニハ世吉 二折
百韻之中二折ヲ扱タル也

○首尾 百韻之初表名殘裏ヲ言

○表合 百韻初ノ表

○十百韻 百韻ヲ十卷ニシテ一卷毎ニ首尾スルモノ

○千句 百韻十卷ヲ合セテヒトツニ首尾スルモノナリ古式ハ

卷頭ノ百韻

表十句九句目月名所一アルベシト云フ

名殘裏六句五句目花

雖も世未開の時にして俳諧發句も未開なり何となれば

「猿なれば猿にして置け呼子鳥」と其實物を定めざる

不研究の限りなり亦都鳥を鷓鴣とし思草を龍膽なりとするが如きは予が俳諧の未開ありしと斷言する所以

あり而して今日の俳諧は口に花を稱美して海外に比類なきを誇り眼に月の出るを詠めて地球の運轉を思

ひ量るなり去れば今日の俳諧は貞享元祿の俳諧とは同じからずしてその古き例しを捨るにはあらず以て

俳諧は文學なりといひ俳諧は國教ありといひ俳諧は悟道ありといふ若し是に違ひ五常を猥る時は何程名

句名吟たりとも眞の俳諧發句とは言はざるなり

第二 俳諧連歌之權輿

ナリ或曰卷軸之百韻
初表六句五句目月名
殘十句九句目花今傳
絶テ知レズ考ベシ

○歌仙行 二折

初表六句五句目月

初裏十二句七句目月十二句目花

名殘表十二句十一句目月

名殘裏六句五句目花

○歌仙首尾 ハ初

表名殘裏

○源氏行 三折

初表六句五句目月

初裏十二句七句目月十一句目花

二表十二句十一句目月

二裏十二句初裏二句

俳諧は源歌なり歌は天地開闢の時より有り陰神陽神

磯馭廬嶋に天下り座して吾與汝與行廻逢是天之御柱

而美計能麻具波比廻時伊弉册尊先言阿那通夜志愛袁

登古袁」と曰り賜ひ後に伊弉諾尊阿那通夜志愛袁登賣

袁」と曰り賜ひき是を歌のはじめなりとすれども心に

おもふこと詞に出るまでにて文字の數定まらず素盞

之男尊の「八雲たつ出雲八重垣つまごめにやへがきつ

くるその八重垣を」是より歌の文字みるひとともに定

れるとあり

連歌は 白川の法皇の御代にの名あり號て繼歌と

云ふ其先は人皇十二代 景行天皇の四十年日本武尊

東夷征伐の下向の時甲斐國酒折の宮にて「邇比波理都

余波表十二句二表二同
 余波裏六句 五句目花
 ○米字 四折
 源氏行ノ二裏ト余波
 表トノ間へ百韻ノ三
 ノ表裏一折ヲ入テ八
 十八吟ニ成モノ
 ○長歌行 二折
 初表八句七句目月
 初裏十六句 九句目月十
 五句目花
 名残表十六句 十五句目
 名残裏八句七句目花
 ○短歌行 二折
 初表四句月ナシ
 初裏八句 折端二月七句
 目花
 名残表八句七句目月

久波袁須疑豆伊久用加泥都流』と歌ひ賜へは、御火焼の
 老人續で唄ひ申すに『迦賀那陪豆用爾波許々能用比爾
 波登袁加袁』と繼げり是を世に連歌の始めと唱ふれど
 も文字定らず、又万葉の第八條に尼のしたる『さほ川の
 水をせぎあけて植し田を』といふに家持が『茹る早飯は
 ひとりあるべし』と續けたる是を連歌の根源と八雲御
 抄あとに云へり、或る人の『人ごゝろうしみつ今はたの
 まじよ』といへるに宗貞朝臣『夢にみゆやとねろすきに
 ける』又天曆の頃『さよふけて今はねふたくなりけり』
 といふに滋野の内侍『夢に逢ふべき人やまつらん』業平
 が伊勢國へ狩の使にとて参りけるとき齋宮の女御『か
 ち人のわたれどぬれぬにしあれば』とせられしに業

名残裏四句三句目花
 ○易行 二折
 初表八句七句目月
 初裏十二句 七句目月十
 一句目花
 二表十二句十一句目月
 二裏十二句初裏二同
 名残表十二句二表二同
 名残裏八句七句目花
 ○星韻 二折
 初表六句五句目月
 初裏八句七句目花
 名残表八句七句目月
 名残裏六句五句目花
 ○十八公 一折
 表十句九句目月
 裏八句七句目花

平が『まだあふさかの關はこへなむ』義家が弓に矢つが
 ひて『衣のたてはほころびにけり』といひたるに貞任『年
 を經て糸のみだれのくるしさに』と附たり、又宇治の左
 大臣が頼政に御衣賜はるとて『時鳥名をも雲井にあぐ
 るかち』とせられしに是をうけかざして『弓張づきのい
 るにまかせて』と仕りたりと申是等は古昔の事にて五
 十韻、百韻とつゝくること無く、只上の句にても、下の句
 にてもいひかけつれば即時に下の句上の句を付たる
 ものなり、百韻五十韻と續くるは 後鳥羽院の御時禪
 阿彌法師が小林と云ふ連歌差合其外法式の書を作れ
 り、是れを連歌法立のはじめとして、本式目は、建治二年
 鎌倉藤ヶ谷に於て、藤原爲相卿の作也（此時年十三歳阿

○十句表
古式百韻ノ表十句ニ
九句目花ヲ加ヘ月ヲ
五句目ニス發句春ナ
レバ第三迄ニ花有リ
九句目月ニスベシ十
句ノ内名所一ツ有ル
ベシ

四季詞寄

四季は春夏秋冬を以
て名とす、以前陰曆
を用ゆる時は春正二
三、夏四五六、秋七
八九、冬十一十二
とし其月の詞寄を擧
ぐ今陽曆を用ゆるに

佛尼公附添ひ賜ふよし、爲相卿は兩冷泉家の祖なり是
を弘安式目北林と號す、亦大道ともいふ、其後大納言爲敬
卿新式目を定め（爲敬卿未考、爲藤卿なるか爲藤卿は二
條中納言あり）普光園二條禪閣良基公應安五年改め書
替らる是を應安新式亦小道といふ、此頃江州石山に御
會ありし時の百韻に

月は山かせは時雨に鴉のうみ 二條禪

さ、波さぶき夜ころ更けれ 周阿

松ひと木あらぬ落葉に顯れて 侍公

其席にて侍公に宗匠の號をゆるさせ賜ふ、夫より花の
下と稱す、是宗匠の權輿なり、亨徳元年一條關白兼良公
時の宗匠宗砌法師に談し追加し賜ふ、文龜元年牡丹花

當り大に斟酌する處
有り、譬は一月の末
に立春あり二月に至
り立春あり故に詞寄
の不當を醸すると
雖も鶯の一月より啼
き、柳の青み梅の綻
ひる類ひは都てふる
きに倣ひ年立と春立
とは區別するものと
す年内のこと余は推
てゑるべし

○一月の部

新年 年立
睦月 太郎月
初空月 年端月

肖柏 後柏原院の勅を請て逍遙院藤原實隆公と合体
し、書加ふ是を新式今案と爲す
俳諧と云は黃門定家卿の云、利口也、物をあざむきたる
心なるべし、心あきものに心をつげ、物いぬ物にもの
を云はせ利口したる体あり、韻學大成に鄭察詩語俳諧
多し、俳は戯なり、諧は和也と唐に、たはぶれて作れる詩
を俳諧と云ひ又滑稽と云ふ、滑稽は晏子が楚人に答ふ
るが如きを云ふ、又本朝に一休和尚あり是等は人に相
當る、いはゆる利口也古今集にされ歌を俳諧歌と定む
是になそらへて連歌のたゞことを俳諧の連歌といふ、
八雲御抄に俳諧歌有り是はいかなるをいふにかあら
んまさしき様しる人なし云々

元日	元朝
元旦	鷄旦
元三	三朝
聖節	改旦
初空	初御空
初明	日の初
初日	初日の出
初日影	初鷄
初鴉	嫁が君
四方拜	朝賀
年頭	若水
包井	井ひらき
初手水	井華水
年の初	改年
明る年	迎年

(二) 俳諧 (三) 誹諧 (四) 滑稽
 (五) 諧謔 (六) 謎字 (七) 空戯 (八) 鄙言
 (九) 狂言

此等未辯之としるされたりをた卷に解して、俳諧は体も心もともに狂言あり、誹諧は体狂言にして心直なるなり、俳諧は詞字からことばのうたあり、諧謔は心あらはに聞えず外物にすがりて狂じたるなり、滑稽はまはりかしてしとよめり其心奥儀抄のことし、謎字はなそくのやうにいへる也、空戯は一向に戯て實すくなき也、鄙諺はいやしき詞をさらはで云立たる也、狂言は偏におかしきやうにいへる也、狂言といへる説によらば火を水とまげて云なせるとふとあり、菟玖波集の雑体

若き年	年立かへる
あらず玉の年	初年
年の花	去年
今年	寶船敷
初夢	いねつむ
稲あくる	元日節會
とよのあかり	
諸司の奏	七曜御曆
國栖奏	國栖笛
國栖人	腹赤奏
水の様	院拜禮
御慶	年禮
年始狀	禮者
三の朝	三の始
奏瑞	奏賀
年の雪	御降

連歌の部俳諧といへる條に「奥山に船こぐ音のきこゆなり」といへるに紀の貫之繼いで「なれる木の實やうみ渡るらん」又「あやしくも膝より上のさゆるかな」といへるに實方朝臣「こしのわたり雪やふるらん」とつけられたるよしあり是等は即妙なる心の俳諧といふべし、宗祇が三回忌に當れる追福の連歌有し時紹巴、宗長、貞徳、季吟等一順すみて後、宗鑑の發句に「世に散れど地獄へ落ちぬ木の葉かな」と口すさみしかば何れも俳諧体かりと申さるゝに宗鑑答て古今にも俳諧体の歌あり、世々和歌の達人も俳諧体にいひ捨賜ひし發句多し

ちる花をねつかけて行嵐かな 定家
 糸櫻花のぬひよりほころびぬ 爲世

年玉	屠蘇	桃湯	大根祝ふ	芋の頭祝ふ	青穂	鏡草	喰摘	搗栗	橘	密柑	開豆	梅干祝ふ	穂俵	野老
大服	椒酒	薬子	寒を祝ふ	芋の頭	太箆	鏡餅	蓬菜	かや	橙	柑子	串梯	開牛房		

こと葉俳諧なれども句意妙絶也是迄集會連歌に遣ひがたき言葉など言捨たる句に心のたけ高きも多かればいざ俳諧体の連歌を催しむば一しは興あるべし季吟曰ふ言葉も戯れにちかければ連歌の式より法度をゆるめ一座一つの物を二つにし七句去を五句去三句去を宇去などにいたさは此道廣くなりて然るべしと一座も夫に同じたりとて其後貞徳俳諧の式を作りて『御傘』と稱づくさしあひはならぬといふ義なるよし爰に於て人皇百八代 後陽成天皇の御時慶長三年戊八月九條玖山兼孝公近衛龍山前久公承りて法印玄旨法橋宗親法眼紹巴等に仰事有て俳諧宗匠を貞徳に免許せられ花の下の號を賜ひたり是俳諧の式定まり宗匠

俵子	結昆布	鏡斗	穂長	數の子	こまめ	料の物	鹽鱒	螺肴	花松魚	蛤	烏貝	鹽鱈	門松	注連銚	門銚
銚海老	もろむき	齒朶	裏白	田作り	小殿原	押結	掛鯛	海羸の身	串貝	淺蜆	干鱈	銚炭	藁盒子	門銚	

を許されたるの權興なり
 第三 正風之鼻祖
 芭蕉庵桃青は伊賀の國柘植郡の産にして彌兵衛宗清が末裔也松尾氏初の名半七又甚七後忠左衛門宗房と稱し同國上野の城主藤堂新七郎良精の臣となり嫡子主計良忠俳名蟬吟子に給仕す蟬吟子北村季吟の門に入る時共に隨ひ學んで師木島筑波の道を極む蟬吟子卒去の後東府に下りて檀林の輩と交り遊ぶ此頃世上に俳諧流行すれども風儀大に亂たるより爰に勘破して正風の一道を起す其風日々盛にして從弟月々加る凡二千有餘に至る薙髮して風蘿坊と號し芭蕉翁と稱す是正風俳諧の鼻祖にして今世同志者に祖翁祖神と

松鋸	大鋸
かさり繩	輪鋸
かさり竹	注連の内
松の内	鋸藁
福藁	掛庭
若餅	ひめ始
さそ始	節小袖
節振袖	試筆
書初	吉書
筆はしめ	謠初
舞初	吹初
松囃子	彈初
商初	賣初
買初	掃初
初荷	店御
帳絨	弓はしめ

尊敬せらるゝは是なり

第四 發句

發句は俳諧一座の卷頭なれば宗匠貴人老人の外あるべからず、可然人すべき事なりと八雲御抄にも其沙汰あれは初心の者は遠慮すべしと芭蕉翁の口授にも見たり、句の体伸々と和らかく詞やすらかに心おかしうよむべし、八雲御抄にも「發句は必いひきるべし、なにの、かには、なにを、かとはせぬ事也、かなとも、べしとも、又春霞秋の風、あざゝの体、にすへし」とあり、いにしへの名人も當代の初心も趣向には、ふたつなければ句作りこそ上手下手あれ、下の五文字を上にも置、中へも作りさまゝ工夫ありて一句とはなれるなり、別によき詞

馬乗初	船乗初
水祝	水掛祝
初曆	曆開
古曆	藏開
朝節	夕節
女の禮	浴室初
初風呂	破魔弓
破魔矢	羽子板
胡鬼板	羽子
こぎの子	遣り羽子
はねつく	手鞠
飾り手鞠	千壽万歳
万歳	鳥追
春駒	猿曳
大黒舞	懸想文賣
毬打	玉打

もあしき詞もなくみな、今日の人の通用する言葉を以て其人の發明にまかせ、さくら花とも、山さくら、とも上へも下へも詞と詞を、てにをはにてつゝくるによりて歌ともあり發句ともなれるなり、其詞をつねゝ口にいひながら其あつかひをしらぬは無下の事ども也

名月や池をめぐりてよもすがら 是等は何のこともなき、常の詞にしてむつかしく工む所なければとも、句主の働さにて斯く發句となりて姿情よく籠れり、いかによき趣向たり共、悉く句の面にいひ盡して外に聞所のあきは句作りの下手といふべし、祖翁の教に發句の姿は青柳の小雨にうたれたる如くに

いさゝらは雪見にこるふ所まで 全 是等は何のこともなき、常の詞にしてむつかしく工む所なければとも、句主の働さにて斯く發句となりて姿情よく籠れり、いかによき趣向たり共、悉く句の面にいひ盡して外に聞所のあきは句作りの下手といふべし、祖翁の教に發句の姿は青柳の小雨にうたれたる如くに

袖ぎちやう
 ぶりく 寶引
 福引 傀儡師
 夷廻 葩煎賣
 裏白連歌 三物連歌
 裏白俳諧 三物俳諧
 幸木 幸籠
 幸竈 庭竈
 福壽草 三角草
 元日草 卯杖十日
 粥杖十五日 粥の木
 かゆ柱 左義長
 爆竹 どんど
 溝どんど 吉書上る
 綱引 初霞
 梅の初花 青柳

してをりく 微風のあやみすもかかし、附方は薄月夜
 に梅の何處となくにはへるが如く、竹林を隔て琴聲を
 聞が如く情は心裏の花をも尋ね真如の月をも觀すへ
 し口は飛流のたうちに下るかどく句を吐出すべしと
 あり、

第五 脇句

發句の時節を違へす餘情をいひとるべし、發句神祇釋
 教戀無常時宜述懐あれば脇句もかむく其あしらひ
 あるべし、發句雜あれば脇句も雜あり唯の發句に旅体
 の脇はせぬものなり、諸抄に云韻をてにをはにて留る
 事なきにしもあらねども、功者の業なれば初心のする
 ことにあらず、發句脇句に限らず長句は意を残し、短句

初鶯 初若菜
 ○立春 春たつ
 節分 豆うち
 厄年祝ふ 厄拂
 新玉の春 御代の春
 明の春 千代の春
 君か春 四方の春
 今朝の春 花の春
 宿の春 新春
 春來る 新芒神
 太皞帝 勾芒神
 蒼天 東君
 青陽 上春
 太簇律 孟春
 正月 初霞月
 早緑月 春朝

は意を結ふを格とすれば、未熟にしてにをはに留る
 時は意残りて脇句の体を失ふ故なり、てにをは留の例
 といふは

續猿蓑

旅人と我名呼れん初しくれ 芭蕉
 また山茶花を宿々にして 由之

冬の日

霜月や鶴のつくく 双居て 荷兮
 冬の朝日の哀れなりけり 芭蕉

曠野

色々の名も六ヶ敷や春の草 荷兮
 うたれて蝶の夢は覺ぬる 芭蕉

昔より脇は亭主のなす習ひなれども首尾にるべし
 客發句とて、必だ客より挨拶第一に發句を爲す脇もこ
 たへる如くにうけて挨拶を付侍ることなり

正朔	歳徳神
明の方	とし棚
元方棚	門の神棚
元日不門戸星唱	
星佛	初子の日
子の自	小松曳
松曳	爪取らぬ日
祇園削掛	毘沙門功德
春永	水祝
桃符	桃板
桃梗	仙木
神茶鬱壘	書雞を戸上に貼
如願	葭灰飛
春盤	臨時客
天狗宴	たうやく
玉せり	東叡山大黒湯

第六 第三

是は發句と脇句との間より生りて發句の体にもどらず、丈高く脇句に轉るをよしとす、句がらいやしきは第三の本意と成さなければ大付にても轉じて長高くつけかるくしくすべからず、留かたの事ハ昔沙汰をし宗祇よりの格式あり常用る通りなり「疑ひの切字、發句の時ハ第三はね字にとめず」と古來いへり疑ひの句二句去故なりらんは疑ひのね字也、句中に押字有るや、かいつ、何、おどの類あり、都て初心には、て、に、らん、らし、もなし、かれや、の類にて意を殘すを格とす、韻字留の第三といふ事あれども功者の業あれば初心のする限りにあらず、されどむつかしき限りにもなく發句の文字にある

七日正月	人日
若菜	薺
芹	松
蘿蔔	紫縷
鼠麴草	雞腸草
五形	
七種粥	糝
蓴菜摘	薺蒿摘
磯菜摘	磯若菜
菜摘川神事七日	
箕面富七日	
白馬節會七日	
福百足初寅	番御初寅
御齋會八日ヨリ	
居籠九日	戎祭十日
常陸帶十日	初卯

韻を除き他の韻にて留め、心の下の句へ殘るやうにすればよし、もとより定まりたるてにをはの有るにあらず、意をあまして後に及ぼさん爲なれば初心は前の格より先つ入るべし、發句哉留の時は第三韻字留にすべし、杯いふ説あれど是は、にて、にかよふ哉の時に限るべし

第七 四句目振

四句目は一座の執筆又は老人童などの仕るべく、前句を受けてやすらかに、なりとも、けりとも、かるき留にてするをよしとす、むかしより四句め振りとして論は、鹽砂糖の水にあへるがごとく、やすく解け、かろく結ぶにあり、發句より四句目迄を起承轉合となし是より段々

住吉御弓十三日

八幡御弓十五日

男踏歌十四日

あらればしり

十四日年越 削掛挿

かさしのわた

女踏歌十六日 綱曳

土龍打 上元十五日

小正月 元夜

元宵 注連縄とる

三保祭十五日

獅子頭神事十六日

養父入 賭弓十八日

厄神詣十九日

吉田清祓十九日

法華三昧會

變化有るへきなり

月花の前句

月花の前句は都て月花に忌む詞を遠慮すべし、花に風嵐又は樹草の類ひ月に雨雲うの外夜体の吟はすべからず、將た花の前句に秋の字用捨すべし、戀の花はむつかしき業とすれば前句より謹むものと連歌に秘せり俳諧には沙汰をければ初心の態とすることはあるべからせ心得べし

第八 月花の定座

月花は其定座を違ふべからず、やむべからざる場合は沙汰の限りにあらず、祖翁が去來に示して花に定座かしといひ賜ひしは、意傳の業にて功者のうへの事なり

女節分十九日 鏡開

廿日正月 骨正月

嚴島詣下ノ亥天穿廿日

煎餅つなぐ 御忌

初天神 鷹替

初不動 余寒

春寒 冴歸る

凍歸る 凍解

氷解 氷流る

氷のひま 残る氷

魚氷に上る 春の雪

淡雪 残る雪

名残の雪 初東風

雨水 雪解

雪間 雪更

雪汁 山笑

り、連歌本式目地主権現の法樂百韻には花四本座定らす、月は五句去りいくつもする事よし、是等によりて示したまへるあるべし、引揚の月はするとも花は引揚ぐべからず、若し一座に貴人等賞翫すべき人の爲に、前句春季を出して其人に花を望む、これを呼出しの花といふ、連歌には四春八木とて裏の四句目春を出さず、八句目に高き植物をせずと、是は花につかゆる遠慮なり、俳諧も其心得あり、他は句をかへすに及ばず、春出れば花を附けべし、月はまた秋にて呼ひ出すにさ、はりあり、又月の定座をこぼすことあり、然し五十句うちには有るべからず、輿に至りては興あるものあり、歌仙には初裏の月よりこぼすとも苦るしからず、略式のものあり

獺魚を祭る 下萌
 根白草 鶯菜
 葑臺 ひこばへ
 土筆 つくくし
 墨子若菜 若草
 草の若葉
 駒かへる草 露の臺
 木の芽 草萌
 古草 下萌
 松の花 十かへり花
 若みどり みどり立
 野大根 堀入
 畑打 畑かへす
 田をすく 種物
 種はじめ 鶴庵丁
 町汁 廿日團子

ればなり此こぼれ月は繼句にて拾ひ附け成らば爲す
 とも其次はなすべからず月花の手柄に譲るべき爲か
 り月を折端にこぼす例しは前に月の障りあればする
 事あれど花は必らず折端にこぼすことをせず發句月
 又は秋にして脇に月ある時は表の月をせず他の季を
 月の定座へすべし發句花の時は初裏花の座に櫻をす
 べし是花は櫻にあらざ櫻にあらざるにもあらずとい
 へばあり

第九 句ひの花

名残の花を句ひの花といふことは通常の連歌俳諧に
 は有るべからざ故人の遠思を吊ひ遺吟脇起し或は祭
 事神詠の發句等の時懷舊の意を表し其昔を追慕する

干蕪 干大根
 白魚 猫の戀
 妻乞猫 仇猫
 ねこさかる
 直會祭 七日
 相馬墨塗 十四日
 伊勢世ためし
 三社神事 十四日
 上野連歌 十一日
 義仲忌 十五日
 鬼追 十四日
 子の日の衣
 梅の花衣 梅かさね
 鶯袖 柳の衣
 梅ヶ枝諷
 大芹うたふ 青柳諷

感情なり附方は發句の心を取り賞賛して花に結ひ句
 はすを云ふ異説發句の詞文字を其儘に取り韻をふみ
 て花に結ぶよし又名残の花には香を炷故句ひの花な
 りといふは不相傳の限りあり

第十 揚句

揚句は一卷の首尾を結ぶものにて大方は執筆これを
 なすなり附方は頌の心を以て已の趣向を工む事か
 れ揚の花に神祇釋教出れば揚句にも其心あるべし先
 は一句にありて隙の入りは不興あり祝儀の調ふやう
 に速ちるべし或は豫て心得置き花の句出たらはすぐ
 さま付るを働きとする也揚句に發句の文字を思む又
 發句のぬし揚句すべからざ是は首尾一人に結ぶとて

万歳樂	春鶯囀
梅	花の兄
春つげ草	匂ひ草
この花	飛梅
やり梅	野梅
好文木	鶯宿梅
臥龍梅	行幸梅
未開紅	梅か香
梅屋敷	梅曆
○三春に渡るもの	
春	春日
佐保姫	霞
八重霞	霞の海
霞衣	霞のあみ
霞の洞	霞汲
鐘霞む	長閑

忌むことなればあり

第十一 速吟遅吟の心得

附句は前句の姿情を収め吟案すべし早きをてがらに一座の辞儀もなく先へくといひ出せば前句に付かつかぬか豫て拵て来て猶先會外にてせし句又は余所にて聞かぢりし他の句など中出る者近頃あるは苦々しきことにて八雲抄にも『いたくいとしもなき連歌おもひ出すをせんにばやくする事返々みくるし連歌を人にしばし案せさせてすれば人もかんぞる也いまだ誰も案しいれぬさきにまづればよしあしをも思ひわかでしたるしるしもあく云々和歌にもあまり案じて入てよき歌は出来ず只やすらかにとは初心のうち

麗	暖
ぬくとし	水ぬるむ
陽炎	糸遊
春の山	春の海
永き日	遅き日
鶯遅き	暮かぬる
春の色	東風
春風	春雨
春の雨	風光
春の宮	落梅曲
萬春樂	喜春樂
春の月	朧月
椿	玉椿
白玉	つらく椿
柳	風見草
かた葉草	川柳

教へなり貫之は一首の歌に十日廿日かゝりて案せしと抄物にあり詩にも季煉月鍛とて年にねり月にきたひて作るどかり俳諧にはさほど案じ入るにはおよはずとも前句を味ひ我一句を調へてつくべし付くるに至りて再考再案するはあし遅吟の思ひつき遠くして詞どなは遅吟は詞はしりて意どかざるものなりよく辨ふべきことなり

第十二 發句の切字

哉 もかな かもな けり けりち たり らん
 む めり や、ぞ、し。 はあし けらし ならし
 さふな かしあ か、 やは かはこそ
 かりいかに 何、つ、 らづれ など たれい

玉柳	さし柳
柳髮	柳の眉
芹	三葉芹
蒨葎菜	防風
獨活	荳
唐荳	川荳
山葵	蕤姑
摘草	山椒の皮
野老堀	木地爐綠
百千鳥	鳥さかる
囀り	水鳥囀る
雉子	鶯
經讀鳥	人來鳥
歌詠鳥	金衣鳥
匂ひ鳥	花見鳥
鶯笛	鶯菜

つ けれ さぞ よ、ぬ、に、て、

右大略此類にて考べし此外に

下知の切 心の切 二字切 三字切 をまはし に

まひし 大廻し 二段切 三段切 玄妙切 是等は

師傳を待つべしと増山の井にはいへり

哉は 治定のかな しづむかき にてにかよふかき

かは 中のか 哉にかよふか

○七ツのやといふは 口あいのや 切や 捨や 疑

のや 中のや はのや すみのや こしのや

○三ツのしといふは

◎現在 白し 寒し 遠し 短し 長し 遅し

●未來 べし あらじ 見たし まし

鶯	琴引鳥
てりうそ	駒鳥
雲雀	雲雀の床
雲雀笛	姫雛鳥
雲に入鳥	鳥雲入
鱒	鱒
鯪	江鯪
干鱈	洲蛤
蜆	蜆取
田螺	田螺取
焼田螺	目刺鱒
海苔	青海苔
紫雲苔	櫻海苔
鶏冠海苔	淺草のり
若布	相良布
新荒布	鹿尾菜

此ふたつの類は切字なり

○過去 ありし 思ひし あかりし なかめし

見し 聞し

此しの類は切字にならず一首の歌に三ツのしるなは

る歌

君か代の久し[○]かるべきためしにと

かねて不植し住吉の松

○ふのぬおはんぬ

ささぬ ちりぬ しりぬ とひぬ 此分畢ぬ

切字也

さかぬ ちらぬ しらぬ とはぬ 此分不のぬ

不切也

海松 海雲 染めをど

○二月の部

如月 衣更着

梅見月 小草生月

雪解月 令月

二日灸 吉野餅配

日光御鏡開

二ノ替リ 凧

紙鳶 出代り

苗代 水口祭

種井 たね浸

たねおろし 種蒔

藍蒔 麻蒔

狗脊 蕨

早わらひ 鑑わらひ

右ぬの字の下にると付は畢ぬ也るの字付すしてすに通ふを不のぬと云ひ切字にあらす

○する

何ふと受たる末はると結ふなり

花ぞ散りぬる 人ぞ來にける 雪ぞ降りつる

又かるにかよふきにて留るもあり

聲聞時ぞ秋はかなしき 人ぞ戀しき

○こそれ

こそと受たるには、れと結ふあり又めともけともねともへともせとも結ふ格あれども、かなのつかひ變化によればこれをこそれといふ

第十三 作例

紫塵	靴草	虎杖	鬼あさみ	蒜	刈葱	水葱摘	菜の花	紫草	五味子	春ゆり	鬘草	畑焼	山焼	焼野の芒	萩の末黒
蒲公英	五加木	薊	薊	胡葱	野蒜	薺の花	大根の花	若紫	貝母	連翹	燒野	芝燒	末黒の薄	萩の燒原	

治定の哉

薄曇り氣だかき花のはやし哉 信 徳

もがち

こんやくにけふは賣勝若菜哉 芭 蕉

まつむ哉

蝶かるしころはさる物ひとつ哉 湖 春

がもな

二季に咲く彼岸櫻の種もがな 貞 徳

けり

震蕁の残りもがもを菊なます 知 足

けり

見しりたる手代もがもを葛 其 角

けり

冬は又夏がましやと云ひにけり 鬼 正

けり

木からしの果は有りけり湖のおと 言 水

けり

植けりを鎌研くささのかきつはた 桃 雨

けり

干瓜の舟さへ出たり星むかへ 麥 林

芳宜はぎの稚葉わかば 草くさの若葉わかば 草芳くさし
刈生の芒か 切刈きりの芒か
青あおからし 角組かく蘆あし
蘆あしの角かく 蘆あしの錐い
種芋ねづ 杉菜さしな
松菜しょうな 蓬摘ぼん
芽花めがは 紫雲英むらさき
○春分中 夾鐘律あは
驚蟄節おどろ 春半はる
仲春なつ 陽中やう
中和節ちゅう 初花月はつ
餘寒あま 春寒はる
冴さかへる 凍こかへる
獻生子けん 水間祭みづ
東福寺懺法とう

らん 稻妻いなづまのはしまり見たみたりた。不破ふの關せき 荷か 翠すい
むははなをい一い字じはね 古曆こはしきひとにはまいらせむ 去こ 來き
めり 獨ひとりのる舟ふねつくらせむかきつはた 周しゅう 也や
現在げんのし まぎくと居ますが如ごとし魂祭まり 和わ 之の
未み來らいのし 落おかゝる桐の葉かろしひとへ物 山さん 川がわ
ト 味あじ増あで煮て喰とはしらじ鶏頭けい花くわ 芭ば 蕉せう
もなし 花はなあくばくる人あらじ七まがり 父ちち 鉞せん
もなし むつくと句くふてもちし桃の花 木き 因いん

本妙寺詣 摩耶參
行基參 春日祭
二月堂行 春日祭
二月堂水取
松明り 薪能
芝能 若宮能
大原野祭
八幡初卯參
園并韓神祭
釋奠上丁 事納八日
祇園御八講
比良八講 祈年祭四日
列見十一日 遺教經會
涅槃會十五日
ねはん像 さりし佛
佛如わかれ

何なにもなし我頭が陀だ袋ぶくろなつはらる東海かい
歸かへり花に盜む氣なし懷ふ手て 麥むぎ 林りん
わが酔ふて響なるでなし桃ももの花 松しょう 笛ふえ
行ゆ女をんなみかへりけらしはちたゝき 軒けん 柳りゅう
醫い者しや呼よびに行おとならしよるの雪 通つう 達たつ
ひらくと木の葉は動うごきて秋あき予よ立た 鬼おに 貫くわん
石い女をんなのひあかしづくぞ哀あはれなる 嵐あらし 貫くわん
庭にはにさへ嘸を落葉おちはひがし山 立た 甫ふ
ふれかしちまはあしくと春の雨 幽ゆう 齋さい
澄すみかねて道みち迄まで出でるかやま清きよ水 嵐あらし 雪ゆき
中なかのか 鶯うぐいすの娘かなかぬほとゝきす 守まも 武ぶ
哉やにかよふか うちつけにひしくも有ありか聖せい靈れい會かい 一ひと 水みづ

二月の別
 西行忌十五日
 常樂會十五日
 餅花煎十五日
 嵯峨柱炬 積塔
 雪の果 雪の別
 見寄廿日 見寄の風
 踊念佛
 圓宗寺最勝會
 聖靈會 淺間祭
 北野御忌日 初午
 二ノ午 菜種御供
 道明寺祭
 吉祥院八講
 龜戸花踊 季御讀經
 時宗踊念佛 社日

やは	ぬがてやは千手觀音ころもがゑ	其角
かは	福壽草やはあけかたのうめの花	富丸
こそ	皆人の見るはかりかはけふの月	丈草
あり	くらへ馬神の科かはまけのかた	周木
あり	されはこそあれたき儘の霜の庵	芭蕉
いかなる	白魚に價ひあるころうらみあれ	全
いかに	さかぬやうに人はいふあり時鳥	鬼貫
	鶉のつらに箝こぼれて哀あり	荷分
	常に見る火を燈籠にあはれなり	越人
	盗人にあふた夜もあり年のくれ	芭蕉
	瓜の花車いかにあるわすれぐさ	全
	扇をりいかに持たるあせぬぐひ	千那

社翁の雨 彼岸
 六阿彌巡り
 目黒九品佛 初雷
 初電 初虹
 燕 つはくら
 乙鳥渡る 乙鳥の巢
 鳥の巢 古巢
 貌鳥 かほよ鳥
 杲鳥 引鶴
 引鴨 歸鴈
 鴈の名殘 今はの鴈
 北へ行鴈 いぬる鴈
 鴈の別 鴈風呂
 雀子 孕雀
 親雀 雀の巢
 松むしり鳥

いづれ	みの、目に若結いかに五十鈴川	麥林
いづこ	梅やあざいづれ階子のさし所	龜林
いづら	橋となる鳥はいづれ夕からす	其角
いかい	猿丸のやまかげいづこ網代守	正義
いかにせん	片ろきの本社はいづら夏木たち	昌維
何所	築地あるあたりはいかに鉢叩き	周竹
何	いかにせん御礼きはづく春の雨	荷翠
	兼好がむしろはどこの稻のはち	麥林
	五月雨何を茶にくむよどの人	鞭石
	水仙はどかく何そのかへりはな	松翠
あど	人はなど散るを見て居ぬけしの花	萍水
いく	子をもたはいくつなるへき年の暮	其角

苔むしり鳥	朝の鷹
白尾鷹	繼尾鷹
佐保姫鷹	泊り鷹
泊り狩	泊り山
鳴鳥狩	さしすゑ鳥
鈴子さす	
鷹化て鳩と成	
孕鹿	落角
鹿角落	蜂
似我蜂	蜂の巢
蛇	蛇
蛇穴を出る	
石龍出る	蝮
地虫穴を出る	蝶
てふく	胡蝶
鳳車蝶	蛙

たれ	ぬしはだれ木綿なだる、秋の雨	尙白
たそ	聲せぬはたそ、粥くはす鉢た、き	法三
たが	たが居りて石あたし、かにはつ櫻	常牧
かも	柴刈てゐるかも、しらぬ雲のみね	明水
いつ	朝かほにいつ宿出し御使ひ	其角
さぞ	後はさぞ祇園清水はなのほる	季吟
いさ	あの山の上からはいさ一かすみ	去來
いざ	いざさらは雪見にころふ所まで	芭蕉
つ	月はみつ、廣さは酒にひとおよぎ	如件
よ	いぬくと人にいはれつ、年の暮	路通
	白魚の餌にあるものよ、水のあは	貞隆
	ちる時の心やすさよ、けしのはな	越人

蛙子	蛸手
おたまぐつ	墓
馬刀	寄居虫
蝮	やどり貝
田螺啼	龜鳴
諸子魚	初鮒
飯蛸	鮒子取
治聾酒	鮒鱈
蒸鰈	接骨木の花
銀杏の花	紅梅
黄梅	座輪梅
さくら梅	接木
接穂	菊の苗
菊若葉	菊根分る
藪蕎麥	藪の若葉
花を待	花を尋る

よ	みる若衆見らる、花よ仇くらへ	幸佐
ぬ	内裏へも簀きていりぬ、菖蒲うり	櫻邊
けれ	ひとつ脱て後ろにふひぬ、衣更	芭蕉
	わか心鞭に遅けれ、さくらかり	松木
	鳴鹿もさかるといへはおかしけれ	團雪
を	やかて死ぬけしきは見えず、蟬の聲	芭蕉
げに	夏さくは實にぬち、藤の花ころ	貞徳
や	みしやこれ牡丹の花のあた、かさ	文丸
	としくやみそ、萩賣の得意なき	梅氏
	水うてや、蟬も雀もぬる、ほど	其角
	花なれや物にすぐ人すかぬひと	不及
	唐さきやとまりあはせて、初時雨	隨友

花育つ雨 花の父母
 初櫻 彼岸櫻
 一重櫻 山櫻
 糸さくら 姥櫻
 熊谷櫻 見さくら
 いぬ櫻 温め種
 鬼押一日 鳥祭上未
 清盛忌四日 湯嶋天神祇餅
 兼好忌十五日 元政忌十八日
 利休忌廿八日 俗洗
 百日男歸 六角豆蒔
 既出し
 ○三月の部
 櫻月 花見月
 彌生 禊月
 病月 竹秋

や 白雲のたつや四月のよしのやま 燈外
 家たつるちからやなくてさく島 軒柳
 のこる葉ものこらすちれや梅嫌 如生
 るゝにかよふるは切るなり、思はる待たるの類ひ
 ○其壹 下知の切
 よ みの虫のねを聞に來よ草のいは 芭蕉
 りのふるさ瓢箪見せよ鉢たゝき 去來
 れ 心あらは炭竈つくれよしの山 竹翁
 なかれ ちりたがる花にももの云ふ事勿れ 麥林
 ち 文七にふまるな庭のかたつふり 其角
 ちよ はらふちよ皆名所のむきばこり 麥林
 へ 先いはへうめを心のふゆこもり 芭蕉

春借月 經供養二日
 寒食 杏粥
 棗粥 青飢飯
 揚花粥 青精飯
 桃花粥 椽下舞
 上己三日 重三
 元己 上除
 己日祝 須磨の御祝
 桃花の節 桃酒
 白酒 草餅
 蓬餅 母子餅
 菱餅 雞合三日
 雞 雞遊
 紙雞 雞飾
 雞祭 雞市
 立雞 内裏雞

へ 常住をふるまひたまへ鹿のこゑ 彫堂
 ろ 花に遊ぶ蝶なくらひろ友すやめ 芭蕉
 け こちらむけ我も淋しき秋のくれ 全
 て そこにまて花よりまへの仁王門 時正
 せ 比良三上雪さしわたせ鷺のはし 芭蕉
 め 思ひあらは廊におとせ風のほり 我黒
 め 唐崎の松にはちじめほととぎす 龜林
 ○其貳 心の切
 古法十八字の切は論をし、二字切、三字切、二段、三段、挨拶
 切も、心の切の惣名にしてまして、大廻し、玄妙を廻し、に
 廻し、中の切の類別名一体とおもひ名目は初學の便と
 するべし、古式の切字十八とは名付るものゝ、其中より

雛棚 野遊
 踏青 彌生山
 油花ト 曲水宴
 流觴 巴字盞
 羽觴を飛す
 御燈三日 柳盞
 柳太刀 鞞鞞
 ふらこゝ 汐干
 蛤にじる
 硯石取三日 石山祭
 粟津祭
 一乗寺祭五日
 修學寺祭五日
 水尾祭九日
 高尾法華會
 安良比花

枝葉を別ち古今數多の名目とはあれり、詩の三百篇も
 思無邪の三字に籠るとかん、初心の輩名目にかゝはり
 て脇道にまよふべからず、發句自問自答する所あるよ
 り一句立の働をさす、其問と答るとのてにをはを切字
 といふ

是はくとはかり花のよし野山 貞室

此句かなと末に詞を添へて聞くなり

憎まれてあがらふる人ふゆの蠅 其角

此句人こそ冬の蠅あれと詞を添へて聞くなり

唐崎の松は花よりおほろにて 芭蕉

此句を蕉門の秘授とする所は臆にてといふ詞は、まさ
 しく哉といは、治定の難を恐れにてと心を返された

吉野會式十一日
 藥師寺最勝會
 泉涌寺開山忌
 禮拜講十三日
 稻荷ノ御出
 石清水臨時祭
 善導忌十四日
 花鎮ノ祭
 祇園一切經會
 壬生念佛 壬生祭
 千本念佛 比良祭
 梅若祭
 木母寺大念佛
 嵯峨大念佛
 勸學會十五日
 人麿祭十八日

るものにて、花は花よりも臆ある方が面白からんかと
 花に對しての風情をいへはあり、さゝ浪や眞野の入江
 に駒とめてひらの高根の花を見る哉、此歌の心あらず
 は此句得たりといふべからず、此句を臆の傳授とて重
 きことにいへる家も有るよし、すべて餘情に切を添へ
 て聞くこれを心の切といふ

○去來、丈草、嵐雪、其角、許六の五人、祖翁に切字の事を問
 ひたるに、祖翁は五人に五品の答をせられしよし
 去來には假名皆切字也、唐崎の松は花より臆にて
 丈草には盡なり 『猫の戀止む時閨の臆つき』
 嵐雪には節なり 『景清も花見の座には七兵衛』
 其角には奇なり 『梅若菜鞠子の里の諸蘗汁』

三社祭十七日
 本門寺千部
 御身拭十九日
 仁和寺御影供
 姑洗 律 花
 花の山 花心
 花筵 花笑
 櫻 伊勢櫻
 櫻狩 夢見草
 桃の花 海棠
 櫻桃の花 浦梨の花
 辛夷 姫つゝじ
 藤かつら 通草の花
 白山吹 仙臺萩
 鼠麴草 菊の植替
 利茶 糯花

許六には是非別るなり『夕かほや秋はいろくの瓢哉
 如斯の引句にて考あるべしとなり是を世に芭蕉の五
 問答と名付理外の理ありともてはやし武者の小路殿
 も連歌の大事も是あらんと申されつるよし
 ○其三 二字切三字切
 二字切 君火たけ『能き物見せん』雪丸け 芭蕉
 かいで見よ『何の香もなし』梅の花 貞室
 泣もしつ『笑ひもすらん』二ツ星 風山
 子供等よ『晝顔咲きぬ』瓜むかむ。 芭蕉
 ○其四 を廻しに廻し
 青くてもあるべきものを唐辛 芭蕉
 いさと見に行べき物を雪の不二 全

三月蘿蔔 鳥歸
 櫻魚 鱧
 飼屋 爐名殘
 行春 春の名殘
 鷺森競馬
 焙爐炭下だす
 狐隊 小弓引
 清明節 花盛
 花吹雪 花の肌
 花瓶 花軍
 家櫻 雪珠櫻
 秋色櫻 曙草
 白桃 ねむれる花
 小梅の花 木瓜の花
 しでこふし
 段つゝじ

に廻し 木曾の瘦もまた直らぬに後の月 芭蕉
 ○其五 大廻し
 大廻し 行春をあふみの人としみける 芭蕉
 うち立て、天の原みる筆はしめ 虎海
 うちたて、筆はしめとさはる也、能くく、一句をくり
 返し吟して味ふへし『久方の光長閑き春の日にしつ心
 なくはなの散らん』此歌の心思ふべし
 ○其六 二段切三段切 又三名切ともいへり
 二段切 『歩行ならば杖つきさかを』落馬哉 芭蕉
 三段切 『目に青葉』山ほととぎす』はつ鯉 素堂
 ○其七 玄妙切
 人に家を買はせて我はとし忘れ 芭蕉

下り藤	小粉團の花	いもに似る草	水薺の花	若蔣	雪柳	時鳥の巢	小鱒	巨樋塞	春におくる	初瀬千部	烏賊	穀雨中	花錦	花笠	八重櫻
			堇	手はじめ	草摘	櫻鯛	蠶棚	春の別れ		仙臺馬市	高雄女詣	花曇	花の唇	飛火	江戸櫻

春もや、けしき調ふ月とらめ 芭蕉
 是は月の句にも梅の句にもあらざ、又平句にてもなし、
 しかと發句にして切字一句の妙をうなへたり
 咲みたすも、の中よりはつ櫻 芭蕉
 余の草にたとへおとるとけふの菊 和 及
 是は切字なくして切るの例となす立妙にも、心の切に
 もあく、此切かた分別あるへき事になん、しかし初心の
 ものわざとすべき事にはあらず
 ○其八 にけり三段けり
 にけり 荷ひ茶屋も花みる人』に成に』けり 可 全
 初夜と四ッあらうふ秋』に成に』鳧 來 山
 三段けり 『時雨けり』走り出しけり』止にけり 芭蕉

人丸櫻	俳桃	石楠花	躑躅	藤棚	春菊	壺すみれ	青葉	萍初て生ぞ	田鼠化爲鶉	櫻貝	春蟬	春過	墨直し	楓の花	季春
吉野草	からなし	草木瓜	源平つゝじ	山吹	馬關	櫛花	桑の葉摘			若結	めかる時	春の暮	麥の穂	順の峯入	花の雲

○其九 や哉
 や 哉 煤や、はくにこれる京のあかれ哉 梅 道
 菜の花や、足ることを知るあるし哉 舊 室
 是等は後に置たる冠五文字なれば上にや、と切字あり
 ても哉と留まるなり、上に中のやすみのや口合のや等
 ありて下に哉と留る事たとへば『雪や、ふる曇りて比良
 の高根哉』このるいいかほともありてめつらしからぬ
 事なるを諸抄に秘事口傳とむつかしく書り、知れば事
 なし、知らぬはむつかし、初心にしてすべからず
 夕かはや、秋はいろく、のふくへ哉 芭蕉
 秋はといふて下に心を寄て見るへし甚妙の句也
 朝顔や、扇のはねをかき根か、其 角

花鳥	花籠
花の香	落花
普賢像	鹽竈櫻
手鞠櫻	仇名草
源平桃	蘇枋の花
梨の花	揚梅の花
山つゝじ	さきり鳥
ふち綱	茶籬花
高麗菊	金盞花
白すみれ	菜耳
棗の花	けまん草
麥鷄	鳶の巢
櫻鮠	あゆ汲
八十八夜	蛙に眠る
歸る春	夏近き
十三參	麥の花

是又扇の骨をと受けたれば垣根かなと留るなり

第十四 古式切字十八といふは

や 哉 がな けりあ らん めり けらし ちらし
いづこ いづら いかい いかにせん かも やあ
かや たしな あやな

右は古風めく切字とて此うちや切留の外は當流に
好す併し句作りにより用ひぬとさたむるにはあらず

第十五 哉の分別

題の哉 傘におし分見たるやなきかあ
雲雀哉、螢哉、月夜哉、時雨哉、此類にして子細なし又落着
の哉といふ

治定の哉 春たちてまた九日の野山かな

九春	花の雪
花見	花車
花の雨	花の鈴
揚貴妃	金王櫻
櫻戸	雲井櫻
西王母	李花
ありのみの花	
馬酔木の花	
餅つゝじ	藤
ふちの丸	草山吹
東菊	金鳳花
眉作花	囊荷筭
杲欄の花	
母子草の花	
ひゝなき	鷹の巢
柳鮠	柳葉の魚

山路哉、野中哉、大路哉、都哉、麓哉、の類其さま治定するを

り

稱美の哉 蓮瓶のせまき中にもうき葉かな
句ふ朝日哉、晴れたるあした哉、の類稱美せしをいふ

嘆息の哉 牛呵るこゑに鳴たつゆふへかな
おもひかあ、うらみかあ、すべて嘆息の詞をうけし哉也

現在の哉 おもしろし、花より松の臈かあ
是は現在のしにて切ゆへ哉とどまらずやにて切も同

前、おもしろきといへは留る也

わり哉 此頃のおもはるゝかあ、稻のあき

冠五の哉 さくら哉は、木の先にかゝる迄

中に哉遣ふは一句をたしかにすへく、上に哉といふ時

忘霜	櫻衣
暮春	夏を待
蓮如忌廿五日	芹の花
永代寺山開	末春
花の浜	花の宿
花筏	花衣
花びら	墨染櫻
右工門櫻	櫻田
不斷櫻	姫松
杏花	妻梨の花
長春	岩つゝじ
ふち浪	藤蔓
おもかけ草	春蘭
丁子草	あさみ
柿臺	庭梅
ゑにすた	鶉の巢

の一句を貫く故に心なく、若きもの又は初心にしてせぬ事なり、よし云ひ得たるとも遠慮すべしとあり
うき哉 月清し今宵は汐もみつるかな
十四夜の眞とは月のみてぬ哉
霞む哉、匂ふ哉、光る哉、何れもらんとすへかゆれば疑ひとなるあり
如此うくすつぬふむゆるの假名より續く哉は皆浮き哉也、故に上に切字を遣ひしも浮哉の切れさるといふに
あらず、切れるといふにもあらず、分別あるべし『木枯の身は竹齋に似たる哉』『うれしさは木かくれ梅のひとぬ哉』是等も浮哉なから一句の治りなるを見るへし、連歌にこの浮哉取分け初心に過當なるよし宵柏老人も

引殘鶴	白鯨
鶯	別霜
山吹衣	惜む春
夏隣	
宗因忌廿八日	
齊の花	晚春
花の朧	花の戸
花入	花妻
花の園	虎の尾
歌仙櫻	櫻人
かざし草	糸桃
林檎の花	棠梨の花
沈丁花	岡つゝじ
白藤	ふち瘡
八重山吹	ほくり
化偷草	青麥

申されしよし、猶一句の治りに工夫有るべし
しづむ哉 冬かれに風の休もなき野かな
あき野かな、としつむなり、花にかな、鳥をかな、とすればしつむなり、言葉残れはとまらぬにはあらねどこのまざる哉あり
疑ひの哉 花に寐て夢より君に死んかな
哉とすへて心にうたかひあり、或は疑ひ返す心有り分別して知るべし
言葉切て 武士のさゝなくさまん霞かち
意の續哉 駕かりて淡路へのらん沙干哉
さゝなくさむへきの意、淡路へのるへきの意、言葉切て下へ意の續くあり

茶摘	令法 <small>はたつもの</small>
三月菜	呼子鳥
おひかは	蠶飼
爐塞	つゝし衣
春の隈	
隠元忌三日	
尙齒會	
おばゝの巾着	
春抄	花守
花の主	花桶
花の都	
○四月之部	
余月	乾月
正陽月	花残月
己月	得鳥羽月
卯月	卯の花月

察する哉 朝貌のたねとる人のこゝろ哉
 聲かれて瀬にたつ鹿の思ひ哉
 人情は更なり鳥獸草木ども其物にかはりてこゝろを
 かしめかるなり
 たゞみ哉 梅柳さそわか衆かち女子かち
 さぞと察し若衆哉女子哉と疊むなり是は尤三段の格
 也
 口合の哉 飛蝶をわはやと見たる淵瀬かな
 くさむらの霜ふむ鳶や鴉かな
 是は淵瀬ども鳶や鳥ども留るに哉と口合たるものに
 して又捨る哉ともいふ
 を廻し哉 湖の睦月さむきをふち路かな

仲呂律	立夏節
小満中	躰躰
孟夏	首夏
初夏	新夏
青和	更衣一日
白重	夏衣
卯の花衣	橘衣
あふひ衣	初袷
あはせ	綿貫
夏羽織	下げ帯
青簾一日	孟夏旬一日
筑摩祭	鍋まつり
筑摩鍋	鍋を重ねる
鍋の敷	貴船神事
虎杖くらべ	
氷を供す	

を廻し哉 枝あがしきらぬ習ひを椿かな
 を廻しになしたるを哉にて留たるなり舟遊ひとも玉
 椿ども留うるを捨たる哉あり
 名所のや哉 かつらぎやたかまと山は月夜哉
 人名のや哉 道灌や花はうの代のあらしかな
 名所人の名のや哉はよび出しのやにてくるしからず
 ちとこゝろへたる多し名所あればとてや哉つかふべ
 き様なし證句の如くふたつにふりわけてつかふべし
 山は花はこのは文字に心をつけて見るべし
 にてにかよふ哉 うかくと海月に交るあまこ哉
 ひと露もこぼさぬさくの水哉
 生海鼠にて氷にてとかよふを哉と治定し留たるなり

住吉卯の祭
大神祭上卯
稻荷祭中卯 龍頭太

山科祭上辰

八瀬祭全日

堅田祭上巳 多賀祭

手安天神祭 平野祭

當麻祭 杜本祭

梅宮祭 松尾祭

當宗祭 大津祭

吉田祭 廣瀬祭

龍田祭 山崎祭

地主祭 伊勢神衣祭

日光祭十七日

名古屋祭禮

和歌祭十七日

此哉の發句には第三て、にらんにとまらす韻字留をなすべし

第十六 や切の分別

題のや 　　はる雨や蜂の巢つたふ屋根の漏
青柳や、笋や、夕立やの類にて別に子細なし
治定のや 　　原中やものにもつかせ啼ひはり
道の邊や、海原やの類其様治定あり
稱美のや 　　ぬれ色や大かはらけにはつ日影
嘆息のや 　　身の秋や赤子も參るかみ路やま
願ひのや 　　蓬萊にきかばや伊勢の初たより
おしはかるや 　　春なれや名もあき山の朝霞
下知のや 　　水うてや蟬もすいめぬるゝ程

土塔祭十五日

向日明神祭 久世祭

菅宮祭 山王祭

國祭 御影祭

關白賀茂詣

菅笠荷ふ 賀茂祭

葵祭 葵かつら

諸かつら あふひ草

御形日 みあれの日

日蔭葛 日かけの糸

神祭 忌さす

榊さす 榊取る

三枝祭 吉日にらふ

中山祭 嵯峨祭

近江八幡祭

山崎日の使

はさみや 旅をして見しや浮世の煤はらひ
口合のや 南無や空たい有明のほどゝぎす
花や月、行や年、來るや春の類ひなり二ツの中へ文字を
入れたるを口合といふなり、あへて切字にならずとい
へとも一句の治りにて句の調ふことを知るべし
捨や 年のくれ女の眼鏡すさまじや
捨やは上五文字にてにをはの文字なくして切れ下に
やといひ捨たるなり、またてにをはにて切り、下に捨る
やは疑ふところあるべし譬へば

籠り居て木の實草の實拾はゝや
一と里はみな花守りの子孫かや

籠り居てと詞切、拾はゝやと捨たる、皆花守りとは

水屋の能	擬階奏 <small>ぎのうまう</small>
灌佛	佛生會
龍華會	浴佛
佛産湯	甘水
五香水	花御堂
誕生佛	
戒壇堂開帳	花摘
當麻盞供養	
三井寺千團子	
高野花供	駒牽
大矢數	通矢呼 <small>とほりよ</small>
矢數扎打	松前渡り
和清天	梅天
梅雨	卵の花下し
余花	殘花
青葉に交花	若葉

にあたり、ひと里はとことほり、子孫かや、と捨たる、猶分
別すべし
休たるや、いかめしき音や、あられの檜ひのきがさ
中七に、降るや、雨、たつや、霞、暮るや、月、など、詞ことばと詞ことばの中に
休めたるや、をいふ、定家卿のや、文字の分別やすからぬ
よしに言はせられしも、是等のや、文字あるべし
疑ひのや、人や、來し柳みたる、よひのつき
疑のや、二色有り、片疑といふはや、とはかりいふて下を
おさへぬをいふあり、春や、立らん、宿や、とらまし、君や、來
し、の類ひみなもる疑なり、分別あるべし
とや、星さきの闇を見よとや、啼なぐちどり
これをとひかけて、にをばといふ吟して知るべし

新樹	若葉の花
若葉の紅葉	若楓
病葉 <small>わづらは</small>	鶯の卷經
むすび草	夏木立
茂	木草茂る
木下闇	葉柳
葉櫻	櫻の實
楓の花	厚朴 <small>はうぼく</small> の花
桐の花	卵の花
うつ木の花	
花卵の木	はつ見草
雪見草	
卵の花の雪	
卵の花の月	
棗の花	袖の花
花柚	花橘

呼出すや、汐越しや、鶴脛つるひざぬれてうみすいし
名所のや、多くは呼び出しのや、ありといふ、かつらきや、
からさきや、の類考吟あるべし
疊や、遠里のむきや、菜種ななや、あさかすみ
世や、秋や、海人あまがすて子のちかくも鷗う
ねなしや、うなるものをおしかさねていふ、雪や、霞や、鶯う
や、青鷗あをうや、の類ひなり
腰のや、むつかしきすゑのどまりや、幟のぼり竿さ
こしのや、よく作らされぬ、遊ひや、といふになりて、悪し、
やはすべてよ、文字にかよふが中に取分腰のやは、よと
吟しかへて、いはる、やうに心得べし
やけり、行としや、親おやに白髪しらをかくしけり

盧橘	常世花
藤たちはち	満天星
櫻欄の花	繡毬花
小てまり	茨の花
ばらののはな	
牛棘の花	岩梨
岩藤	要の花
天蓼	藪椿の花
鼠もち	覆盆子
木いちご	蛇いちご
蔓覆盆子	紅いちご
柳いちご	葉いちご
牡丹	廿日艸
富貴草	深見草
名取草	よろひ草
國香	花の王

やなり 年の瀬や鵜河に見し昔しなり
 これらのやは嘆息の心有りてのともにともいはれさ
 る場合おれはけりとも、ありとも留るあり、尤百句一句
 の格にて初心のすべきことあらず

第十七 六義の事

和歌にいへる六義とは、風賦、比興、雅頌、の六にして委し
 く御抄にわけられたりそのひき歌は

(一) 風といふはそへ歌あり

難波津にさくやこの花冬ごもり

今は春べとさくやこのばあ

(二) 賦はかそへ歌なり

さく花におもひつゝみのあぢきなく

芍薬	むびす草
花の宰相	杜若
かほよ花	かほ花
はなの君	旅をし花
罌粟花	けし坊主
美人草	姫けし
葵	ふた葉くさ
もろは葉草	
もろかつら	
かもあふひ	小あふひ
立葵	水葵
唐あふひ	黄蜀葵
おかのり	紅蜀葵
ぬべし	松の落葉
錢あふひ	
松葉散る	

身にいたつきのいるもしらずて

(三) 比はなすらへ歌なり

君にけさあしたの霜におきていはは

こひしきことにきぬやわたらむ

(四) 興はたとへ歌あり

わかこひはよむともつきじ有磯海の

はまの真砂はよみつくすとも

(五) 雅はたゝこと歌あり

いつはりのなき世なりせばいかばかり

人のことの葉うれしからまし

(六) 頌はいはひ歌なり

このどのはむへもと見けりさき草の

常盤木落葉
鷹瓜 寶鐸花
著莪 胡蝶花
紫羅傘一八露
白及 紫蘭
風車花 踊子草
踊花 夏枯草
羊蹄花 羊蹄根
虎耳草 鴨足草
さんさ草 文字摺草
蕙 かほり草
蘭の花 樊噲草
慮陀草 王孫花
茶挽草 茶せん草
千日紅 山ちさの花
芭の莖 若根

みつはよつはにどのつくりせり
長頭丸か口傳に、風は題をあらはさすして物を取てひ
とへにそれになして云也、比は物を取てそれによれる
詞に寄せいふ也、興は物をとりてそれにくらべて題の
心をあらはすなり、是風比興のひとしきに似て、いさゝ
かのたかひめ也、又賦は物をしきからへてあらはに云
也、雅はすこしもあやつる詞あきにや、私にいはいく宗祇
法師云、六義中にもつはら雅を執する事あり、正しき道
を本とし周詩思無邪を用るの心也、此義を肝心とす是
當流の心なりと諸抄大成に乗せたり
風 名は高く聲はうへあしほととさす
是は心敬僧都連歌の句なり二條禪閣を時鳥によそへ稱

邁のはい 麥門冬
せうがひけ
玉卷芭蕉 霜つけの花
玉卷葛 柿の花
薔薇 柑子の花
青木の花 密柑の花
密柑の花 金柑の花
九年母の花
枳穀の花
雲州橘の花 箒
篠の子 綿時
豆植る 麥秋
麥の秋風 麥蒴
麥藁笛 麥藁笠
茄子笛 茄子花
人參詩 杜鵑

揚し奉る成るべし、俳諧には
賦 色つやも花にぬけり菊の霜 鷺 水
比 からたまこきのふの時雨けさのしも 全
興 つかぬかぬひくほとふるしもく哉 貞 徳
雅 をみなへしたとひ、あはの内侍哉 季 吟
頌 鳳凰も出よのどけきとりの年 貞 徳
俳諧に六義と稱へて、挨拶餘情、想景、反照、轉意、滑稽、とい
ふ、事あれと古き諸抄には見ぬす
挨拶 木のもとに汗もなますもさくら哉 芭 蕉
餘情 むさんやな兜の下のきりくす 全
想景 これはくとはかり花のよし野山 貞 室

又時鳥、郭公、
 不如歸、橘鳥、
 久喜良、沓直鳥
 冥途鳥
 四手の田長
 夜たゝ鳥
 こひしどり
 山はとゝさす
 鷹時に入 とや鷹
 割葦鳥 よしきり
 芦原雀 閑古鳥
 羯鼓鳥 老鶯
 鶯附子 亂れ鶯
 蝙蝠 飛蟻
 蜘蛛の子 枝蛙
 蚯蚓出る 翡翠

反照 竹の子のちからを誰にたとふべき 凡 兆
 轉意 傘張りの睡り胡てふのやとりかき 重 五
 滑稽 景きよも花見の座には七兵衛 芭 蕉
 第十八 六難諸病之事
 俳諧の六義に對して六難といふは、理屈忌嫌、重韻、不合、傍題、落題、とて撰句に取らざるなり、是も古るき書類にはしらざれども思ふに祖翁遷化の後、支考のあらはすなるべし此原因は和歌に入病、四病、七病、とて諸難をわびられたるよりこれにちそらへ今俳諧の六義六難とはいふあり
 和歌の八病といふは喜撰式に
 (一)同心病、是同事の二句にある也

蠶蛾 蠶繭
 かざめの子 烏帽子魚
 初鯉 鹿袋角
 松魚釣リ 煎酒
 煮酒 煎酒
 生節 新節
 新茶 古茶
 茶詰め 新麥
 大峯戸明 淺間登山
 鼻長 靈巖寺千部
 芝祭 九品佛千部
 泣祭 池鯉鮒馬市
 筒鳥 文鯿
 卯浪
 三夏に渡るもの

我宿は道もなきまであれにけり 遍 昭
 つれなき人を待とせしきに
 さかざらん物とはあしに櫻はな 躬 恒
 おもかけにのみまたき立らん
 ち。き。二。あり。らん。二。あり。かゝる。歌。昔。は。數。し。ら。す。今。も。撰。集。に。多。し
 (一)亂思病、是は詞優にしてそへよめるあり
 あひ見るめなきこの鳥にけふよりて
 あまとしみぬぬよするあみかな
 (二)欄蝶病 是は本句好て末句疎なり
 夏の日にくるゝもしらずあく蟬は
 とひもしてしかきに事かうき

扇	團扇
短夜	暑
納涼	汗衫
汗布	日傘
青傘	絹張傘
編笠	午睡
夏籠	結夏
夏行	夏斷
夏書	夏脛
夏花	安居
ふのり干	青山椒
蓼	利根草
紫蘇	藜
茗草	馬齒莧
刈葱	根芋
蓴菜	ぬきは

(四) 落瀉病、是は偏に題にひかれて詞不勞なり
 人をおもふ心のおきは身をそやく
 けふりたつとは見えぬものから
 (五) 花橘病、是すなほにして直に其本名を用なり
 冬くれは梅に雪こそふりかゝれ
 いづれの枝をはなどはおらむ
 (六) 老楓病、是は篇終一章上四下三用也喜撰式に云ふ
 一首中不籠思詠也云々
 (七) 中飽病、是は文字あまり三十五六字あるあり
 さもあらはわれ暮行春も雲の上の
 ちることしらぬ花しにははは
 有る海のなみまかき分てかつくあまの

海松	みるふさ
うさみる	螢
蝸牛	でゝむし
蛸	蠅
壁虎	子子
蚊	蚊やり火
蚊柱	蚊袋
蚊くすべ	蚊帳
蠅	蚊とんぼう
蚊母鳥	蚊母草
蚊子木	蠅
蚕	のみどり
蛸	蛸
馬蛸	山蛸
水馬	かつは虫
まひく虫	毛虫

いさもつきあへす物をこそおもへ
 (八) 後悔病、是无風情後悔也歌をすみやかによみて後
 によき詞を思ひよりたるなりといへり
 亦四病といふは
 (一) 岸樹病、(二) 風燭病、(三) 浪船病、(四) 落花病、
 亦七病といふは
 (一) 頭尾病、(二) 胸尾病、(三) 瞻尾病、(四) 鬘子病、
 (五) 遊風病、(六) 聲韻病、(七) 遍身病、
 第十九 折句
 毎句の上に物の名一字つゝ折こみおきたるなり譬へ
 はかきつはたといふことを
 からころもきつゝあれにしつましあれは

阜月	月見ぬ月
橘月	梅色月
阜亂月	菖蒲月
半夏	纏賓律
芒種	夏至中
茂林	蔚林
盛夏	中夏
賀茂足揃一日	
松本祭一日	献三菖蒲
菖蒲葺	菖蒲輿
供三早瓜	端午
重五	午節
蒲節	艾節
重午	藥の日
艾虎	艾人
蒲人	天師を畫く

鳥名九 うつるらん時日はをしと鹿尾菜菊 菊 峰
 加茂鳥羽 糺 八瀬水野 淀
 地名六 鴨とはてた、巢に瘦しみつのとよと 立吟
 蛭 蚊 蜂 蝶 蟻 蜘蛛 蚤
 虫名七 ひるからはちと影もあり雲のみね 一 茶
 第二十二 廻文
 是はさかさまにもおなしやうによまる、也
 ひらくさにくさのなはもしうかはらは
 なそしもはなのさくにさくらむ
 かやうの事を好くよめは、おほかたの歌のためよから
 ぬことありと御抄にいへり
 まつの木の雪やはやきゆ軒の妻 ト 宅

儀方を書	粽
菰方	角黍
錐粽	焚粽
秤錘粽	九子粽
芦粽	さ、ちまき
飴ちまき	飾ちまき
かさかり粽	飾兜
削掛兜	菖蒲兜
菖蒲太刀	菖蒲繩
菖蒲人形	菖蒲机
菖蒲湯	蘭湯
菖蒲浴衣	幟
幟鯉	幟立
内幟	飾幟
幟竿	蓬葺
棟葺	棟佩

なかしつゝ、波白しみるつゝし哉 冰 花
 草の名はしらしなしらし花のさく 其 雀
 杉切たやまの木のまやたつきす 一 茶
 第二十三 施頭
 施頭歌といふは三十一字に今一句をそへたるにて普
 通歌は五句の處是は六句にして五七七五七七五とも五
 七五五七五ともするなり
 うちわたすをちかた人にもものまうす
 ろこにしろく咲るは何のはなそも
 君かさす見かさの山の紅葉はの
 色神無月しくれの雨のろめるなりけり
 此類ひかり俳諧發句に古來はなし、祖翁句の頭に文字

藥玉	五月玉
長命縷	續命縷
辟兵縷	五色縷
壽索	五綵縷
朱索	條達
條脫	五月の鏡
藥草摘五日	藥草薺
蓬荊	藥草鬪
草合	草たゝかひ
競駟	左近荒手結
右近荒手結	
左近真手結	
右近真手結	
ひをりの日	競渡
船くらべ	鳧車
水馬	射粉團

を置たるものをせしことあり
 御廟年を経てしのふは何をしのぶくさ
 牡丹薬ふかく分け入る蜂のなごりかき
 狂句こからしの身は竹齋に似たるかき
 又文字をはさみたる句あり
 芋あらふ女西行ならはうたよまん
 三十日月おし千歳の杉を抱あらし
 第二十四 字餘りの句
 字餘りといふて一句五文字なれば、六字七字とし七文字なれば、八字九字にもいひのはすをいふ、名残あれや、名にしおは、有磯海の物をこそ思へ、あらじと思ふ、かくの如くアイウエヲの母音一句のうちにあれば詞

滴粉團	水團
白團	團子射り
印地打	桃印符
赤靈符	梟の羹
梟の炙	
去二鵲鵲舌	
騎射	馬弓
神水	竹の水
賀茂競馬	藤森祭
新宮祭	
生玉流鏑馬	
六日の菖蒲	
宇治祭	今宮祭
室祭	竹植日
竹醉日	両社祭
有無の日	大原志

和らき、文字あまるとも苦るしからぬなり、又母音あくても句中連聲の詞あるか、返し文字か、呼出しのこゝろ則、須摩の浦や、竹生島に、とすれば叶ふなり、左はなくして態と無用の文字をあます法なし、近頃みだりにする字餘りの句あり、相傳無き限りといふべし、句毎に文字あまりたる引歌
 有磯海の、浪間かき分けて、かつく海士の、息もつきあへす、物を社思へ、
 きぬた打て、われに聞せよや、坊のつま 芭蕉
 露どうく、こゝろみに浮世、すゝがばや 全
 第二十五 贈答
 是は歌をひとに贈り人より贈りたる歌の返しをする

住吉御田植	御田扇
虎ヶ雨	石髓山詣
最勝講	賑給
祇園御輿洗	五月雨
富士垢離	入梅
梅雨	さつき雨
徹雨	五月晴
墜三粟花	五月闇
五月空	黒風
舶風	夏至
半夏生	あやめ
菖蒲	あやめ
菖蒲かづら	永き根
菖蒲引	花菖蒲
紫羅蘭花	石菖
岩あやめ	藪菖蒲

をいひ、極て大事なる事なり、人の安々思ひておかしけ
 にかへすは見苦しき事なりと云、返しかたもさま／＼
 にて或は詞を受けて返し、或は詞をかへても返すなり、
 眞靜法師が説法をきゝて安部の清行か小町のもとへ
 『つゝめども袖にたまらぬしら玉は人を見ぬ目の涙成
 けり』といへるに、小町か返事』をろかなる涙を袖に玉は
 ちす我はせきあへす瀧津瀬なれば』又業平朝臣の家に
 侍ける女に敏行か『つれ／＼のあかめにまさる涙河袖
 のみひちてあふよしもなし』といへる返事に、業平か女
 にかはりて『淺みこそ袖はひつらめなみた川身さへな
 かるときかはたのまん』櫻のいまだ咲ざる家につくり
 花をつかはすとて、頼政『君が住む宿の梢のさかぬ間に

蓬摘	苗
早苗	早苗取
若苗	玉苗
田植	早乙女
田植唄	田植笠
蓼の花	棟の花
雲見草	柳の花
石榴花	栗の花
合歡の花	天南星
南天の花	五月躑躅
未央柳	忍冬花
すいかづら	金銀花
十薬	瞿麥
大和撫子	河原撫子
唐撫子	藤撫子
常夏	袖ぬれ草

めつらしかれと花奉る』あるしの返し『實さへなりちら
 てやむべき花見れば宿の梢はまたれさりけり』池田正
 式、和州氷山侯に仕ふ、或る時、側に居て見ぬやよし野の
 は、なの先』と詠みて奉る是に依て暇を賜り芳野に往く
 事を得たり、中島貞宜は初め季吟に學び後貞徳に倚ら
 んとする時、吟叟の許へ贈る『きけ夏の季吟さるなり蟬
 の聲』吟叟答て『見るもすゞしき庭前の松』と脇して戻
 されたるよし、和歌には返歌すれども俳諧には脇を仕
 て答るを例とす、又發句の文字を替て返すもあるあり
 第二十六 連聲の句

連聲は口傳にいふ上五文字の終りに中の七文字の頭
 を生じ中の七文字の終りに下の五文字の頭を生するな

石竹	百合
姫百合	黒百合
博多百合	
すかし百合	早百合
鬼百合	車百合
鹿子ゆり	袂ゆり
ひかりゆり	梅檀花
玉簪	
たまのかんざし	
山垢子花	紫陽花
四肥花	夏菊
朝菊	紅藍花
末摘花	花がつみ
眞菰荊	河骨
藤の花	藻荇
もかり船	萍の花

り譬へば五十韻のあか[○]さ[○]た[○]あ[○]は[○]ま[○]や[○]ら[○]わ[○]の十字を長
く引は各かアアアと、あの聲を生るなりい[○]き[○]し[○]ち[○]に[○]ひ
み[○]わ[○]り[○]の九字は、き[○]い[○]ち[○]い[○]と、い[○]を[○]生[○]き[○]其[○]他[○]準[○]して[○]し[○]る
べし是を連聲の續きといふなり
『よろにのみ[○]き[○]か[○]ま[○]し[○]もの[○]を[○]音[○]羽[○]川[○]わ[○]た[○]る[○]とな[○]し[○]に[○]み
なれ初けん』
連聲の句 梅若菜[○]まり[○]この[○]さ[○]の[○]と[○]ろ[○]じ[○]る 芭蕉
連歌 茂る葉[○]のお[○]ほ[○]ふ[○]や[○]風[○]の[○]近[○]さ[○]くら 専順
俳諧 初午[○]や[○]太[○]鼓[○]から[○]夜[○]は[○]あ[○]け[○]から[○]す 尾海
さ[○]ふ[○]さ[○]ぬ[○]た[○]孫[○]六[○]や[○]し[○]き[○]し[○]づ[○]や[○]し[○]き 其角
總して奉納勸進祝言等の巻頭には連聲の句を用ゆべ
しと云ひ傳ふるは太神宮奉納千句の巻頭に

蕁の花	入梅葵
鐵線花	風車花
酢漿草花	萱草の花
苔の花	朝露草
草石蠶	蚊屋釣草
蛇床子	さるとり花
あは蒔	穆蒔
すべりひゆ	菽植る
租蒔	胡麻蒔
豌豆引	蠶豆引
青梅	餅梅
小梅	梅漬
梅を干	梅剝
杏子	からも
李	楊梅
枇杷	生胡桃

元日や神代のことのおもはるゝ 守武
此句を以て例とするよし若連聲の句にあらざれば五
音連通の句をすべし
五音連通
五音連通とは、アイウエヲ、カキクケコ等の五韻を以て
冠五の末文字と中七頭文字とを連れ中七の末と座五
の頭とを連るなり又連聲連通として一方を連聲にて一
方を連通にてするも苦しからざるよし秘中の秘なり
と師傳に云へり連歌に五音連通の例とするは(頼朝が
けふの軍に名取川)俳諧にては
五音連通 深き池氷りのときに覗きけり 俊似
雑炊の名どころならば冬籠り 其角

桑の實	早松茸
荒布刈	若布刈
青柚	瓜の花
越瓜	あさ瓜
わさ瓜	胡瓜
茄子	初茄子
白茄子	蟬
初蟬	熊蟬
にんに	
つづくばうし	
鶯音を入る	
水鳥の巢	鴉の浮巢
鴨の子	輕鳧の子
煩鴨	水鷄
嫁起し	鶉の巢
諸鳥の毛革	

連聲連通 古池アやかアはづ飛ムこむ水ミのおと 芭蕉

はつ春チの遠チさと牛ウのなき日哉 昌圭

十六夜モもまたさらしなチの郡哉 芭蕉

庵モの夜ミもみしかく成ウぬ少ウづ、 嵐雪

第二十七 序句

是は枕コとはを上に置キて句をのハしたるものなり

『あしひきの山鳥の尾のしたり尾の「あか〜し夜を獨
かもねむ』『あさも子かねみたれ髪を朝ア〜』とくも
來て啼ウくひすのこゑ』

一ハ僕ボとぼく〜歩ア行クはな見カか季 吟

竹の子の河内へかよふ垣根かな 一 漁

『たらちねの親竹よりもことし竹』『さし櫛のあかつき

羽ぬけ鳥	羽ぬけ鴨
練り雲雀	照射
ともし山	火串
魁狩	獸狩
鹿の子	小鯨
蛆	蠶子
蛇衣脱	蟻螂生
柏餅	菖蒲帷
蓬衣	撫子衣
帷子	菖蒲帷
うすもの	
ひとへ羽織	
辻が花	晒布
生布	木平
半晒布	麻布
揉瓜	新茄和

寒しほどゝぎす』などの類ひあり

第二十八 俳諧正式

俳諧正式は連歌の正式に倣ひ、寛永二乙丑年十二月五日松永貞徳、洛陽妙満寺本文坊に於て執行ふ、俳諧一座とは十八人をいふよし、列席には、郷太夫、侍、百姓、町人、僧、禰宜、山伏、女、あるへしとそ、其後俳諧一道は二條殿の御承りとなり、宗匠の許可及び此みちの掟は都て同殿の指示に従ふ、暮雨庵曉臺、花之下宗匠を許され同殿にて正式會を行ふ、是より此式に倣ふことゝ成れり

床飾 花 香爐

軸 菅公の像 連歌の席には倭武命或は人丸の像にして今地下にては芭蕉の像を懸ることもあり

蟬丸忌 丈山忌
 團扇まき 頼政忌
 業平忌 曾我祭
 大鳥祭
 兩國橋納涼始
 鷺森祭 富士野男
 甲斐野鳥 芭蕉の花
 霸王樹の花 鋸草
 蟬の花 狐の筆
 蚊袋 鯨の子
 酢を作る 皐月浪
 ○六月之部
 且月 遯月
 朔月 水無月
 風待月 鳴神月
 常夏月 涼暮月

掟 俳諧中高聲すへからず、扇つかふへからず、かは
 ほりはとがめす
 座配 客座 貴人 有官者 老人 諸人 行脚
 向座 宗匠 童女 諸人 執筆 役者
 座配の役者は逐次俳名を呼び席入を爲すべし、銘々席
 上の像前に禮拜して定め座につく、此間奏樂あり座
 定まりて一同俳諧始まりの禮あり、宗匠文臺席に進む
 執筆は貴人無き方より進て其脇に従ひ着く、此時役者
 文臺を運ふ執筆歩を進て受け復座す、同時に役者も復
 座す、執筆懷紙を取り形の如く折り、其發句より認むる
 の間炷香、座元は香盆を運ひ中央宜き場にて一炷を薰
 じ床に供す、此時は執筆と香元と能く見合すへし、香元

林鍾律 小暑節
 大暑中 季夏
 瓜期 晚夏
 九夏 永夏
 陽水 氷室一日
 氷室御調
 氷のおもの
 ひみづめす
 ひむろわたり
 氷室の雪 氷室の櫻
 ひむろの花 氷餅祝
 勝曼参り 富士詣
 淺間詣 忌火御飯
 一夜酒 六月會
 御躰御卜 月次祭
 神今食 解齋の御粥

の復座するや、執筆は發句を吟聲するなり、一順終れば
 亂吟とし名残りの裏となる時、香元は次香を勝手に於
 て炷き、香盆の儘持出て豫て揚句を爲すべき貴人、又は
 宗匠の前に置いて伺ふ、此時貴人宗匠自供ふるも香元を
 して供へしむるもあり、香の銘を問ひ當座發句の題と
 することあり、故に香元は初香は柳とも枝析とも或は
 源氏の名を銘にするも、次香は必ず時の季題にて、譬は
 春なれば、初音、紅梅、夏なれば、氷室、秋なれば、玉兔、白菊、冬
 なれば、時雨、など、銘を申すべし、俳諧終れば執筆吟聲
 を呼ぶ、此時吟聲と共に同音三人文臺の前に着し、執筆
 の指示により發聲す、奏樂あり盤渉調あり、式終て獻茶
 有り茶番之を扱ふ

第二十九 執筆の手順

執筆は一同着席の上宗匠の指示に依り、若し文臺床に飾附有る時は床の前に行き、床の下へ御し、角廻しにして向きを直し、左手を文臺の下より受け、右手を上より文臺の天部、右の方を探り、文臺席に着き、宗匠の左に座す、一禮有りて硯を文臺の右に御し、料紙を文臺に假置して硯の蓋を取り、硯の右へ扇面形に仰向て置、料紙を探り中より紙數を定め、拔出し、文臺の左翼上に乗せ、余の料紙を硯蓋の上に置、錐力水引を其上に乗せ墨を摺り筆は二本共に執り、一本を復し一本鞘拂ひたる方を持ち、墨を黜し文臺の右筆返の際に穂先を前に外し置き、懷紙を探り横に二つ豎に三つ折る(折方口傳あり)豫て立句

- | | |
|------------|------|
| 祇園會 | 祇園鉾 |
| 長刀鉾 | 函谷鉾 |
| 雞鉾 | 菊水鉾 |
| 月鉾 | 船鉾 |
| 大神山 | 飛天神山 |
| 占手山 | 太子山 |
| 山伏山 | 孟宗山 |
| 琴破山 | 白樂天山 |
| 郭巨山 | 芦荊山 |
| 蟠螂山 | 笠鉾山 |
| 花盜人山 | 木賊荊山 |
| 岩戸山以上七日辨慶山 | |
| 鈴鹿山 | 觀音山 |
| 八幡山 | 役行者山 |
| 黒主山 | 淨明山 |
| 鯉山 | 鷹野山 |

船鉾以上十四日

- | | |
|---------|------|
| 祇園臨時祭 | 河原涼 |
| 巖島祭 | 竹生島祭 |
| 三社神事 | 津島祭 |
| 芦神輿 | 熱田祭 |
| 山王祭 | かつら |
| 嘉定錢 | 嘉定喰 |
| 相國寺懺法 | |
| 伊勢祭禮 | 博多祭 |
| 志渡寺祭 | |
| 西園寺殿妙音講 | |
| 御手洗詣 | 糺の納涼 |
| 坐頭涼 | 鞍馬竹切 |
| 上難波御稜 | |
| 坐摩御稜 | 橋立祭 |
| 愛宕千日詣 | |

たる故人の句、又は貴人宗匠の句を書式に従ひ認む(書式は初表懷紙三つ折の上の折目を除き下二分に一句を二行に書し俳名をしるす、名殘の裏は上の二分に書止むるなり、二條殿の發句には名を認めす前に御としるすよし、是は俳諧御承りの故なりといふ、祖翁芭蕉の句を立脇起の時は發句二行に書流して名なし、猶口傳多し)一度下讀して吟すること二回、一同拜聽一順卷掛ある時は逐次吟聲して尾句に至る、毎句主の俳名を呼ぶ、句主は之に應じて禮す、附け句を案し得たる者は文臺の前に進み前句を問ふ、執筆小音に示す、句主は案したる冠語七文字、或は五文字を述ふ、執筆之を小音に受く、句主再び冠語より一句を渡す、執筆又副讀する是

水無月能
 天滿天神御稔
 住吉御稔
 唐崎祭 節折
 大祓 茅の輪
 輪越の稔 形代
 なで物 名越の稔
 荒和の稔
 麻の葉流し
 はらひぐさ
 夏神樂 川社
 小蠅成神 夏稔
 夕稔 御稔
 みろぎ川 鎮火祭
 霧 雨乞
 雷鳴の陣 道饗の祭

を句渡といふ、執筆此時差合を改め故障あらされは可否を宗匠に問ふ、而して懐紙に認め小音に一讀す、俳名を讀む時句主は禮して座に復す、執筆高聲に吟して一座に披露す、逐次如斯し執筆は吟割に注意し、月花の定座を沙汰すへし、月花の前春秋の連を呼ふへし、座中一順の附句成りたるを見れば出勝、亂吟と呼ひ、名残の裏と成るとき名残二句明けと呼ふ、是は豫て貴人老人珍客に揚花をなさしめん爲なり、貴人老人揚花を附るや直に執筆は揚句をすべし、或は豫しめ孕み句あるべしとぞ、附終るも揚句は吟するとなく、懐紙を面に返し、はし書を宗匠に尋ね指示に従て書し、文臺の中央に置き筆を文臺の端に置く、但吟聲を外に置さる時は直に披

施米 石尊參
 溽暑 小暑
 大暑 あつさ日
 あつさ 極暑
 炎天 日盛
 温風 三伏
 天祝の節 土用干
 虫干 虫はらひ
 露涼し 風薫る
 涼風 涼し
 月涼し 納涼
 すしみ 川原すしみ
 夕納涼 門納涼
 庭納涼 涼み床
 船遊ひ 納涼船
 雲の峰 丹波太郎

講すべし、端し書口傳、俳諧中若し遅參の輩ある時は着座の後執筆は殊に前句を二回吟す、若し越句を所望せは一回吟すへし、其前は何程好むとも吟するとなかるへし、執筆は吟聲の終る時硯を復し文臺を納む、執事之を扱ふ、祭事、追福等の時は執筆文臺の儘床前に持運び供ふ、此時は文臺を角廻しにして硯を文臺の下に挿入、懐紙を開き禮をして去るあり、執筆手代り有る時は吟聲を兼るなり、此時は前の執筆休息する事を得るなり

第三十 吟聲の手順

俳諧卷尾するや執筆は吟聲を呼ひ文臺の左側に着かしめ、同音三人は文臺の前面に着く、執筆小音に端書より脇句迄を素讀し示す吟聲は高らかに發句を披講し

魔耶九郎	白雨
夕立	よだち
玄だるゝ山	泉
せんする	やりみづ
清水	岩清水
苔清水	清水掬ふ
清水堰	清水汲む
清水井	薰衣
竹奴	夏臥
ひあふぎ	蓮の葉
麒麟草	虎尾草
鉤鐘草	薏苡仁
芋	豇豆
糸瓜の花	水瓜
夏桃	二番草
蟬時雨	火とり虫

俳名を呼ぶ、脇起の時は發句より脇句迄を披講す、再ひ發句を吟聲する、此時奏樂に合す(盤涉調)同音は發句の冠語五文字を除き中の七文字より補聲し、俳名は補聲せむ、脇句以下は冠語より補聲し逐次如斯、奏樂は俳名を呼ぶ内間を置くあり、再順は俳名を呼ぶ事なく都て一卷の披講は序破急に吟聲するなり、揚花は一讀中、補聲奏樂を止め、再吟補聲奏樂尤高調吟聲して語尾を引き俳名を呼ぶ、揚句は俳名は呼ばず、奏樂を納むると共に吟聲同音復座す

第三十一 懷紙綴り方

披講終て執筆は左の膝を立、懷紙の前端を左手の食指中指に上部拇指と無名指に下部を缺み、懷紙の裏より

鱧	甘酒
水飯	冷水賣
打水	醬造る
夏に後る	秋ちかき
ひんざゝら	神事
機部太神宮祭	
さらし井	川符
脚馬	綱擣
蓮	蓮の浮葉
赤草	眼皮
日向葵	綿の花
さくら麻	青さゝげ
乾瓜	白瓜
早桃	虫送り
蟬の諸聲	
身を焦す虫	

錐を以てふたつの穴を明け、水引の下部糊着したる方を上の穴に通し、又裏より下の穴へ通し、其水引の下にて千鳥掛けに結び、又上にて寛やかに結ふあり、水引は金銀、金赤赤れば金の方を上へすべし、白赤、白紺は白の方を上にして結ふなり、其下端には糊を固着し、懷紙の穴に通し安くするなり、懷紙綴り終りて後、是を解き置べし、執筆は爰に於て一禮し硯を蓋し文臺に納む、役者は是を扱ふ前の如し、宗匠執筆復座して俳諧の終りたる一同禮を爲す

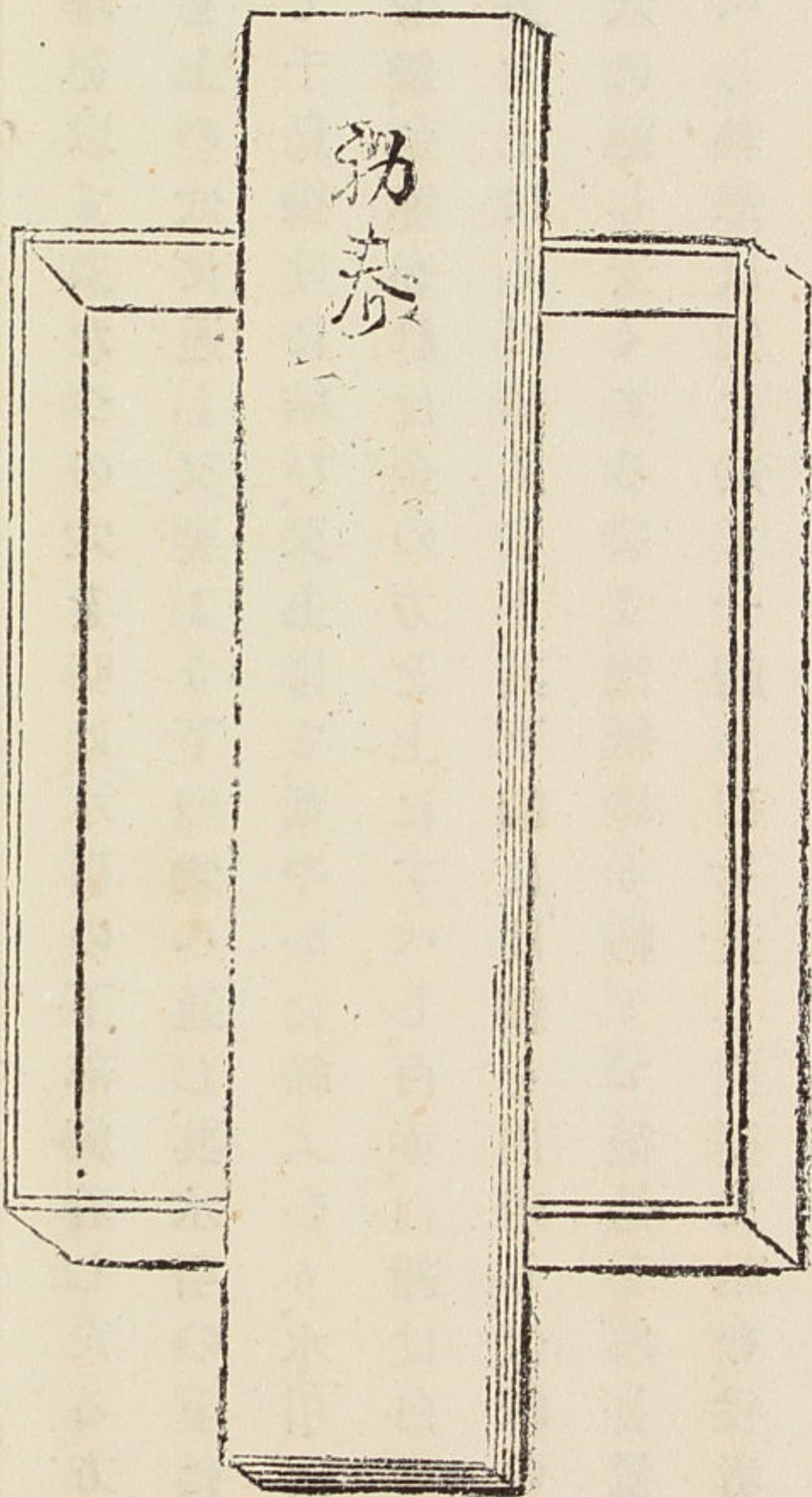
第三十二 兼題

兼題は前々より題を觸れ置くをいふ、懷紙詠草短冊色紙等に認め出すなり(認めかた後に)

第三十三 當座

當座は其席に於て仕るをいふ、當座に通題と探題とあり、通題とは一座一様の題にて仕るものをいひ、探題とは銘々に題を探り得て仕るをいふ

第三十四 通題引方



- 饋突 濃酒
- 洗飯 振舞水
- 蒔水 醬油造
- 夏に隔る 年の半
- 井戸かへ 鴛鴨涼
- 籠枕 夏引の糸
- はちす 蓮の巻葉
- 夕顔 鷺草
- 日車 紫蘇
- いちひ蒬 大さゝぎ
- 瓜 白梵天
- 李桃
- 鷹羽遣ひを學ぶ
- 空蟬 金龜子
- 川狩 一夜酒
- 引飯 氷賣

- 切麥 沖繪
- 夏の限り 中津瀬
- 井戸さらへ 涼臺
- 香齋散 青苧
- 白蓮 蓮の實
- 瓢の花 時計草
- 日廻り花 蒜の花
- 藍蒬 十六さゝぎ
- 眞桑瓜 阿古屋瓜
- 竹の皮脱 雲雀鷹
- 蟬の壳 蠓
- 持網 麻地酒
- 乾飯 雪賣
- 冷麥 掛鯛おろす
- 夏過 神田天王祭
- 井戸まつる 簞

圖の如く硯の蓋を仰向け、其上に短冊數枚を重ね最上の一枚に題を書きて末席の前に持行、末席の者は此短冊の下より一葉を取り上座へ送る、逐次下より取りて上座へ送るあり終に貴人宗匠にて題の書たるを止めるなり

第三十五 探題取方

卷頭卷軸はわかり安き様に横に置余り、豎に置、短冊にはそれの題を書き見ぬやうに題のかたを下にたし、み置あり、出す時は名の方を下に題を上にするへし、圖の如く豫て組題を作り置き、執事硯蓋に入れ、宗匠の前に置く、宗匠は其卷軸と有るを取り跡を角廻しにして自分の前、又は床の前に置く、此時末席より立て探題

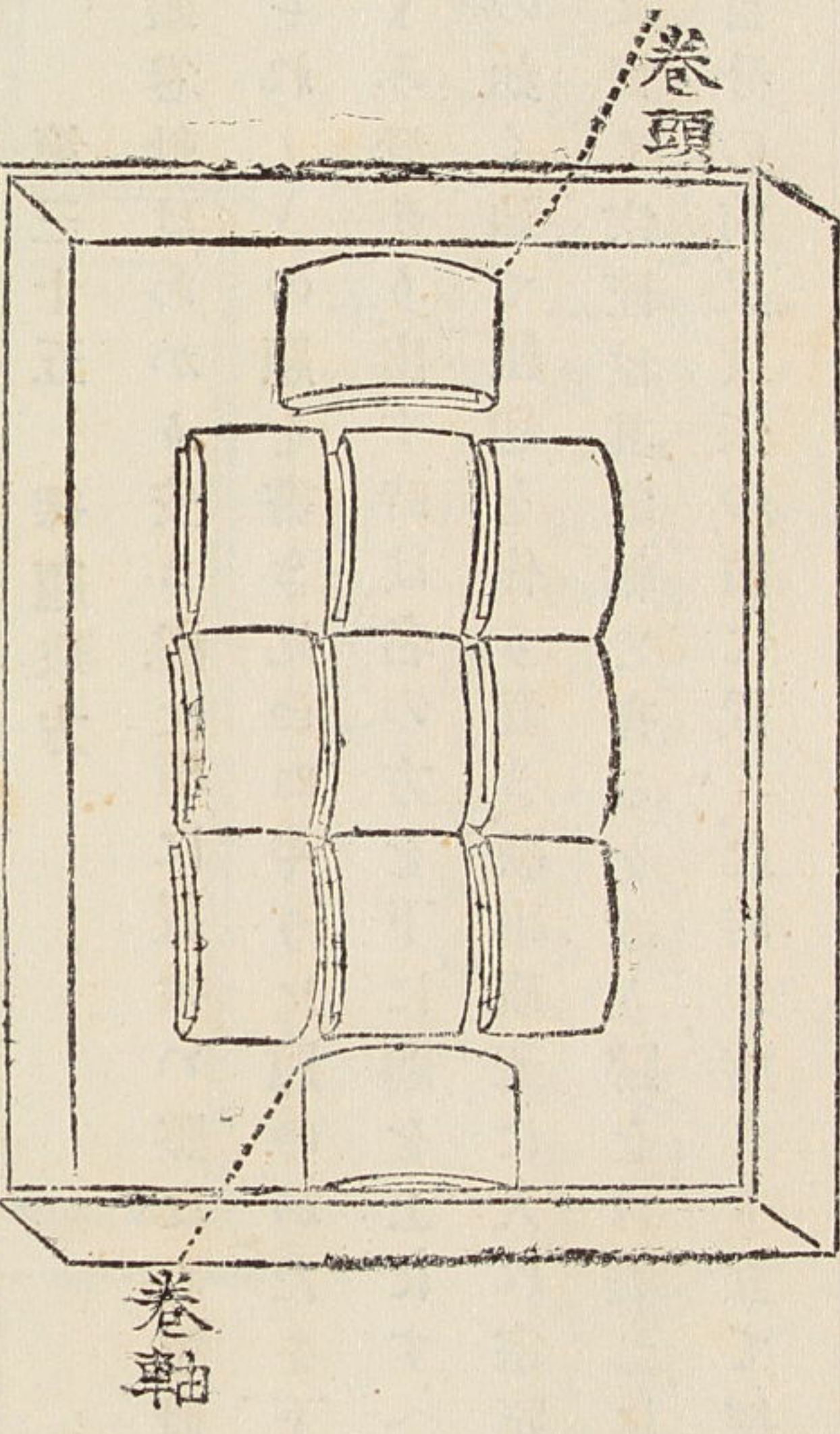
霍亂	からむし
紅蓮	慈菇
干瓢	菴の花
楮の花	さゝき賣
菅芥	菜瓜
金瓜	越鶴
青田	蟻
脱け蟬	夏切茶
四手綱	氷水
葛水	夏深し
あつ麥	棹竹賣
夏を追ふ	抱籠
水懸合	百日紅
汗瘡	澤瀉
水芙蓉	八重椿
凌宵花	

青鬼灯	茗荷の筍
蘭芥	蕪豆
銀瓜	木耳取
田草取	腐草爲レ螢
夏虫	鯖釣
纏	水の粉
葛湯	水豆腐
奈良漬製す	夏の別
夏の果	水游學
掛香	竹夫人
夏瘦	射子
蓮の花	蒲の穂
風蘭	葎しげる
青番椒	麻苳
蘭田	海藻
青瓜	林檎

に進み、末番の短冊を得て復、席す、逐次如斯、終りの、卷頭を、執事、貴人の前に持行呈す、時としては貴人自立て卷頭を取り復席す

第三十六 硯引方取り方

貴人宗匠へは蓋硯を引き、其他席衆へは五人毎に組硯



を引くなり、取方は組たる最下の硯を取り逐次末座に送る、五人の末の者蓋を取りて預り置あり、先つ墨を摺り筆を點して硯箱の前へ穂先を掛け休め置なり、發句を案したる毎に詠草に認め、句案終れば筆を元に納むべし、句案成りたる印あり、一應詠草にて宗匠の添削を乞ひ、後短冊に認むるなり、句案中は行座たるべく、案後は動座も免すへし、短冊を集むる時復座す、硯は末席より蓋をして逐次上に送る、取りたる時に反對して上座の者角廻しとなし執事に渡すなり

第三十七 料紙の受渡及び取方

料紙は、を拂ひ、執事左の手に折目を持、右の手にて紙端の下部を持ち出て、折目を客の左へ成るやうに返し

一番草 蟬
 火に入る虫 海月取
 氷餅 道明寺挽飯
 砂糖水 心太
 納豆造る 夏の名残
 秋を隣 洲走網
 ○七月之部
 文月 文ひろげ月
 七夕月 涼月
 女郎花月 桐月
 親月 相月
 蘭月 蘭秋
 新秋 盆秋
 首秋 開秋
 上秋 夷則律
 立秋節 處暑中

て渡すなり、受取る者、左の手に折目を取、紙端に右の手を添へ受け、下にて突揃へ紙の中より二枚を取り次へ送る、受渡しは前の如し、此時は大方横詠草あり、折方は横に二つ立三つに折るべし、折方口傳あり、認方後にあり

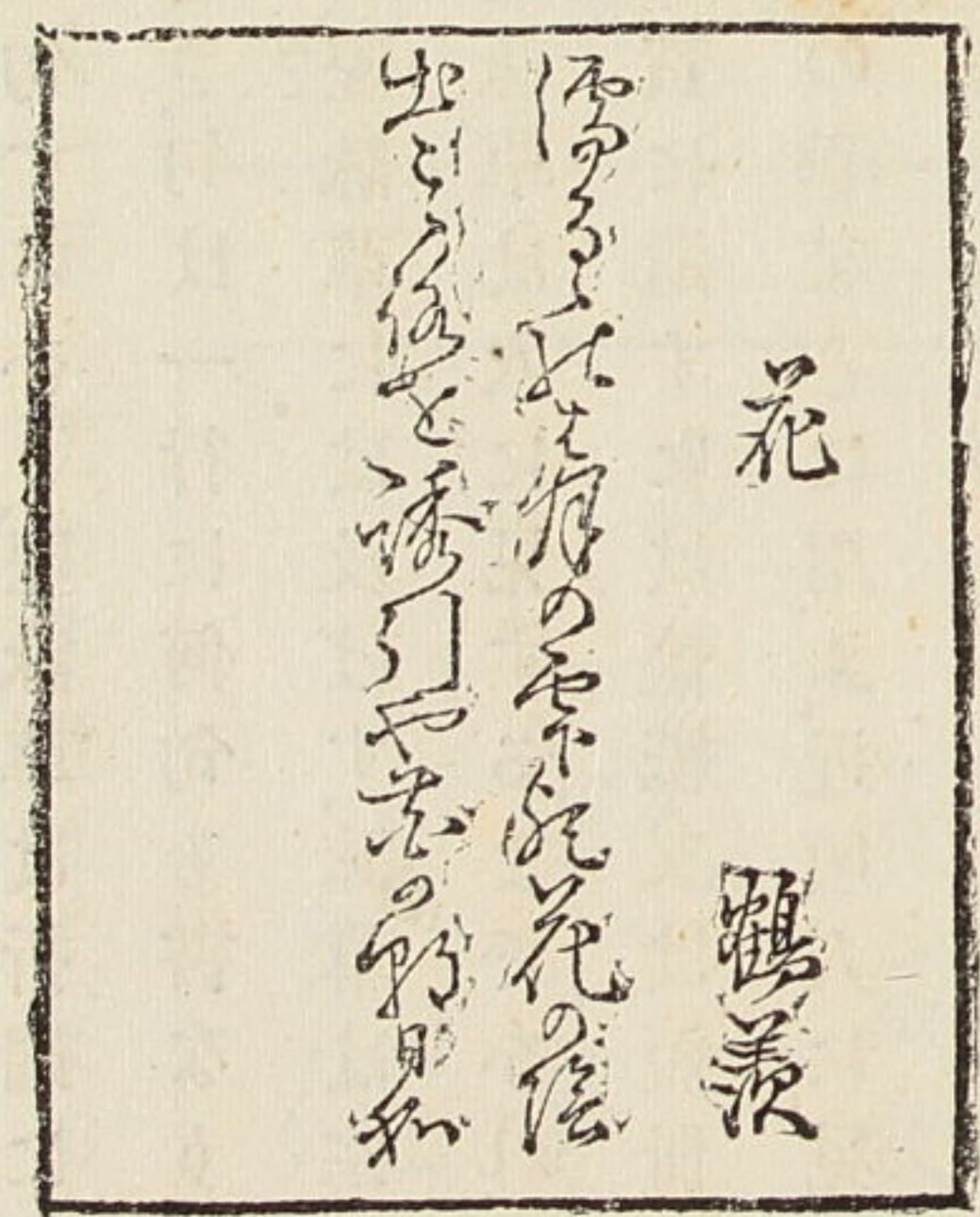
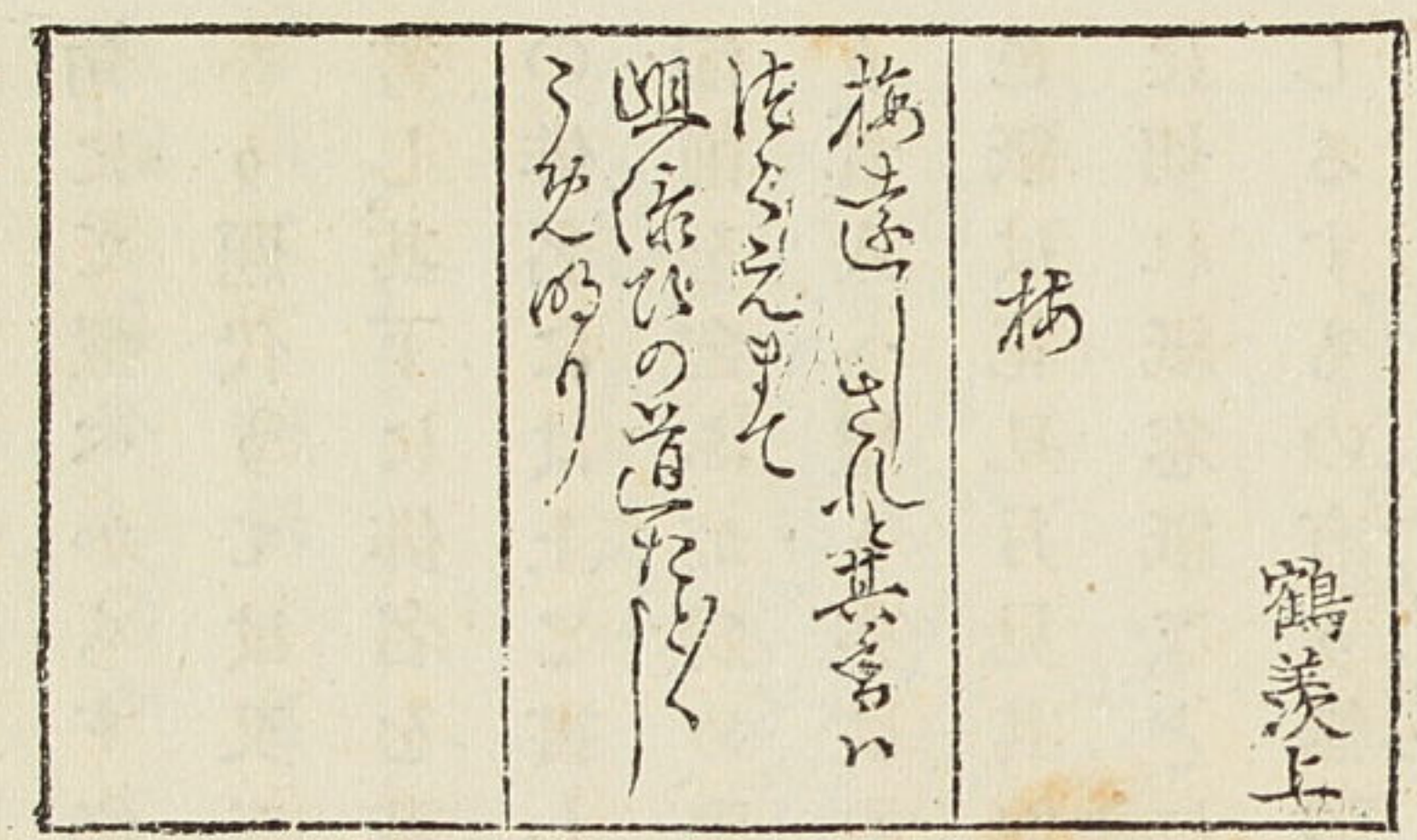
第三十八 短冊の披講

兼題又は手向の短冊は文臺に豫て組重ね、當座の短冊は執事末席より集め硯の蓋に乗せ床の前に置く、吟聲は短冊の元に至り巻頭より凡十葉程重ね取り左の掌に受け拵にて押へ、巻頭より一葉つゝ誦み、右の手にて採り文臺又は硯蓋の右端に伏て置き、逐次如斯巻軸誦み終て、裏より穴を明て水引にて綴るあり、巻軸の短冊の裏に年號月日會席并に宗匠會主を記名するなり、卷

孟秋 今朝の秋
 けふの秋 來る秋
 たつ秋 初秋
 一葉 一葉船
 一葉衣 桐一葉
 桐の葉落 散一葉
 錢暑 殘暑
 戻る暑さ 秋の初風
 初嵐 新涼
 初てすゝし
 身に入む 律の調
 稻妻 もゝかいり
 花火 流星
 玉火 筒花火
 花火線香 水花火
 晝旗 柳火

頭貴人なれば巻軸宗匠、巻頭宗匠なれば巻軸會主あり

其三十九 詠草書方



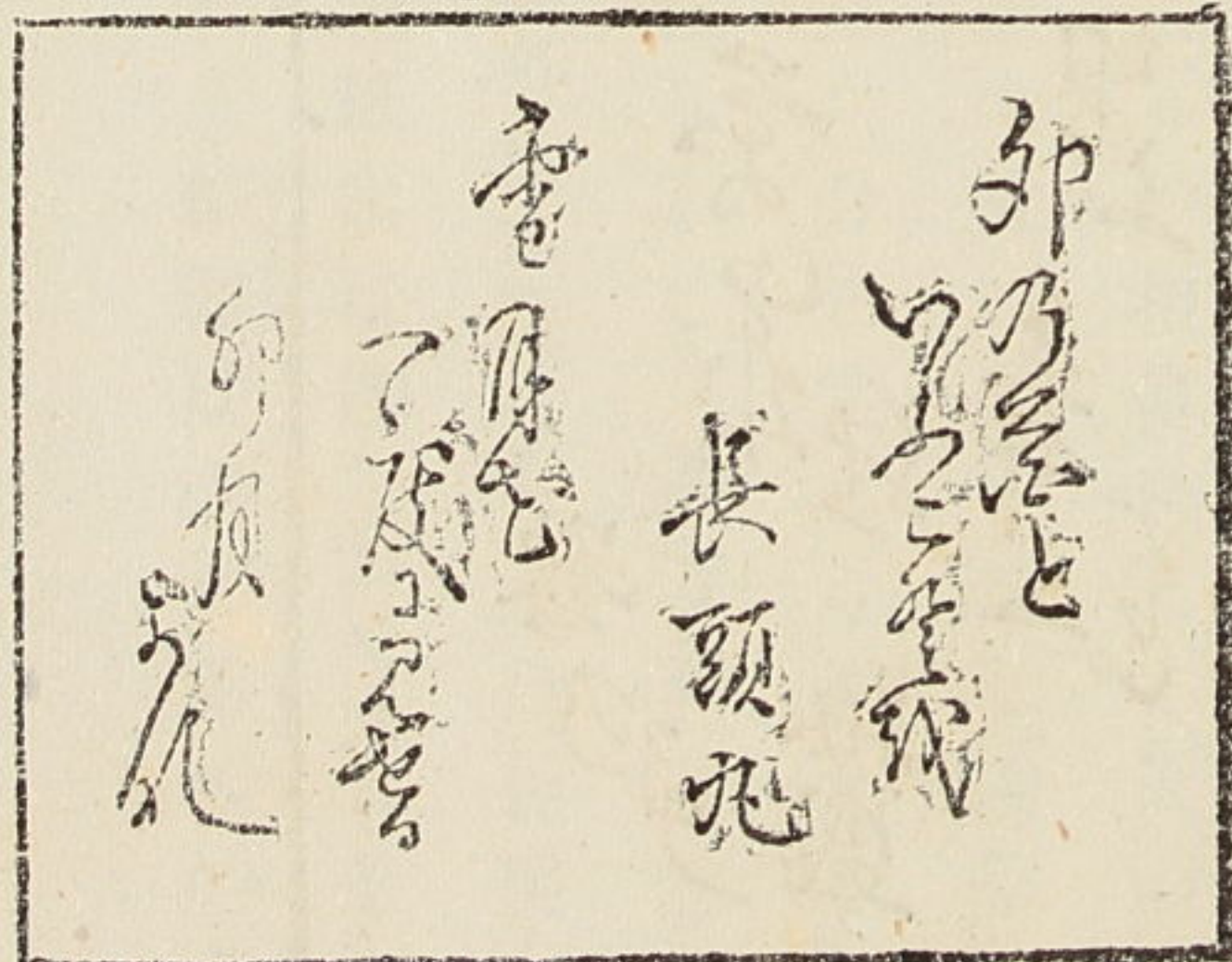
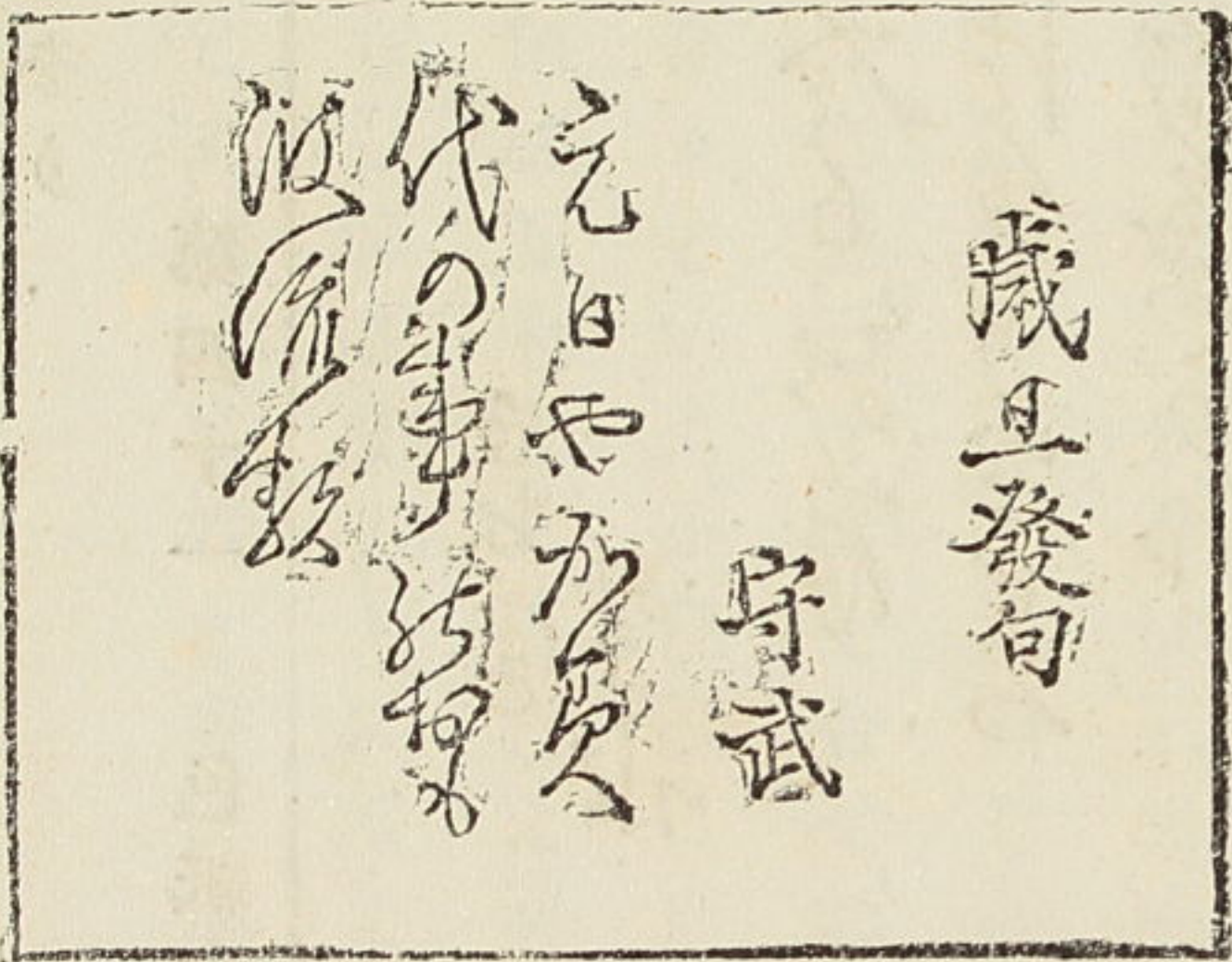
詠草は如圖三つ折の上折紙端に俳名を記し、其内折目

施餓鬼	川施餓鬼
北野御手洗	六日
北野煤掃	七日
硯洗	机洗
七夕	棚機
牽牛	織女
織姫	七夕妻
牛女	いぬかひ星
二星	七夕
女七夕	百子姫
秋さり姫	
たきもの姫	
ともし妻	朝顔姫
さゝかに姫	
梶の葉姫	阿鼓
彦星	星合

寄に題を書し、中の折に發句を二行に五七五と書く、一句にて置べからず必ず代句あるべし、一折に二句づゝ、かり題代りては又二句するあり、豎詠草は折端に題を書し、其下に俳名を書き、句は一行に何句も書なり、詠草の俳名には上と書し、豎詠草には及ばず、詠草は宗匠の添削を乞ふが爲め、豎詠草は人に見するまでおればなり、貴人へ贈り亦は祝賀に遺すには懷紙又は短冊あり、色紙は花見月見其他の宴などに用ふ、近頃人に見するに切れ紙巻紙などに書きあまつさへ俳名の下へ草としるすもの有り、無識の限りといふべし、是等は行脚癖のうつりたる墨池俳諧とて不禮あり、我門の人はすべからず

星の契	星祭
星の手向	手向の糸
手向の琴	秋さり衣
願ひの糸	五色の糸
乞巧奠	乞巧針
星の薫	雲漢
天の河	銀河
星河	左界
靈源	銀灣
銀漢	天漢
烏鵲の橋	紅葉の橋
年の渡	つまこし船
つま迎ひ船	
つま送り船	
七種船	百箇の船
具穗船	左小船

第四十 懷紙書方



俳諧にて懷紙と言ふは一座一連の俳諧にて、發句を懷紙に書事おし、然ども貴人の祝賀などに發句を敬ひ贈るには上圖の如く和歌の懷紙に習ひ、題と俳名を前に

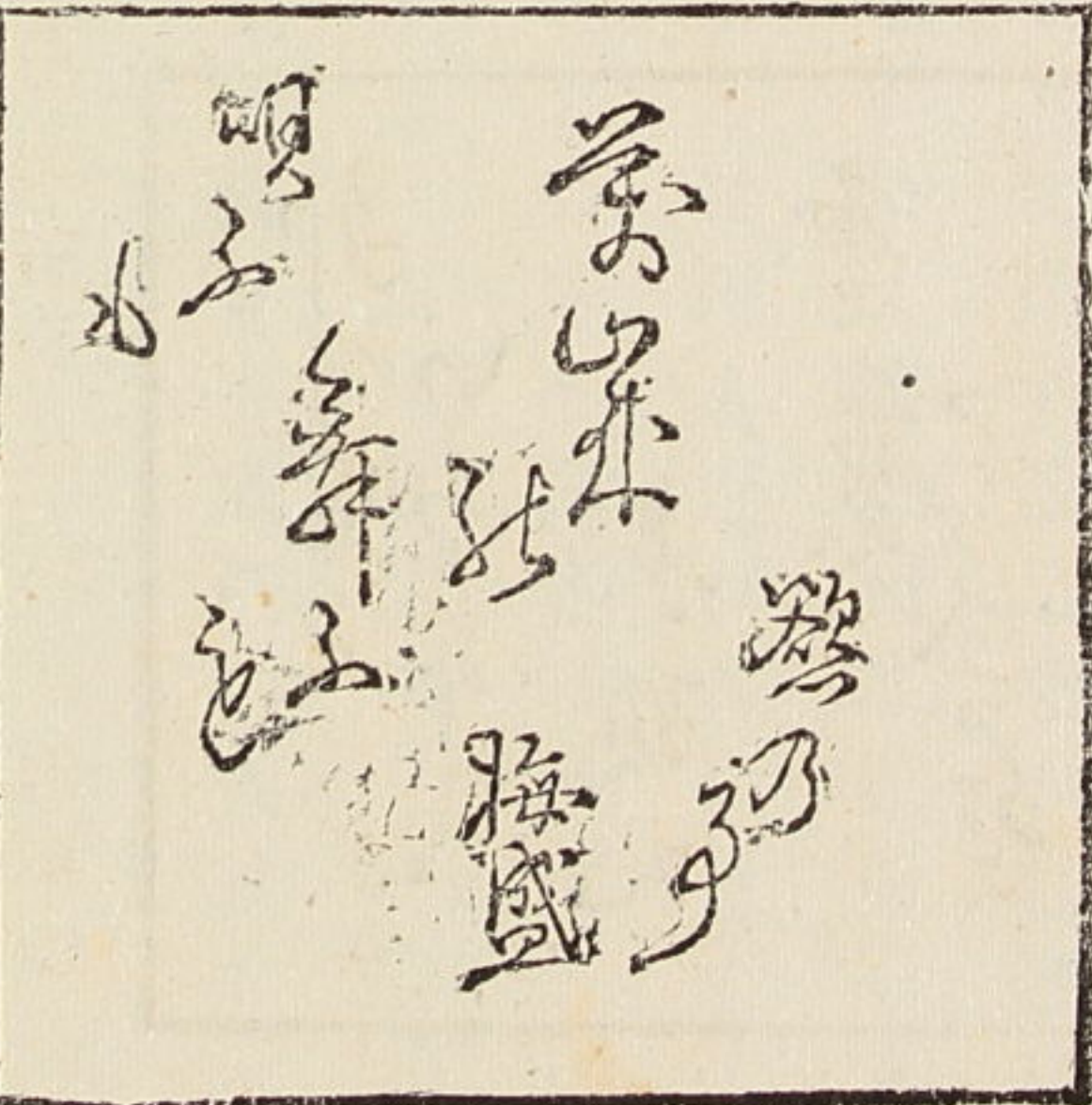
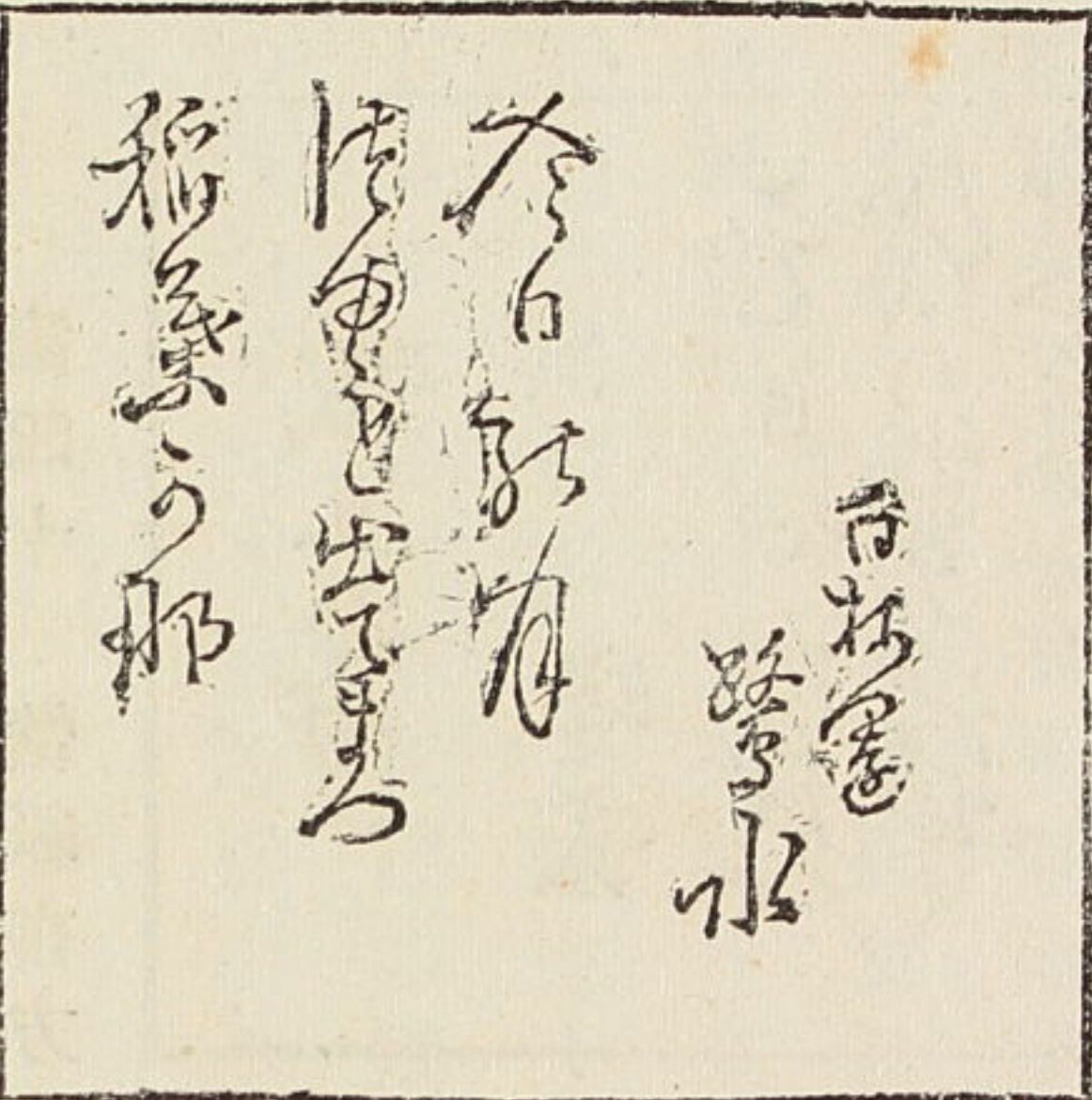
紅葉の舟 庭の立琴
 二星屋形 七夕鞠
 七寶枕 梶の葉
 梶の歌 索麩供ふ
 索餅

洗車雨 六日
 洒涙雨 七日

七箇の池 百子の池
 星のかし物 化生
 芋の葉の露 露取呷
 短冊竹賣 七夕竹賣
 池の坊立花
 本願寺立花
 本願寺燈籠
 七日節句 逆の峯入
 文殊會 六道參

書き七七三と三行に書き、後三字は萬葉假名を用ひ、貴人の家にて發句を望まれ認むるには下圖の如く散らし書、略懷紙に書くへし、是は我門中の心得迄に示すものあり

第四十一 色紙書方



槇賣 聖靈槇
 天王寺千日參
 天王寺向ひ鐘
 清水千日詣 攝待
 門茶 王子權現祭
 燈籠 揚燈籠
 高燈籠 切籠
 舞燈籠 焰魔祭
 踊躍 念佛をどり
 松ヶ崎題目踊
 燈籠踊 いせをどり
 木曾踊 小町をどり
 俄をどり 大をどり
 踊浴衣 踊帷子
 踊の輪 踊團扇
 掛け踊 受け踊

色紙寸法は大色紙、竪六寸四分、幅五寸六分、小色紙、竪六寸、幅五寸三分、右は三光院殿よりの相傳にして、天の二十八宿地の三十六禽を合せ、竪六寸四分と爲し、四季十干十二月三十日を合せ、幅五寸六分と定められたるものありといふ、小色紙は別に法なしとす、書方如し、圖卷頭の句は五七五と三行に認め、其外は思ひく、鷹行、折戻し、散らし、等さまくにてよし、色紙には題をかゝざるをよしとす、號或は姓を書は薄墨なり、絡鑑は必ず爲べからず

第四十二 短冊書方

短冊の寸法ろのよる處は知れされとも、御製震筆には幅二寸長一尺一寸八分なりとす、通例は

幅一寸八分長一尺一寸八分なり、今發句に用ふるには幅一寸七分にて程よし

梅

梅香のるを旭乃雪山路哉 桃青

星おりの人 梅香のるを旭乃雪山路哉 桃青

ふ引のるを旭乃雪山路哉 桃青

- 踊り子 踊奴
- 盆前 盆
- 盆市 草市
- 荷の葉賣 麻壳賣
- 水掛草 鼠尾草
- 枝豆 枝さしげ
- ありの實 根芋
- 茄子馬 青喬麥
- 鏡掛 中元
- 盃蘭盆 盆會
- 盆供 迎ひ火
- 聖靈祭 靈祭
- 魂棚 聖靈棚
- 盆の營 盆吊
- 棚經 生身魂
- 荷飯 照冥

- 墓叅 三井寺女詣
- 施火燎 大文字火
- 鳥居火 船形の火
- 妙法の火 水燈會
- 經木流 八幡安居頭
- 夏書納め 夏解草
- 善福寺童相撲
- 祐天寺千部 衝突入
- 新綿 御靈の御出
- 愛宿の火 六齋念佛
- 地藏祭 鬼灯市
- 文學忌 御射山祭
- 角觥 部領使
- 相撲使 花相撲
- 辻角力 村角力
- 祭角力 角力取

懷紙、色紙、短冊とも濫觴たしかからず、和歌の書にも此
 ことに苦しみいろくの異説あれども取りがたし、色
 紙は定家卿の小倉の亭に張り置れたるよりねこるな
 とあれども、中院の障子の色紙形に書と、明月記に乗せ
 られたれば、その前より有りきたりたるものならん、又
 短冊は中古の 帝不破の關屋に行幸ありし時、かの關
 屋の軒の荒たる板をすかし取りて供奉の公卿夫々に
 歌をかゝせられしよりかこれりと、俗に云ひふれたれ
 ともたしかからず
 題は通題あれは卷頭のみを書いて他はかゝず、兼題等
 發句には都て題はかゝざるを法とす、但探題は毎く題
 者より認あるかり、卷頭は第一圖の如く一行に書き座

鳩吹	扇置
忘扇	團扇置
團扇破	二百十日
楸	濱楸
柳散	柳葉落
萩	蘆萩
蘆	蘆火焚
芦の花	蘆屋
蘆の穂	
あしのまろや	
蘆の綿	蘆の絮
蘆の葉の笛	篠の穂
萩	糸はき
濃萩	もと原の萩
萩殿	萩の戸
さゝれ萩	萩の錦

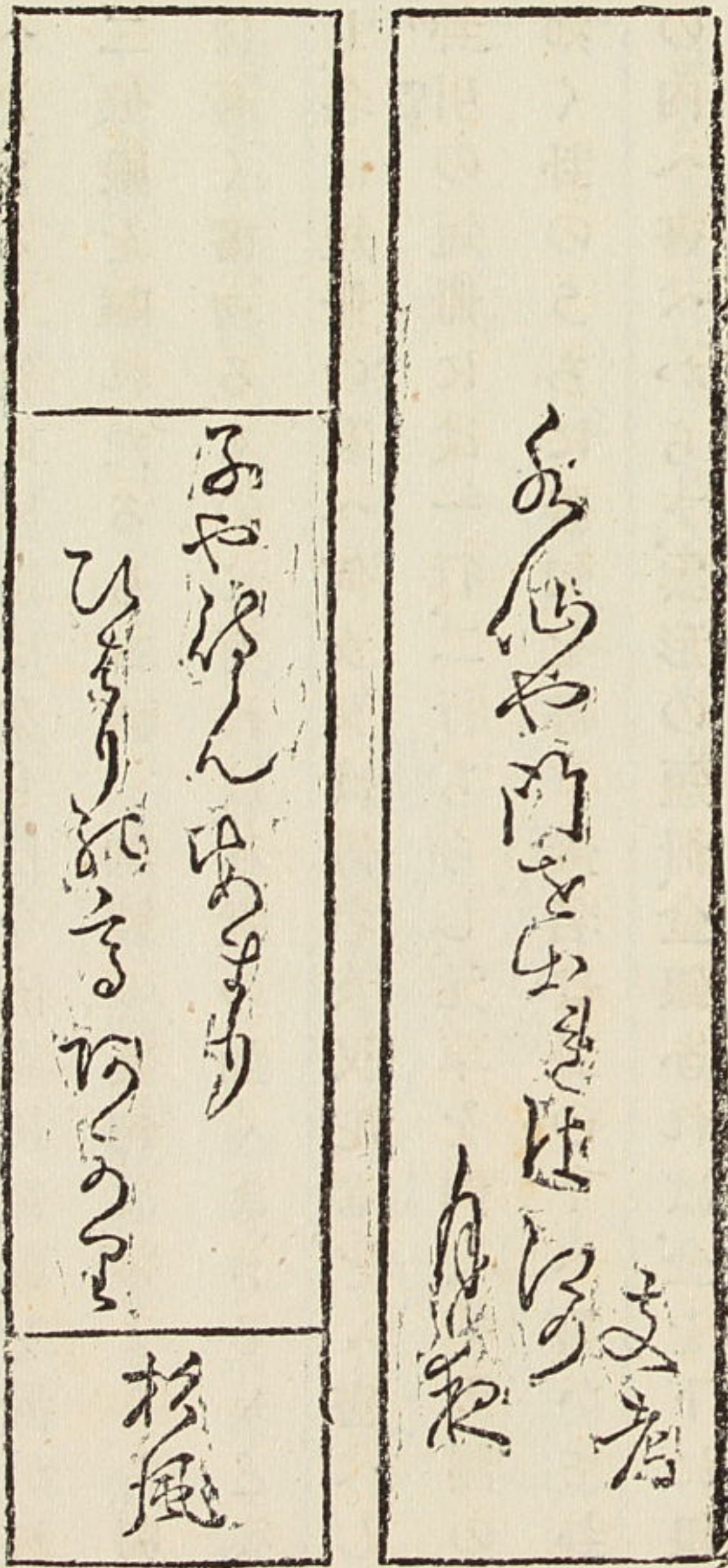
五にて少し墨を次ぎ、俳名も直下に墨を點して書くなり、第二は一行に書き流し俳名を下に片寄せ書べし、第三は二行五七五に書き俳名を座五の下に書く、墨次都て巻頭におなし、其他かきやうさまくありてとりとめたる法ありし

賀夢或は花月の菴などにて短冊の前書かいつけるは思ひくことくくに書なり、古人の句を短冊に書く時は常よりも高く書出し、右の方を明るあり、都て短冊の書方は三つ折の二分上の折目より半字高に書出すべし、一行、二行、ちらしもどくさを問はず同様なり、中古發句には題をかぬ故位置悪るしとて、高々と書たるあり、欠禮といふべし

眞萩	白萩
鹿鳴草	芳宜草
ふたえ草	ふる枝草
月見草	ねから草
野守草	萩の露
秋海棠	蘭
あらしぎ	燕尾香
藤ばかり	桔梗
さちかう	ひとへ草
澤桔梗	白桔梗
蟻のひふき	朝貌
牽牛花	檀
薺	女郎花
男郎花	茶花
おほどちの花	
旋覆花	仙翁花

巻軸は一行書か又はもどくさに止めるなり、元草とは四圖の如く句末二三字を折除けて書をいふあり、五文字を除けて書くもあり

女の短冊は必ずもどくさに止めて名をかざるを例と



紅梅草	觀音草
白頭翁	翁さう
鬱金の花	灸花
すまひ草	野菊
姫菜の草	薬師草
第切草	きり草
青薬草	鳳仙草
つま紅	益母草
めはぢき	茗荷の花
曼珠沙花	しびど花
したまがり	桃の實
金桃	蜀漆の花
木瓜の實	蓮の實飛
槐の花	棗
刀豆	隠元豆
ふぢ豆	澁梯

す、是は和歌より出たる教へにして發句には其の沙汰に及はされとも例なれば示すなり、是は和歌にて下の句一字下げにして名をかゝざれば、御製の歌にまさるゝゆへど、發句にては中古二條殿の御承りなりしゆへまさるゝ、筈此頃迄はなし、目今俳諧に教職を置かれ二條殿を離れたるも古禮、御製の發句は常よりも別に高く書初るものと有れば、和歌の如くまさるとなし、名は短冊の裏へ何女又は俳名、女又尼などゝ書べし、卦引の短冊には一行、二行、ちらし、元草を問はず、五圖の如く卦のうち、に發句を書き俳名は卦の下へ書いて卦の内へ書べからず、雲形の短冊、金銀あれば金を下に銀を上にするあり、ふり金は金を上にし、銀を下にし、藍紫

澁取る 新澁
澁梯搗 澁絞る
夕貌の實 青瓢葦

百生ふくべ 林
千生瓢葦 稻の花
栗奴 稻の風
いなば 稻の波
稻むしろ 稻守
稻葉の雲 稲守
早稻 わさ田
早田の稻葉 早稻蒨
稻の香 稻匂ふ
水影草
とみくさの花
狼尾草 芭蕉の花
芭蕉の露 五味子草

の短冊は藍の方常は上なり、悼み追善又は藤杜若の時は紫を上にするこゝあり



繪短冊は圖の如く蝶鳥花等にかゝらぬやうに書くべし、若除け難き時は花は葉、生類は眼を除き書くを例とす、古人の句あれば名をかゝす



瀬桐	穀精草
はしくさ	菑麻子
たうごま	東埔塞瓜
南瓜	ほうぶら
なんさん瓜	胡瓜
葡萄	ひびかづら
小鷹狩	鷹嚇を出る
鷹の山別	鷹鳥を祭
若鷹	小鷹
鳥や勝り	初鷹狩
初鳥狩	かたかへり
ところかへり	
うづら鷹	鷹打
網がけ	虫
虫のね	むしの聲
虫賣	むし合せ

花たんざくは更に繪にさはらぬやうに間々にしほらしく書くべし、古人の句はその主の名、芭蕉の句には祖翁と圖の如く上に書き、先つは自句をかゝぬものあり、若人に好まれたるには上に、何某主人の需に應じて云々と書き、間ごとくを拾ひ俳名は花の根によせて書くをよしとす、尤貴人宗匠ならでは自句をかゝず、初心の者は辭退すべし



像有る短冊には自句を書間敷く也、其人の尤も高名を

虫籠	虫さく
松虫	人まつ虫
鈴虫	轡虫
馬追虫	墓
蟋蟀	ちゝろ虫
いねつ虫	叩頭虫
米搗虫	益斯
促織虫	阜益
稻虫	蟹益
ばつた	竈馬
つゝりさせ	蜻蛉
蜻蛉	赤とんぼ
秋津虫	蟻螂
秋の螢	秋蟬
蛸	蛸螻
寒蟬	我から鳴

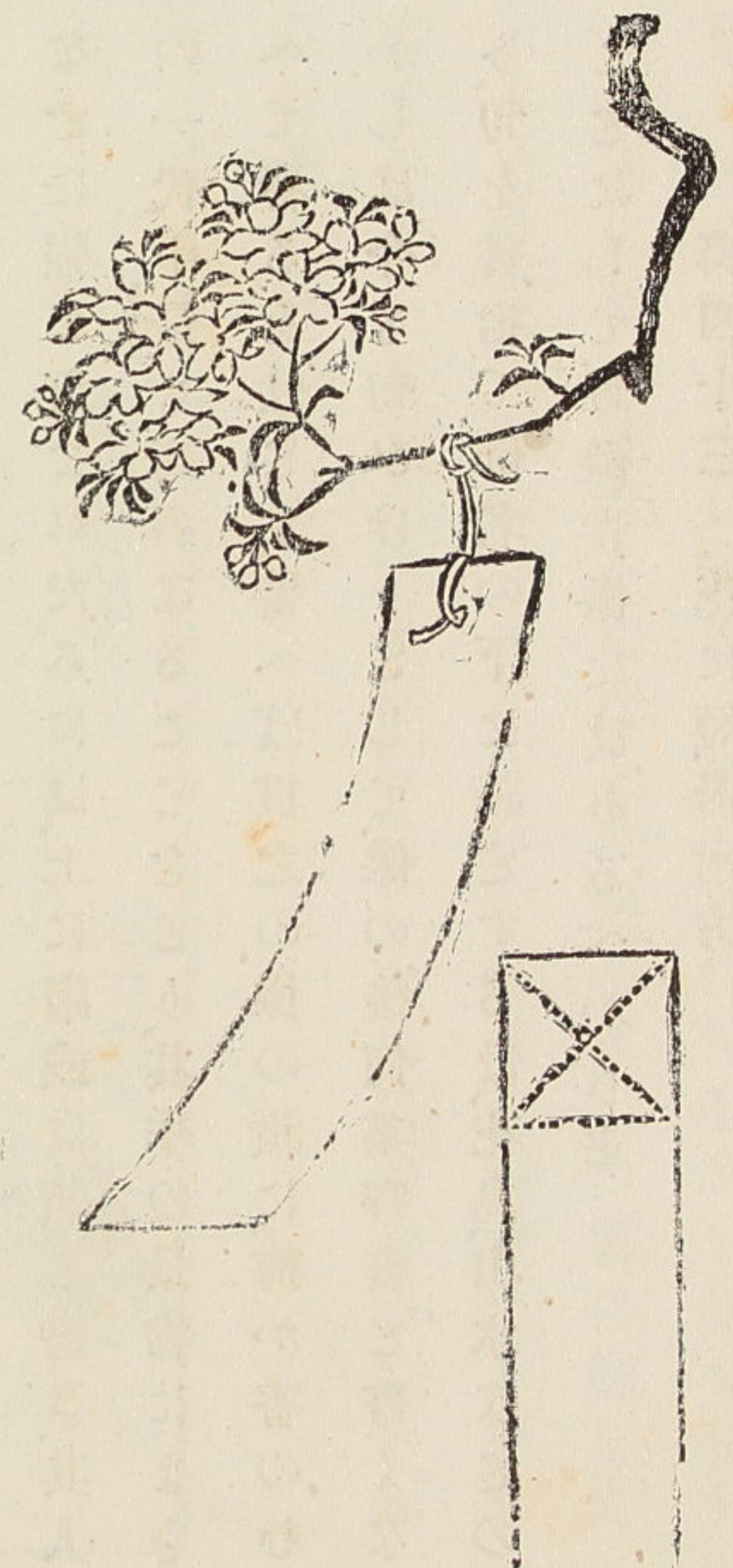
る發句、或は詩歌を書くべし、書方は圖の如く何やうに書にも頭の通りへ文字のさはらぬやう除けて書き、像の後ろへ何某敬書或は謹書と書くべし、佛像家祖の像などに強て好まれたるには、上に讚、或は頌と書き、其人の一代中最も高名なることをとり、其季の景物によそへて譽るを法とす、譬へば貫之の像の讚に「梅か香のむかしは今も匂ひけり」として、像の後何某拜書と書くなり、句を書捨て俳名の下に讚とするは、花鳥、山水などのことにして、尊像貴像にはあるべからむ

第四十三 花に短冊附方

花に短冊を附けるは人に見する爲ならず、花への禮と心得べし、附方は上圖の如く枝には紙よりにてひとつ

藻に啼虫 藻に住虫
 箕のむし啼
 父こひしと鳴
 蚯蚓鳴 秋の蝶
 くさぎの虫
 田の虫送る 刺鯖
 朝茶の湯 糯米
 しのふ衣
 楸の葉頃く
 回向院施餓鬼
 吉原燈籠 梶葉流
 畑草虫取
 ○三秋に渡るもの
 秋 少皞帝
 蓐枚神 旻天
 白藏 朗景

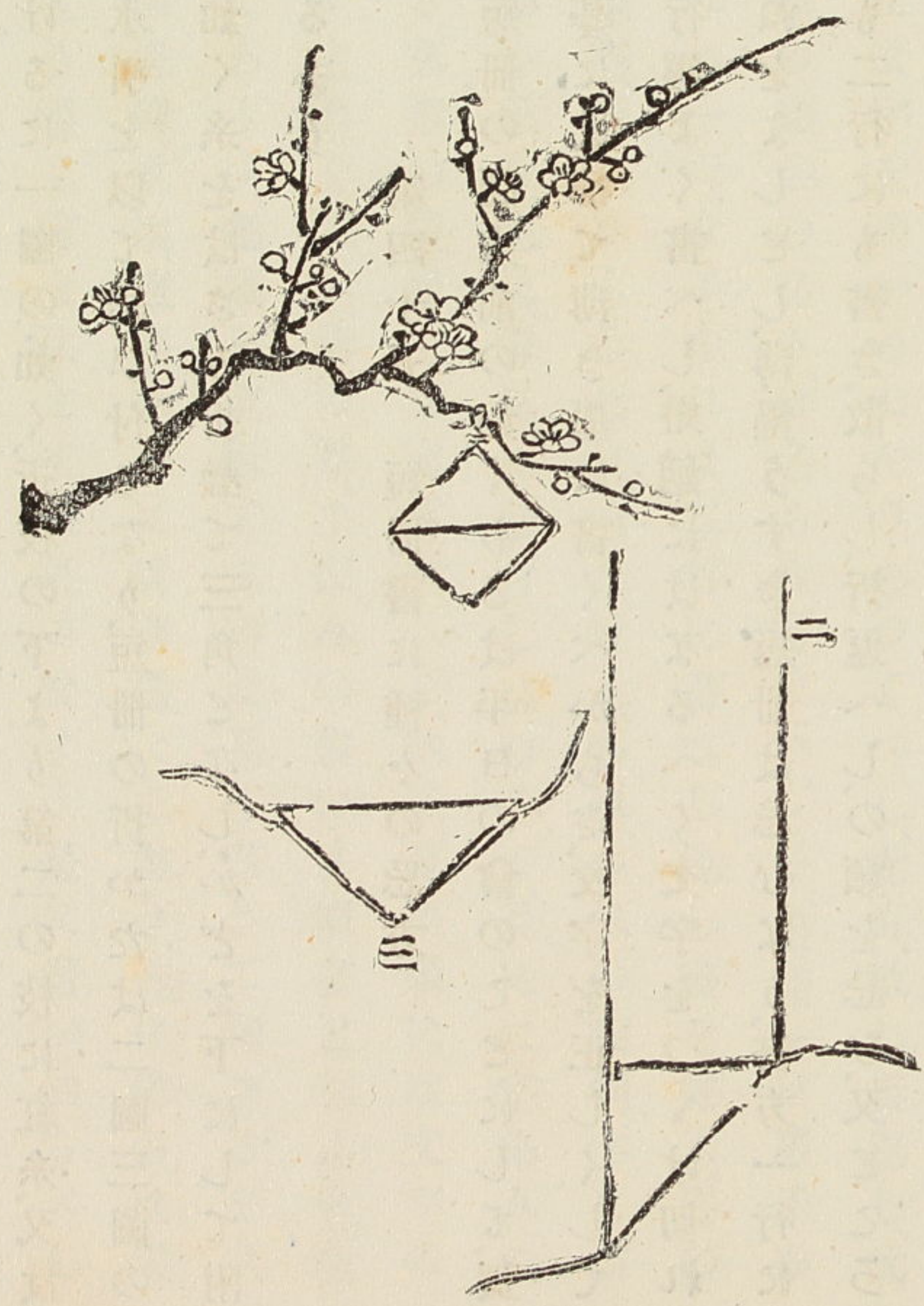
結ひかもめじりにして、短冊には下圖の如く斜に折たる中央の錐の穴へこよりのよりとめて止めひとつ



巻き置くべし

第四十四 花の枝に短冊附人に送り方

廩秋 素秋
 金商 明景
 收成 爽籟
 爽氣 金神
 秋風 龍田姫
 良寒 秋風
 秋の宮 千秋樂
 露 白露
 露けき おく露
 下露 朝露
 露の玉 うは露
 霧 朝霧
 夕霧 川霧
 霧の海
 霧立のはる
 霧の車 霧の下道



霧の香	霧句ふ
霧かくれ	薄
芒	鬼すゝき
縷薄	鷹の羽薄
篠芒	篠すゝき
花すゝき	糸すゝき
一本芒	十寸穂芒
椎柴	まてば椎
椎の葉	椎の實
枉拾ふ	枉
正木の葛	葛の葉
眞葛	野邊かづら
葛の恨	葛の花
忍草	忘れ草
野菊	蔦
松蘿	花鳥

人の元へ花を送るとき添歌添句をかきたる短冊を附けるに一圖の如く折枝の下より第二の枝に紅糸、又は水引を以て結ひ付るなり、短冊の折かたは二圖三圖の如く糸をはさみ折疊て三角となし、かどを下にして附るあり

第四十五 短冊書に種々の忌方

短冊の認方前の如くあるは平日の會のことにして、賀宴には都て薄き墨に書くべからず、文字を正しくして行儀よく書べし、婚姻にはなるへく文字をつゝけ、切れぬをよしとし、薄墨うすき短冊は忌むなり、書方一行にも二行にも書き、散らし、折返へし、の類を忌む、又ところどころ、思ひく、かど、返し書にすべからず、旅立を送る

草の花	百種の草
千種の花	色草
秋草	鶏頭花
黄鶏頭	葉鶏頭
鴈來紅	かまつか
辨慶草	茅萱
荳萱	小がや
高がや	萱の下折
萱ふく	鬼灯
番椒	若烟草
新烟草	烟草花
今年菘	布瓜
糸うり	糸瓜の水
長糸爪	冬瓜
かもうり	薑
生薑	牛房引

には一行に書き墨をつがぬをよしとす、新宅家移かどには字をゆかめぬやう心つくべし、尤も、散し、折返し、元草の類忌むなり、俳名も片寄すべからず、出産には男子をれ、一行、女子をれは二行に書べし、流し書を嫌ふ、馬の披露、馬場ひらきには、らん、けん、あれ、つれ、の類、列字に留事を忌む、花見、雪見、に散らしはわるく、月見に字染みたる雲形の短冊をは遠慮すへし、納涼、夏座敷には文字のふときを嫌ひ、鶯の宴、虫選みの會には細書を喜はず、瀧にあろひ、麴類を賞翫する時は、長く書きて切ざるやう、悼、追善、述懐、懷舊、かどには薄墨にて書き、殊に俳名は墨次き濃く書を法とす、其外さま、是に習ひ知るべし

第四十六 御影之事

芋	芋魁 <small>いもがしら</small>
芋の葉	芋莖 <small>いもくき</small>
青芋	蓮芋 <small>あまのいも</small>
栗芋	薯蓣 <small>いもづかひ</small>
自然薯	長芋
零余子	黃獨
何首烏	琉球芋
薩摩芋	菓實 <small>くだもの</small>
このみ	榎の實
榎の實	團栗
杼の實	秋の七種
朝貌。尾花。萩。撫子。	
藤袴。女郎花。葛	
虫撰	新米
今年米	糲挽 <small>あらい</small>
もみ引	新藁

連歌正式の席に天満天神の御影を掛る事、二條良基公より始り故實有る事なり

天満天神と神號を書し掛けたる會席には、法衣禮服を脱ぐ事を免さず、魚類を禁ず

御影束帶の軸を掛けたる時は、法衣禮服を脱を免さず、會席魚類を用ゆるを免す

御影渡唐天神の軸なる時は、會席精進あり、但し連歌一順を終れば法衣禮服を脱ぐ事を免す

俳諧正式も往古は芭蕉以前是に習ひたるものあり、祖翁正風の活眼を開き此道隆盛となり、世の人皆門に入る、是從正風の俳席には初懷紙或は夢想、賀菴等の時は古例を守り、天神の御影を掛け、芭蕉忌には祖翁の像を

稻菊	稻舟
掛稻	稻干
稻扱	稻むしろ
稻の浪	稻の秋
稻守	田の色
秋の田	毛見
田の庵	田を守る
山田守	小田守
おくて守	うぼつ
秋の穂	八束穂
秋垣	穂影
落穂	稻塚 <small>いもちか</small>
鳴子	鳥刼 <small>とりがせ</small>
引板	鳴竿
弾き	案山子
燒帛	鎌帛

掛る事とあり目今、國教の一部に擧られ教職を置く、に至り、三條の教憲を尊守し教會の席には、天之御中主神、高皇產靈神、神皇產靈神の神號を掛け、芭蕉祭には花之本大神の神號を掛るなり

第四十七 諸種俳諧の式

○漢和式 漢和連對の始めは、安部の仲麿遣唐使の時、歸朝せんとするに詩を賦し送る人あり、その詞に「日本、晁卿辭帝都、征帆一片蓬壺、明月不還、沉碧海、白雲秋色滿蒼梧、仲麿これを讀て「あまの原ふりさけ見れば春日ある、三笠の山に出し月かも」と詠し、詩、歌と道は同じからざるも情はかはるまじき理りをしめしつるより起るよし、あれども附會の説にして、連歌に漢和を用ふる

添水	鹿火屋
鹿	牡鹿牝鹿
かせぎ	狹牡鹿
小男鹿	肩拔鹿
妻乞鹿	夢野の鹿
紅葉鳥	班龍
錦馬	鹿笛
鹿垣	鹿狩
秋の狩場	鴨
ぼと鴨	胸黒鴨
黍鴨	黄脚鴨
木雀鴨	鴨の羽搔
百羽搔	羽班鴨
山鴨	草鴨
うは鴨	河原鴨
藪鴨	鶉

は弘治年間菅家の朗詠集に倣ひ、詩句と連歌を合せ執
 行せしより始るといふ、明正帝の御時寛永十五年九
 月廿五日和漢の連歌あり、其表は

雲に月ころもの珠のひかりかゝる 前 關白
 露 息 御 砌 苔 澤庵和尚
 忠 吟 詩 有 助 御
 雁 斷 信 無 來 一絲和尚
 いや高き峯の朝きり立わたり 前大僧正
 松のあらしのふくもえつけき 中納言
 船とひる磯邊に遠さかねの聲 具起朝臣
 暮 村 江 水 廻 僧梵釜

俳諧にも是を引證とす

片うつら	駮鶉
鶉狩	鶉鷹
鶉の床	床しめて啼
鶉衣	うつら網
蝦蟇化して鶉とある	伯勞
鶉の早贄	鶉の草莖
朝百舌鳥	夕百舌鳥
鱸	川鱸
沙魚	はせ釣
鱈	江鮒
小さらし	洲走
名吉	口女
いな	小鱒
いわし引	いわし網
いわし雲	鱒賣

第四十八 第唱句之事

第唱句とは發句の事なり、出來の時其内の平字を除き
 て脇の句の韻字を定るあり、たとへば「必有鄰花見」此句
 鄰の字は眞諄秦の韻の平字を除きて何れの韻にても
 脇の句の韻字を定るなり、但し眞句には入韻字といふ
 事あれども俳諧に於てはしるて其かまひなし

第四十九 二四不同之事

●○○○● 毎句二と四とを不同にするなり、如此二
 字め仄字なれば四字の平字にする也、●是ハ平字にて
 も仄にても両韻にてもくるしからざる也、又●○○●
 ●如此に成すもよし、○●○○●●或は○○●●○○●●如此
 二字めと四字めと同じ様にするを嫌ふなり

九万曳 鰻築

芋虫

○八月之部

月見月 葉月

秋風月 桂月

燕去月 雁來月

壯月 難月

南呂律 白露節

秋分中 仲秋

竹春 中商

桂秋 清秋

深秋 中律

八朔 八朔梅

恃怙の節 憑の節供

田面の祝 田の實祝

たのむの日 後の水

第五十 四字一平之事

上の句 ●●●○ ●●●○ 是二四不同あれども四字仄字にて平字は一字にてあしきあり、下の句 ○○○● ○○○● 是又四字平にして一字仄字にてあしきあり、但し秀逸の句歟又は古語古事をよく用ひ課せたる句あれハ百韻に一所は免す事あり

第五十一 避下三連事

上の句 ○○○● ●●●○ 是二四不同なれども仄字三字下へつゝきたるを、下三連と言て嫌ふなり、下の句 ●●●○ ○○○● 是も下へ平字三字つゝ故あしきなり

第五十二 平仄起之事 二字めを起さしへリ

上の句 ●○○○ ○●●● 是平起あり、此對句は仄起にする

なり

ツイ ●●●○ ○○○● 又此次に上の句付る時は同じく仄起にするなり

上の句 ○●●○ ○●●○ 又此對句は平起にすべし

ツイ ●○○○ ○●●○ 又此對句は平起にすべし

兎角上の句と下の句ならふ時は起を違へてよし、下の句と上の句並ぶ時は同じ起にするなり

第五十三 漢和一座法式之事

百韻表八句の内、漢四句和四句也、面の内對一所有るべし名殘の裏には對あくても不苦、漢和の時は表の八句目和あり、和漢の時は八句目漢あり、擧句も亦かくの如し

尾花の粥 繪行器
天中節八朔 三村祭
堺天神祭 北野祭
白髭開帳 敦賀祭
八幡放生會
野口念佛
鶴ヶ岡八幡祭
宇佐宮祭 箱崎祭
譽田祭
伊勢安濃津祭
三津八幡祭
富賀岡八幡祭
豊浦祭 駒牽
駒迎 菅大臣祭
桑名祭 菩薩祭
西院祭 社

社日	燕歸
釋奠	死活杖の祭
初汐	良夜
待宵月	待宵影
小望月	月見
名月	明月
初月	名高月
今日の月	月今宵
今宵の月	望月
新月十五夜	望のかけ
三五夜	望のかけ
芋名月	端正月
月華	十六夜月
宵不知	倡月
哉生魂	既望夜
立待月	既生魂

面八句の内朱引の句を禁ず、但し唱句は格別の事あり
 百句の内漢五十句和五十句あり、さりながら漢にても
 和にても二三句の多少はくるしからず
 花四本の内漢に二句和に二句あり、月は和漢ともに三
 句五句つゝけてもくるしからず、雪は五つ迄漢にても
 和にても出勝にするなり、二句あるものは漢和兩方へ
 一句つゝするなり、其外異名にてする時は出勝にて一
 句はよし
 五句去、三句去の物はいまた韻字にふますといふ共つ
 かふべし、尤物はつかふべからず、又元魂痕の韻の第三
 に「通籠番二月夜」と附るは番の字元魂痕にては音パノ訓
 はかほる、かさなるど讀むなり、されどいさむとよむ時

居待月	臥待月
更待月	廿日亥中
亥中の月	
廿三夜の月	
眞夜半月	
○以下三秋へ渡る月	
月	さやけき月
月さやか	
月のかつら	
かつら男	かつら影
盃の影	盃の光
月の都	宵月
三日月	二日月
有明残月	弓張月
月の弓	上弦
のほり月	下弦

は歌の韻にて音はハ也、元魂痕の韻にならざる故つか
 ひて不_レ苦、此類心得あるべし、韻外の字は三の裏よりつ
 かふてもくるしからず
 漢句和句共に五句迄續くべし、但漢の句對に至ては六
 句つゝけてもくるしからず、和の句は五句を限りとす
 るあり
 夢想の漢からハ付句も漢にすべし、七言の文句ならば
 七言の對にすべし、其以下は五言にしてもくるしから
 ず、此外指合法度常の俳諧同様なり
 疊字は一座に入句までくるしからず、故に同じ面を嫌
 ふ也、上中下と置所をもかゆべし、假名書は一座一所な
 り

くたり月	月の雪
月の霜	月の氷
しまほし	
さゝらへ男	
てる月あみ	八足兎
新月	月の船
夕月	朝月
哉生明	月の暈
月の隅	月の蝕
玉兎	靈兎
銀監	孀娥
氷輪	眞如の月
月の鼠	暉素
玄兎	常娥
金波	氷鏡
胸の月	心の月

漢和の法は發端にいふごとく第唱句の内の平字の韻を除きて外の韻にて脇の句の韻字を定る也

和漢は和の句に韻字をふまず、是も和の發句の内の平字を除きて脇の句の韻字を定るあり、尤漢の方には韻字をすゆるなり

聲韻は韻字俳諧の字也、常の俳諧に下の句毎に韻字をすゆる也、尤も是も發句の内の平字を除きて脇の韻を定るあり、此外別義あり

第五十四 對句之次第

凡十二門の内乾坤と時候と對にし、器財と食服とを對に用ひ、態藝と虚押も一つに用ゆ、但し態藝の中に軽くして虚押に似たる字あり、又虚押の中に強くして態藝

月の劍	月宮殿
司召	後の彼岸
秋の彼岸	野分
礎	擣衣
衣うつ	四手打
綾卷	しころ打
小夜砧	遠砧
長夜	夜寒
朝寒	ろゝる寒
腔寒	夜寒
冷	冷まし
水初てかるゝ	
雷聲を納む	
秋夕	秋夕くれ
初紅葉	梅嫌
落霜紅	牡丹の根分

に似たる字あり、これを見合て對すべし

人倫の字は氣形門の中に有といへども別に擇出し用ゆべし、虫魚鳥獸等の生類と人倫とを努々對にすべからず

合掌對として惡きあり、是は兩の手を合たるやうに付けたるを嫌あり、たとへば天に地、有に無、寒に暖、長に短、大に小、善に惡、如此の類なり、喩へは其の第唱句に「奪^{うば}鱸^{うしほ}朱^{しよ}」に「奪^{うば}鱸^{うしほ}朱^{しよ}」としたり、合掌對「増^ま鯖^{さば}青^{あお}鱈^{たら}」唱句の意は論語陽貨の篇に「惡^{あく}紫^{むらさき}之奪^{うば}朱^{しよ}也」といふ語にすかりて作れり、俗に朱^{しよ}鱸^{うしほ}といひて切口の赤きあり、茄^{なす}の色を以て紫をもたせたり、對の句は鯖^{さば}を青鯖^{あおさば}といへり、蓼^{れう}にて饅^{まん}あへにせしかば青さを増したる也、さればかやうに魚と魚

芙蓉 木ふよう
 草ふよう 木犀花
 桂の花 漆の花
 縷紅 銀杏
 いてうの實 金剛草
 檀持の花 花紫
 白粉の花 葛の根堀
 芍薬の根分 烏頭
 附子 紫苑
 鬼の志許草 柘榴
 藍の花 露草
 青花 月草
 宇治の花園 敗荷
 金線草の花 芒の穂
 花芒 尾花
 木賊蒴 龍膽

色字、と色字、食類と食類、五の指を合たる如く對したるなり、又此唱句に合掌對にならざる對ならば「裏^つ螢^り光^る草^の籠」此句は魚に虫、朱に光、汁は食物、籠は器財也、ケ様に有れば合掌の難はあかるべし、五字の内二字はとはつかすとも一句の仕立よきを本とすべし、然れども一句さへよくは合掌對といふ難は有べからせ、對句に多くの品あり、色對、喩は黑白に丹青、數對、三千に一萬、聲對は仙と万物對は鳥翼と馬蹄、同對とは山野に江海異類對とは春夏と東西、疊對とは月景と明々、音對とは南と男、義對とは雪と紅と鳥と風との類、扇對、隔對、句中對、等の名あり習ひ置べし

○第五十五 通韵之事

笹りんだう 蔓龍膽
 くだに ゑやみ草
 山りんだう 思ひ草
 尾花が本に咲
 烟管草 茜堀
 蓼の花 馬蓼の花
 犬蓼の花 苦參引
 まひりくさ
 胡黃蓮引 ちふり
 藥堀 採藥
 文珠蘭の花
 濱おもと
 草藤 藤草
 三七の花 新蓋草
 茴香の實 蒴枝
 蔓荔枝 錦荔枝

通韵の習ひといふ事有り、是ハ入韻の字江の韻をとを用ひて(江は韵字少き故韵字に事を欠時)韻につかふべき字あき時、此例を用ひてすべし、喩へば一東と二冬と支脂之と微と通す、魚と虞と通す、佳皆と齋と通す、文欣は元魂に通し、寒桓は刪山に通し、又嚴丸とも通ふ、肴は豪に通し、宵は蕭に通す、歌は麻、陽は庚、咸は嚴、真は侵、蒸は庚に通すと知るべし

第五十六 假名書之事

中華の張九成、日本のいろはを書史會要に載たり、故に往古より用ひ來れり對句にも多し、たとへば、月をつき山をやま、色をいろとかく類あり、真句さへ斯の如し況や俳諧に用ひさらんや、一興有る事あり喩へば「辻堂白

癩葡萄	苦瓜
黃蜀葵	とろ、花
水葵	こなき
通草	鶉草
蕎麥の花	種瓢
籬豆	天瓜
たまつさ	車前子
葵の實	虞美人草
種茄子	種茄子
蘿蔔蒔	菜種蒔
芥菜蒔	罌粟蒔
胡麻蒔	粟曳
秬引	稗ひく
小菜	貝割菜
間引菜	摘み菜
中拔大根	蜀黍引

壁彬』といふに『みきと茂助』此對句に『テンマ宗因』辻堂の白壁の彬まだらに禿はげたるに巡禮などの落書したる落作ありそれに片假名にて對せし也これ俳諧の一體といふべし漢和或は和漢の仕方近頃種々の掟を定め、和の方の句を漢にて作り、韻字を定め、訓に直して長句短句とするもの有り、或は漢一東の韻なれば和の方假名韻ヲコントノ四支の韻なれば『イキシチニ』六麻の韻には『アカサマナ』とするもの有り、何れも古例にあらざれば取るべきものあらねど、いさゝか理をきにあらねは初心の迷ひを防く爲非あるを示す

○賦物之式 賦物は連歌に必ず賦し、之を用るも蕉門の俳諧には用ゆるの沙汰なし、貞徳云ふ連歌には五箇

玉蜀黍	かうらい
茸	菌
木耳	くさひら
初茸	椎茸
松茸	滋地茸
甲茸	紅茸
革茸	鼠茸
石茸	柳茸
天狗茸	平茸
榎茸	棕茸
栗茸	黒皮茸
蛇茸	月夜茸
芳茸	滑茸
鬼筆	狐の傘
繭茸	そなたけ
らうじ	白木の子

十箇をて賦物あれと俳諧は百韻なから俳言にて賦する連歌なれば端作をも俳諧之連歌と書べき也云々と傳ゆれば俳諧に賦物の事は不用なれとも心得の爲め大略をしるす、賦物の文字耳に立字は表を嫌ふ、賦物の文字定まりたる文字とてもあらざれば五箇などといふこともなし、發句に隨ひ興ある文字をとるなり譬へは山櫻の發句に犬と取るべからず犬は山にもわたる故なり蜂か魚かにてしかるべし余は是に准ふ、一字露顯、二字返音以下百韻の俳諧にはとるべからず

賦何衣 年ことに見れとも花はさくらかあ

賦何袋 あかたふとあら何ともあ世々の春

これは上賦といふものにて端作りの何といふ字はあ

はり茸	笑茸
松露	馬勃
中稻	毛見
鷹	鷹が音
鷹	はら白
鷹陣	田面の鷹
わたる鷹	來る鷹
天津鷹	二季鷹
落鷹	白鷹氷雪
海鷹	鷹字
代替る鷹	番鷹
鷹のふみ	鷹の聲
かた糸鷹	鷹の竿
鷹の木	春正
鷹風呂	春正
麥喰	腹またら

予くのやうなる物と心得、句中の花と云字を呼ひ花衣と添へ讀み、また春と云ふ字を呼び春袋と添ゆるあり
 賦猿何 天の川水若からんあしたかな
 これは下賦といふものにて猿若と取りたるあり余は准へ知るべし
 一字露顯 なげかしな、寐ぬは浮世のほどゝぎす
 是は句中の寐を音に取りかしたるものなり
 二字反音 籠て飼ふるらねも高しほどゝぎす
 是は句中のきすをかへして杉と聞かすなり
 三字中略 去り來たる年のあゆみや魚千里
 是はあゆみといふ字の中を略して網と取たるなり

稻負春鳥	色鳥
渡り鳥	小鳥渡る
朝鳥渡る	稻雀
渡雀	入無雀
鷓鴣	翡翠
啄木鳥	寺つゝき
鶉	鶉
鴉	目白鳥
青鷗	赤鷗
鶺鴒	鶺鴒
桑鷹	まめうまし
棕鳥	山雀
四十雀	五十雀
鶺鴒	小雀
小陵鳥	頬赤
畫眉白	瑠璃鳥

三字上略 蝶鳥やちりかひとまる、花鳥
 是はとまるの上を略して丸と取たる也
 三字下略 月はひとつ影は目數のあかめ哉
 是はひとつの下つ文字を略して人と取たる也
 此外四字上下略、喩は難波津を上下略すれば庭となり、五字中略、つはくらめの中三字略すれば瓜とある類ひ、除篇添篇等なり
 連歌には一卷都て賦し、或は表八句を賦すを例とす、又表八句の冠字へ假名にて入る賦あり
 ○裏白俳諧式 裏白俳諧は、裏白連歌に倣ひ、百韻懷紙四枚あるを八枚として其表ばかり八枚に認るあり、歳旦の吉例となす、裏白連歌は洛西北野神社に於て有る

菊秋 桐秋
 晚秋 御燈三日 不堪田の奏
 桂宮相撲八日
 泉涌寺舍利會
 重陽 重九
 菊の節句 菊の日
 重陽の夢 後の雛
 菊の雛 菊花の夢
 菊花酒 茶花袋
 登望郷臺
 九日小袖 温酒
 菊襲 菊の着綿
 栗の節句 海羸廻し
 醍醐祭 御香宮祭
 鞍馬祭 貴船祭

臺を据へ會衆何れも圓座に着し席を立事なく、宗匠執筆は大樹ある本に座取り天神の神號を枝より幹に添へ掛るなり、懷紙は始めより綴り置き附方常の如し、文臺に格別遠き者は歩を運こひ附る事も有るあり、俳諧中たりとも行座をゆるす、茶酒香の三器を携へ童子に執らしむ、吟聲の時句主は柏手して是に答ふ執筆は終りし後綴りたる懷紙の水引を結ひ直し輪に成して枝に掛け置くあり、是も連歌に始りたるを俳諧にも用ゆるあり

○船文臺は 昔三舟の夢とて詩歌、音樂の三艘を以て大堰川に御會ありしより始り、是に比し連歌には元船一艘、端船二艘ありといへども地下俳諧には例をなし

生玉祭 後日の菊 十一日
 殘菊の夢 四宮祭
 下鳥羽祭
 五條天神祭
 野の宮別 山口祭
 例幣 幣使發足
 御難の餅
 住吉の相撲會
 寶市 十三日 白川祭
 天王寺一乘會
 神田祭 岩倉祭
 小倉祭 一宮祭
 牛の御前祭 筑土祭
 芝神明祭 勸學會
 太秦祭 岡崎祭

○茶の湯の俳諧 連歌并に故人に聞かき、隱君子彼の櫻を好める壽庵を招き茶の湯の俳諧表合ありしよし、其後暮雨庵曉臺、知多郡大野の里某がもとにて行ひしを始めありといふ、會席茶道形の如し、但し待屋中央に文臺を置き豫て上席の發句を乞ひ置き、亭主脇を爲し懷紙に認め置き、客待屋に集り次座第三を爲し順次是を附け六句目を上席附て席入す、此間に亭主又附け置く、中立の後亦次座より附け置なり、後席濃茶濟たる時亭主は文臺を持出て披露を乞ふ、詰なる人受け取り披講するあり、通常は十句表にて満尾するをよしとす、れとも近頃は多く歌仙一折を用ゆ

○花立俳諧 是も故人には聞す、曉臺秋磨の頃名古屋

御遷宮	穴織祭
吳服祭	八幡花の頭
城南寺祭	婆利女祭
旅夷	上難波祭
坐摩祭	淀祭
木幡祭	鹿ヶ谷祭
逆髪祭	
天満流鏑馬	
北山祭	津村祭
鳴瀧祭	福王子祭
住吉神送	桂川御碓
嵯峨野虫撰	
十三夜	後の月
後の名月	三夜の名月
栗名月	豆名月
月の名残	二夜の名月

にて行ひ、松の家さゝをに傳ふ、床正面天神御影中央に花籠或は花筒を供へ、左の方花盆の上に花鉢を供へ置く、文臺は床正面を除き少し右の方に構へ、其右に宗匠左の方少し隔ちて花の會頭、其外座席通常の通りあり、但し銘々持參せし花は花手桶に挿し末席の板椽に有り、會主は貴人或は宗匠に發句を乞ひ同時に持參の花を花盆の方に運ふ、貴人或は宗匠は床前に進み花盆を床より下ろし花籠又は花筒を花臺と共に手前へ引寄せ花を撰み、枝數三才程にて活け、或は投入れ花臺を元の如くし花盆は其儘に差置き文臺の前に至り發句をするあり、執筆の受渡常の如し、會主は直ちに一花を携へ床前に至り花臺を引寄せ添花を爲し、文臺に至り脇を

秋の色	山粧ふ
露時雨	露寒し
露霜	秋霜
秋ふかき	今日の菊
菊	十日さく
菊瓶	金菊
黄金草	かたみ草
霜見草	齡ひ草
百夜草	星見草
初見草	千代見草
菊の淵	萬ざく
百菊	承和菊
菊の香	花の弟
乙女花	おきな草
のこり草	しら菊
黄菊	大きく

附るなり、第三より前の花を除き更に活るも又添花するも隨意にして次第に花の品種ふへるより、花持參せざるも手柄を顯すあり、一順付け終りたる時執筆は始めて床前に至り花を活け復座して附句を爲す、是より出勝亂吟と成り揚花揚句は例の如く二句明けにして貴人老人花を活け揚花をする也、通常揚句は執筆なれども此會には會頭床前に至り貴人老人の活たる花を篤と見て、是を直し或は添花をする等一座の納りを定め花盆を引き水縛を持出して花籠或は花筒に水を張り揚句をするなり吟聲常の如し

○畫俳諧は 一時の座興にして確たる掟ありといへども發句の心を取り其景色或は景物を畫くあり、畫に

小さく	山路草
乙女草	手ぢれ草
花の主	猩々さく
醉楊妃	大白
金目	大般若
まり花	菊の薫り
秋さし草	秋の花
いなて草	
秋しゝの花	女草
隠君子	菊合
紅葉	蔦紅葉
草紅葉	櫛紅葉
添紅葉	白樫紅葉
梅紅葉	櫻紅葉
柿紅葉	柞紅葉
眞弓紅葉	檜紅葉

書を附るも三回はせざるなり、附句は三句連れるも妨けなし、書は眞草行にすべしと眞と眞草と草の打越遠慮あるべし、書俳諧の始は不詳、蕪村に有りといふ、金谷もせしよし、師翁醉雨は書工芳洲と屢々書俳諧を爲せり

第五十七 三鳥の事

呼子鳥、稻負鳥、百千鳥、是を古今集三句の禁秘傳受の大事也といふ、其密旨はしるべからざれども、外邊の露顯に付て用ひ來たる所、制の限に有ざるにや、諸書にしるして其趣只神垣の鳥居をこゝて神戸の靈威は見るべからざるが如し、御傘に云ふ「三鳥は古今の大事なれば傳受せざる人はむさどせぬ事なり」と近代の連

むら紅葉	下もみち
岡見草	紅葉焼
紅葉土器	紅葉の錦
紅葉衣	紅葉狩
紅葉焚	地掬
羽衣草	鋸草
色かぬ松	草牡丹
仙蓼	鶴上戸
白英	雪下紅
佛甲草	小蓮花
菟蓐の草	芦の穂綿
尾花散る	芒散る
芭蕉破る	未枯
野山の色	野山の錦
草の錦	枯野の色
枯野の露	柿

歌師は制すれども、俳諧には傳受せざるも正体を知らずとも、只春の鳥と心得てすればよし、其子細は連歌師も昔は是を憚からず、既に宗養は三十九歳にして死去したれば、古今未傳の人也、然れど獨吟にも「啼てかへれは又よぶこ鳥」といふ句あれば、乍去わざとがましく好みてはすまじきあり

呼子鳥、和歌の題によぶこ鳥、常に出せり、更に憚る事にあらざるあり、大事の春の景物を人にさせぬとは道をせばむる道理あり、呼子鳥連歌には一座一句なれども春の季も大切なれば二句するも苦しからず、但世上の人の大事に思ひ付たる鳥あれば俳諧にも先づは一句にて置べし、徒然草に云ふ「呼子鳥は春の物ありとばか

御所柿	公方柿
圓座柿	透徹柿
愛宕山	木練
似り柿	蜂谷柿
木淡柿	熟柿
伽羅柿	田舎柿
樽拔	醪柿
君選子	ふどう柿
柿糕	十夜柿
烘柿	白柿
西條柿	故盧柿
信濃柿	常盤柿
猿酒	梨
青梨	山なし
石なし	水なし
木梨	軒の妻なし

りいひていかかる鳥ともさたかにゑるせるものなし
ある真言の書の中によぶこ鳥なく、時招魂の法をば行
ふ次第あり、これは鶴なり、萬葉集の長歌に「霞たつなが
き春日」などつゝけたり、鶴鳥もよぶこ鳥のことさまに
かよひてきこゆ矣
つれ〜草貞徳抄に云ふ、櫻井基佐、心敬法師にあひて
大原に行て夜話の双紙一帖あり、うの中に
猿 をちこちのたつきもゑらぬやま中に 猿 丸
おほつかかくもよぶこどりかか
山鳥 誰をこよひ待ち兼山のよぶこどり 俊 惠
をろのかゝみにかげをうつして
山鶯 終ひに身の限りあるてふ世のちかに 貫 之

犬殺	をふの浦梨
紅瓶子梨	観音寺梨
圓梨	松尾梨
空閑梨	鹿梨
枳椇	南天の實
漆の實	漆取り
榎の實	杼の實
椿の實	棕の實
罌子桐實	皂提子
菩提子	枳殼の實
栗	落栗
毬栗	茅栗
錐栗	榎栗
栗飯	栗の粉餅
茹栗	蒸栗
燒栗	搗栗

誰れよぶこ鳥、さしてなくらん
鶯 色うすくちりぬる花のかけに來て 宮内卿
たれよぶこ鳥あさなくなく
郭公 來る人も名こそそのせきのよぶこどり 俊 成
こねてわかる、野路のたま川
文段抄には、右の諸説、古今傳受の切紙とは相違のよし、
猶壽命院の抄に傳受かくていゑりがたきといふを與
ゆかしきよし見ねたるとそ、或はぬいといひ、又は小鳥
の友呼ふかりといひ、又鳩とも云ひ、人ともいふとなり、
下學集の註に「日本呼ぶ王孫謂呼子鳥」云々いつれにあ
るべくもゑらざれども、傳受あらざれば其事を定めか
たき秘事なり、故事談布仙の句の註の末に載せたり布

漆 <small>うるし</small>	唐柿 <small>からがき</small>	新榎 <small>しんかき</small>	新松子 <small>しんしょうこ</small>	檜藤 <small>ひんのみ</small>	木薬子 <small>もくやくし</small>	萬年青實 <small>まんねんせいじ</small>	梅檀の實 <small>ばいだん</small>	橙 <small>だいだい</small>	柚 <small>ゆず</small>	花立花の實 <small>はなたちばなのみ</small>	雲州橘 <small>うんしゅうきつ</small>	佛香碧 <small>ぶつかうひき</small>	烏柿 <small>あまきし</small>	じやがたら
無花果 <small>むいじゆく</small>	櫟の實 <small>いしのみ</small>	新胡桃 <small>しんくるみ</small>	菜萁 <small>さいせき</small>	木患子 <small>もくわんじ</small>	檳榔子 <small>べいろうし</small>	老母草 <small>らうぼそう</small>	桐油の實 <small>どうゆ</small>	乳柑 <small>にゅうかん</small>	柑子 <small>かんし</small>	密柑 <small>みつかん</small>	佛手柑 <small>ぶつしゆかん</small>	水木 <small>みづき</small>	馬柳 <small>うまやなぎ</small>	豆引

仙の句は『十炷香の試みなしは呼子鳥』又ある人晋子に呼子鳥の句を望みたれば短冊に書て與へたる句は『むつかしや猿にしておけよぶ子鳥 其角』と又ある人の云ふ猿を呼子鳥といへるは此獸外のけものよりとりわき子をなつかしめりそのうへ梢をも身かろく鳥のやうにわたれば此名ありとちんいへり又もの見鳥とは猿の事あり『あたら夜のあはれを去るやよぶこ鳥月と花との有明のうら』家隆『おほつかなたれよぶこ鳥なくならんこたふる人もなき山中に』基俊或は佛法鳥とも山男とも禡とも云ふ説あり取るべからず『遠近のたつきも去らぬ山中におほつかなくも呼子鳥哉』此歌猿をよめるなりといひならはせともおほつかなき説に

小豆引 <small>あづき</small>	豌豆引 <small>あずき</small>	遅稻 <small>おそいね</small>	稻孫田 <small>いねのちた</small>	尾越の鴨 <small>おしごの鴨</small>	綱代打 <small>つなしろ</small>	熊の栗棚 <small>くまの栗かき</small>	雀海中 <small>すずめなかに</small>	豺獸 <small>おほあけの</small>	番綿 <small>ばんわた</small>	栗祝 <small>くりのり</small>	柚味 <small>ゆずあじ</small>	杼餅 <small>しりもち</small>	暮の秋 <small>くれのあき</small>	秋の限り <small>あきのかぎり</small>	秋を惜む <small>あきをたしむ</small>
綠豆引 <small>あずき</small>	蕎麥荳 <small>そばあずき</small>	晚稻 <small>おそいね</small>	落水 <small>おちずみ</small>	紅葉鮒 <small>もみぢ</small>	霜踏鹿 <small>しもふみか</small>	雀海中 <small>すずめなかに</small>	豺獸 <small>おほあけの</small>	番船 <small>ばんふね</small>	葡萄酒 <small>ぶどうざけ</small>	新蕎麥 <small>あたらしそば</small>	行秋 <small>あき</small>	秋の別れ <small>あきのわか</small>	秋の名残 <small>あきのなごり</small>	秋の湊 <small>あきのみなと</small>	

て、たつきもきき事あり、博物家の説に呼子鳥は深山鳩みやまの鳩あり、其聲人を呼ひかくる如く、哈々ははと一聲づゝ、續け啼なり、依てふた聲鳥ともいふ、莫傳に『それとも去らぬ木立の夕暮にふた聲鳥の啼わたるかな』竹有の附中、二聲鳥として春に出せり是呼子鳥也、深山幽谷に住み、郷里に出ざる鳥にて、木曾地、信濃地、或は高野山等に居るものなり、稻負鳥、稻負脊鳥、鶴鴿とも書く、此鳥の説數多し、馬の事ありといふ説あり、鶴鴿といふ異説、すゝめと云ふ非説あり、大和物がたり』に『さよふけていなおふせ鳥の鳴』と云、庭たゝきの條如何、庭たゝきは夜などいとなかぬ鳥あり、古今集に『我門に稻おふせ鳥の啼なべにけさふく風に鴈は來にけり』といふ、是も何の鳥とも心得か

秋に後る、
 秋より後 冬を待
 冬を隣 冬隣
 秋を隔る 秋過る
 冬近き 九月盡
 深川神明祭
 芝はしやうが市
 氷川祭 赤城明神祭
 根津祭 目黒參詣
 三度栗 柿齋
 龍田姫
 ○十月之部
 神無月 時雨月
 暢月 良月
 陽月 上冬
 立冬 三冬

たし、定家卿の説、稻おふせ鳥かの鳥のなく時、人の家々
 に稻を負ひ入るにより之を號るなり、此頃鴈の來て啼き
 れば、鴈といふ説もあり、日本記にはつゝなはせ鳥とい
 ふ、又伊弉册尊とつき、賜はんとする時、否とのたまひし
 を逆隣ありし、其折ふし此鳥來りしかば、今否とあふせ
 しは、あの鳥の事にとわひ賜ひ、逆隣直り嫁さしたまふ
 ことゝとなふ、扱此鳥の首尾をたゞき侍るを見たまひ
 さとし賜ふ、それよりいさおふせ鳥とも、とつきをしへ
 鳥ともいふよし、是鵲鶴にして此説尊からせ、又人々生
 れ出たる道、陰陽和合してまろめたる所を鳥とあふら
 へたるありと云説も侍り、又三鳥をとり合せ一身の上
 に心得る義侍りて、本來無一物無明の所ありといふ説

九冬 秦正
 小春 初冬
 孟冬 初冬月
 初霜月 小六月
 應鐘律 立冬節
 小雪中 更衣朔日
 孟冬の旬 氷魚を賜
 神送朔日 神の旅
 焦糟を食 拜墳
 炉炭を進 煖炉の會
 亥猪 亥日 亥の子
 むのこ餅 炉開
 巨燧切る 巨燧明る
 神の留主
 達摩忌 五日
 射場始 三日

も侍れば、何分書にかきあらはしえざるすべからずといふ
 説もあり、夫木集「秋の田の稻負脊鳥のこかれ羽も木の
 葉もよほす露の染らん」家隆、古今集「山田守る秋のかり
 いほに置露は稻おふせ鳥の涙ありけり」忠峯、一書に三
 鳥化用の歌として「民の持つ秋の最中の馬を見ていな
 ふせ鳥と人ぞいひける」赤人、是を證歌として馬なりと
 いふ、寂心が發句に「父母や否をおふせるおしへ鳥」是は
 鶴鶴をさしたるなり、又いつの頃にやよみ人しらすに
 て「むつかしやわけてわからぬ三鳥を何とありともい
 なおほせ鳥」俳諧ふりの歌あり、「猿ならばさるにして
 おけ呼子鳥」といふ戯れ句におなし、本草識名に、ニウナ
 イスマメ、ふるさ名いなおふせ鳥とありて、博物家は是

殘菊の妻 五日
 大社神事 中亥
 神あつめ
 興福寺法花會
 御取越 金毘羅祭
 維摩會 芭蕉忌
 御影講 法華會式
 下元の日 十夜
 聖一忌 辨當納め
 水宮厄を解
 戎講 誓文拂
 梅尾虫供養
 法勝寺大法會
 茶の口切 神迎
 初霜 早霜
 初霜消る 霜の袴

による、但し夜は啼かせ渡り雀の事なり
 百千鳥 鶯の事ありといふ説は、慈鎮和尚の歌に鶯の
 題にて百千鳥とせられしよりいふ、只春の物と心得て
 よし、其角が句に『海上は柳か梅か百千どり』又百囀りと
 もいふ、只萬鳥一時に囀るをいふあり、百どりとはばかり
 は數の多き事也『友をちみ川の川瀬にのそみ立て啼く
 百千鳥とは誰がいひけん』
 第五十八 三橋之事
 三橋とは夢の浮橋、鵲の橋、紅葉の橋、此三にして夢の浮橋
 の源氏物語に有り、鵲の橋もみち葉の橋は七夕の詞なり
 夢の浮橋 是は心をさしていふ、春の夜にゆめの浮き
 橋とたへして峯にわかる、横雲のそら』

霜崩れ 霜の花
 霜疊 霜の劔
 霜折れ 霜寄草
 靑女 時雨
 雲雨 初しぐれ
 そでしくれ
 川音の時雨
 片時雨 夕時雨
 村時雨 泪の時雨
 松風の時雨 北時雨
 小夜時雨 朝時雨
 初雪 初雪消る
 初雪見 初氷
 初氷解る 冬牡丹
 金剛纂の花 茶の花
 山茶花 火莖の花

鵲の橋 是は六日の月影をさしていふ『かさゝぎのわ
 たすやいづこ久かたの雲井に白き峯のかけ橋』
 もみち葉の橋 是は七日の日の影をさしていふ『七夕
 のさぬくゝわぶる涙よりそめてふかくるもみち葉の
 橋』
 第五十九 三木之事
 三木とは、をがたまの木、相生の木、めどのけづりかけの
 木也、
 をがたまの木 此木色々の説あれども正義は 帝王の
 御即位の時、春日山より松を伐よせて其枝をまはり五
 寸、長さ口傳にけづりて、天子の御生れ年の年號月日等
 を朱にて書つけ、上を錦にてつゝみ、御肌にかけさせ奉

歸り花	歸り咲
忘れ咲	水仙花
枇杷の花	散紅葉
名の枯草	落葉
落葉山	木の葉
木の葉舟	木の葉衣
木の葉時雨	
木の葉の雨	朽葉
木の葉降	冬木の櫻
室咲	室の梅
枯柳	柗の花
榎の花	枯尾花
薄枯る	菊枯る
萩枯る	萩枯る
葛枯る	枯芦
冬椿	麥蒔

り、御即位の後、此木を伊勢太神宮へ納めらるゝ也、是秘
 事中の秘中あるよし、又をがたまの木といふ物有り、榊
 の木に似て常盤木なり、榊の代に用ひて枯ることあり
 木也、是と混すべからず
 相生の木。是は高砂、住吉の松の事あり、さかひはるか
 に隔れども相生といふ事いかに、和歌の道
 聖武天皇の御時萬葉集を撰み賜ふ、其昔をさして高砂
 といひ、又延喜帝の御時古今集成る、是をさして住吉と
 いふ、此道湊ひとつ也、殊に君臣心をひとつにして末代
 に残れるを君臣和合相生の木といふあり
 妻戸の削掛の木。是は作り花の事にて、后初て入内の
 時、妻戸の脇に作り花をたて置かるゝあり、是をめぐり

蕎麥荊	蕪
大根引	鶯子啼
氷魚	鱈
鱈網	鱈
干蕪釣	干大根釣
かけ菜	青干葉
干菜	切干
千切大根	莖漬
莖菜	莖大根
淺漬	もみ蕪
湯島天神祭	御通夜
〇三冬にわたる	
冬	顛頊帝
玄冥神	玄帝
折木	上天
玄英	安寧

けづりかけの木といふ、又けづり花ともいふ

第六十 四季山姿并四姫之事
 春山淡治而如笑、佐保姫、夏山蒼翠而如滴、山姫
 秋山明淨而如粧、龍田姫、冬山慘淡而如眠、遠山姫

第六十一 五風の事
 東の方より吹を、東風、東南の間より吹を、ひかた
 西南の間より吹を、ならひ、東北の間より吹を、あゆ
 中央より吹を、玉津風
 世に十雨五風といふ事あり、是は十日目に雨ふり五日
 目に風吹けは、邪氣を拂ひ五穀成就するといふ、此五風
 とは別也

第六十二 八柏の事

羽音	律檀
霜	みつの花
霜ばしら	霜夜
霜氷る	雪
六の花	玉の塵
玉の屑	雪消
はたれ雪	
かたひら雪	
たひら雪	雪しまき
雪おこし	雪竿
雪やけ	雪團
雪打	雪礫
雪垣	雪佛
雪女	雪の山
雪蛆	雪の肌

このて柏 兒の手に似たるをいふ女の心のたしかならぬ人によろへてよむありなら山のこのてかしはのふたおもてとにもかくにも倭人かゝる又女郎花の歌にもよみあらはしぬ『いはれ野の萩がたる間のひまゝにこの手かしの花さきにけり』掌柏は檜屬にして堅に枝ふり大樹と成るものなり
 玉がしは 石の事なり、蛤の貝の玉をもいふよし難波江の藻にうづもるゝ玉がしはあらはれてだに人をこはばや『えらせばや思ひ入江の玉柏舟さす棹の下にこたへて』石を柏といふ事神代に下根の邪神をえたがへ賜はんとて軍に勝べくは此石くだけて柏の如くなれとて、蹴賜へは忽まち石碎けて木の葉の如くあがりけ

吹雪	吹雪倒れ
氷	薄氷
厚氷	うすらひ
氷のくさび	氷の花
氷衣	氷の聲
氷面鏡	水草
川の氷	池の氷
氷柱	垂氷
銀竹	霰
霰	電
あられ酒	あられ餅
凍	冷たき
水涕	凝
寒さ	餅
霜やけ	靱
炭竈	炭焼

ればそれより石を玉かしはと云ふとあり又うつくしき柏を譽めて玉柏といふなり『玉柏えけりにけり五
 月雨にはもりの神のえめはふるまで』
 須磨の柏 海和布の事なり『なには女がすまのかしはをひろいても日も夕くれにきればみちぬる』
 いわど柏 岩角の白々としたるをいわどかしはと云ふ野に多くよめるは子細あることあり古今傳受の内
 に『よし野河岩どかしはに波こねてときはかきはそ我君がため』
 葉廣柏 四季の柏木あり『ねやのうちに片枝さしかほふ外面なるはひろ柏に玉あられふる』

賣炭翁	炭
小野炭	池田炭
佐倉炭	白炭
細炭	切炭
枝炭	廻炭
松坂炭	炭俵
炭頭	獸の炭
消炭	炭團
助炭	爐
塗爐縁	巨燧
圍爐裏	櫛
ほだ火	櫛焚
櫛明り	櫛の宿
火鉢	火桶
桐火桶	手爐
手あぶり	懷爐

水^〇の^〇柏^〇 二見の浦にて水に柏をうかべて、波に浮くは思ふ事かきふ、沈むはかなはずとて善悪を占ふをいふ『思ひあまり水のかしはにとふ事の沈むにうくは涙なりけり』又みづのかしはとよみ、三角柏と書くよし三葉の柏を云ふ也、是は太神宮にて三葉の柏を取て占事有り、是を投けて立はかなふ、たぬはかなはぬといへり、御綱葉(日本紀)三綱葉(延喜式)三角柏(國史)と書けり『神風やみづのかしはに事とひて立をま袖につゝみてぞくる』又見、つゝ柏ともよめり『我妹子が御もすそ川の岸に生る人を見つゝの柏とぞしれ』

むら柏 是は北國にて雪を拂ふ俗にからすきといふものゝ名なり『あらし吹遠山もとのむら柏軒端より

温石	鹽温石
湯婆	埋火
蒲團	座蒲團
袴	襪
頭巾	丸頭巾
角頭巾	綿帽子
足袋	踏皮
足皮	襪子
手袋	目利安
さゆる	月冴る
鐘冴る	風冴る
寒む空	寒き夜
寒き朝	冬の月
山眠る	胡蘿蔔
葱	根深
ひどもじ	枯野

先雪拂ふらん』又むら立なる柏をいふ『中空に夕立雲のむらかしはそれさへ風に散りにけるかき』

難波かしは 芦の葉をいふ『紅葉菊千くさの露にやどる月今はなにはのかしはにぞすむ』

〇古今切紙傳授に此八柏の外一柏あり、もと柏といふ是は土筆の事なり、崇神天皇の御時、つくゞしを于てこれにて文字を書たるよし『いろのかみふるから小野のもどかしはもとの心は忘れなくに』ふるから小野は春日にちかき里なれば鹿の毛の筆を忌む故ありとぞ、

第六十三 七箇之事

箇? おもひかへすつゝといふ『おもひつゝぬればや人

冬野	朽野 <small>くだの</small>
冬木立	寒菊
冬菊	水菜
冬菜	冬大根
鷹	鴿 <small>はたか</small>
兄鴿	雀 <small>すずめ</small>
雀賦	雀 <small>すずめ</small>
鶉鴉	鶉 <small>はたか</small>
鶉鳩	鶉 <small>はたか</small>
鶉鳩	鶉 <small>はたか</small>
鷹匠	追鳥 <small>おしどり</small>
鷹狩	鳥叫 <small>とこけび</small>
偷立鳥	ぬき立鳥
剪鷹	をしへ鳥
をしへ草	落草
力草	ぬくめ鳥

の見につらむ夢としりせばさめざらましを』
 調 いひおはするつゝいといふ「梅か枝に來居る鶯はる
 かけてきけどもいまた雪はふりつゝい」
 台 感心のつゝいといふ「春がすみたてるやいづこみよ
 し野のよし野の山に雪はふりつゝい」
 宛 程ふるつゝいといひ又かさねつゝいともいふ「山ざく
 ら我見に來れば春かすみ峯にも尾にも立かくしつゝい」
 都 ありかへりのつゝいといふ「るもやすく寝られざり
 けり春の夜の花の散るのみ夢に見ゆつゝい」
 捨 すてつゝいともいひ捨のつゝいともいふ「山ざとは秋
 こそことに佗しけれ鹿の啼ねにめをさましつゝい」
 定 思ひ定るつゝいといふ「田子の浦に打出て見れば白

鴨鷹	真柴 <small>ましば</small>
身よりの風	鳥立 <small>とたち</small>
鳥歸	鷹犬
狩杖	狩場 <small>うらば</small>
野守の鏡	列卒 <small>れつそ</small>
鴛鴦	鴛鴦の襖
皂	白皂
黒皂	すゝ皂
さき鴨	あち鴨
皂巴	鴉 <small>あち鴨</small>
あぢの村鳥	沉皂 <small>たかべ</small>
眞鴨	小鴨
阿伊佐	水鳥
浮寢鳥	衛 <small>ゑん</small>
川千鳥	村千鳥
浦千鳥	嶋千鳥

妙のふじの高ねに雪はふりつゝい」

第六十四 三の使之事

三の使とは、鴈の使、犬の使、風の使、是なり、何れも漢土の
 故事より出たれども歌にも讀み、我國のをしへにもす
 るなり、
 鴈の使とは漢の武帝の時匈奴に單于といへる戎王あ
 りて漢の王命にたかはず、蘇武といへる臣下をして
 節を持せて使とす、單于無道の戎なれば蘇武を捕らへ
 て漢に還さず海岸の窖うかぐらに入れて羊を飼はしむ、蘇武は
 漢の節を守り雪を食して死せむ、或時鴈の足に文を附
 て放ち遣るに、此鴈漢都に歸る十九年の後蘇武ある事を
 知り、匈奴を伐て蘇武を迎ふ此故事より起る、鴈の使、鴈

儀千鳥	小夜千鳥	しば鳴千鳥	濱千鳥	夕浪千鳥	友千鳥	千鳥足	ちりく鳥	木兔	梟	夜興引	鶴鷄	柴漬	笹漬	竹筍	笠	網代	網代守	生海鼠	海鼠腸	雲腸	申貝製	牡蠣	豚河	西施乳	ふぐ汁	ふくと汁	鮎	鯨	鯢	勇魚取	鏡突	鍋焼
-----	------	-------	-----	------	-----	-----	------	----	---	-----	----	----	----	----	---	----	-----	-----	-----	----	-----	----	----	-----	-----	------	---	---	---	-----	----	----

の玉章といふ、亦報恩經賢愚經等の説に『過去月蓋王の太子に善友と言ふ人あり弟の悪友の爲めに眼を損じ諸國を流浪す悪友罪せられて王太子を求むれども玄らず善友の母善友の飼置たる鴈の首に迎狀を附けて放ちたるに、太子の許へ往き着きて之を届けたるよし』ふるき故事あれども歌にはとらざ、吳竹集に蘇武が故事を『鴈の羽に結ひし文のとしつきはかた糸鳥の血の涙なり』かた糸鳥は鴈の異名なり

犬の使は西晋の陸機字は士衛身の長七尺にして文章世に冠たり、快犬を飼ふて黄耳と名つく、陸機洛陽に有る時書を竹の筒に納て頭に繫けて故郷に使す、其路山川あれども恙なく還り届けたり、是を犬の使といふ犬

養生喰	鹽鱈	凝鮒	養凍	風炉吹大根	蕎麥湯	蕎麥搔	納豆	納豆汁	納豆叩く	鶏卵酒	生薑酒	紙衣	綿衣	袈	厚袈	綿入	布子	短日	冬櫻	冬の鹿	武	雪車	雪履	綱貫	櫓	〇十一月之部	霜降月	霜月	霜こもり月	雪見月
-----	----	----	----	-------	-----	-----	----	-----	------	-----	-----	----	----	---	----	----	----	----	----	-----	---	----	----	----	---	--------	-----	----	-------	-----

もつかへば一人前といふも是より出たる詞なり、或戀の歌に『くるひたる心の犬のつかひせばおもひこかると人にとゞけよ』

風の使とは、河圖帝通記と云ふ書に『風は天地の使なり雷は天地の鼓なり』と有り、是より風の使とはいふなり古今集に『梅が香を風の使ひにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる』

第六十五 古今の序花に啼鶯水に住む蛙之事

花に啼く鶯の歌ハ 人皇四十六代孝謙天皇の御宇、大和國高天寺に住む僧、最愛の童子ありけるが程無く身まかりて三年に成りたる春の頃、軒端の梅に黄鳥來て啼聲を聞けば『初陽每朝來、不相還本栖』と鳴く、是を彼僧

子の月	神樂月
天正月	復月
暢月	辜月
一陽	會星
雲を書	冬半
黄鐘律	大雪節
冬至中	仲冬
周正	曆の奏 朔日
曆賣	宮線を添
履襪を獻	
赤豆粥 冬至	袴着
帶とさ	被衣初
髪置	甲子祭
初子	子燈心
相嘗祭	宗像祭
杜本祭	當麻祭

硯の上になつして能々見れば三十一文字の詠歌あり
 『初春のあしたごとには來つれどもあはでぞかへるも
 とのすみかに』と鶯の聲ながら扱は彼童子、生を替へ
 て來たるにやと、愁涙膽に銘ずとかたりたりといふ、
 水に住む蛙の歌は、昔壹岐守紀良貞といふ人、住吉に參
 詣の時、浦の忘草求めに出ければ、木の本になつくしき
 女のひとりたてり心を懸けて言ひよらむとすれば、彼
 の女、今は露ばかり思ふ事あり重ねて爰あたりに来給
 へ必ず逢ひ見んと契りて諸共に立別れ歸りぬ、次の年
 其契りの如く良貞又彼の浦に出て待けれども其女の
 面影とおぼしき人は無く、砂子の上を前わたりする蛙
 ぞ有りける、其蛙の足跡を見れば三十一文字の歌あり

梅宮祭	當宗祭
松尾祭	中山祭
三島酉の市	卒川祭
大原野祭	
日吉臨時祭	
園韓の兩祭	山科祭
春日祭	御祭
鳥かけ	日の使
後日の能	平野祭
五節舞	帳臺の試
殿上の淵醉	
童女御譚	鎮靈祭
新嘗會	豊明節會
狩の使	鶉祭
加茂臨時祭	
東三條御神樂	

讀みて見るに『住吉の浦の見るめも忘れねばかりにも
 人に又とはれぬる』此時良貞驚きされば過しかた見ぬ
 ける美しき女は蛙なりしよと思ふて戀のこゝろぞ覺
 めけるとなん

第六十六 曲節地之事

曲節地の三ツとは發句にも付合にも有るなり、
 曲は時の變なり、火をも水にいひなし魂無きものに魂
 を入れ見ぬ世の先をも造り出す等虚實の間にあり、俳
 諧の作意句主のはたらき一二字のあつかひにもある
 なり
 節の詞のかざりなり、一句の風体をそかへ當用のとり
 合をなすまでにて人々の好による

里神樂	山神樂
日蔭の糸	心葉
日蔭かづら	神遊ひの歌
阿知女	神樂歌
庭火	採物の歌
韓神謠	大前張
小前張	星諷ふ
朝倉	榊葉
早うた	御火燒
吹革祭	
新玉津島火燒	
空也忌 十三日	
曉の鉢叩	道陸神
報恩講	智惠の粥
宇賀祭	山の神祭

地は常なり、何しらぬ人の耳にも聞き分けやすきやうにするあり、此曲節地を以てそれくの趣向に働きを添へ、句作りをなすこと其人の手癖と器量をあらはすにあるなり、祖翁の句「いざゝらは雪見にころふ所まで」此句、いざと言ひかけたるは問なり、さらばは詞のかざりにして則節なり、雪見に、といふは此句の趣向なり、轉ぶは未來にして則曲なり、所と添へたるは常にて地なり、までとゝめたるは、いざと問ひたるの答なり、一句中曲節あるを發句といふ、平句か、第三ぶりか、發句かと風体の差別をしらずは切字のみ有ても發句にあらぬも有べし「行春をあふみの人とをしみける」(ばせを)此句初心のいは、をしみけり、として切字有りと思ふ

歌舞伎足揃	芝居連見
顔見世	寒念佛
深雪	寒造
寒垢離	冬至梅
寒聲	新生姜
太山橋	寒苦鳥
生姜堀	鱒
杜父魚	澤庵漬製
藥喰	御鷹の鶴
寒藥製	蠣飯
御鷹の雁	蠣糝
蠣粥	
○十二月之部	
極月	臘月
除月	窮月
春待月	弟月

第六十七 以心傳心之事

べし、都て平句めくなり、ける、といひて句の面に切字はなけれども下段より心をめぐらせば句外の意は、えるべく「行に」あふといひ心詞の添所なれば、をしみけり、と治定するよりも姿情ふかくして、發句と成を句作の働といふ、よく考て切字にふかき道理をえらば、修行なくては得たりといふべからず

以心傳心とは修行成りて自から發明するをいふ、修行ならせして悟りがほにすれば、大なる過ちを起すべし常に初心のこゝろを忘れず、初心に教る切字の法を守り、掟たる切字ある發句をさへすれば、自然と玄妙の理をしるべきなり、たとへていは、佛敎者のなまものじ

三冬月 梅初月
 乙月 年濟月
 大呂律 小寒節
 大寒中 師走
 季冬 急景
 般正 霜蟾
 朔年 暮冬
 弟兄 乙子朔日
 乙子の餅 寒の入
 寒ざらし 寒月
 臘月 忌火の御飯
 大神祭
 天智天皇御國忌
 温糟粥 臘八
 御躰御卜奏 臘八
 月次の祭 神今食

りが佛法は嘘なり地獄極樂はなし杯いひあへるも病みて切なく臨終の時に至りて念佛唱へる事常の愚なる人に變る事なし能く其深き所をえらざればあり法は道を考て立たる物なれば俳諧も初心執行は初心に教ゆる法をよく守りて自然と悟道發明する時節有るべし其時誠に開悟せしや否や自ら了解する處あるべし是を以心傳心とも教外別傳ともいふなり

第六十八 都鳥之事

都鳥は澤養鳥類にして鳴千鳥の部なり八雲御抄には城鳥と書てすみだ川ならでも京近き河にも有り白鳥の背と足あかき鳥なりとあり本草識名「都鳥一名ウバシヤ形ち鴨に似て大なり背長大にして足高く三指赤

御佛名 かづけ綿
 柏梨の勸盃
 年終の鬼祭
 星佛賣 事始
 荷前の使 御髪上
 土午童子の像を立
 着駄の政
 内侍所御神樂
 最勝寺灌頂
 正月事始 衣配り
 大徳寺開山忌
 和布疋の神事
 齋宮の繪馬
 吉田大稔
 厄塚を建る 追儼
 鬼やらひ ちやらふ

色なり頭より胸まで及ひ背翎の上に通り尾端黒く腹白しと今誤て鴈の如くに言ひ水に浮たる繪畫あるのみならず吾妻橋より川上に浮たるを都鳥といひ川下に居るをかもめなりといふ甚しき附會の説なり鴈一名はあ。白。鳥。浮。游。鳥。類。に。し。て。翅。白。く。背。と。足。赤。く。水。掻。あ。る。鳥。な。り。都。鳥。と。此。鳥。を。誤。り。た。る。始。め。は。古今集第九羈旅の部に「むさしの國としもつふさの國との中にある角田川のはとりにいたりて都のいと戀しうおぼはければしはし川のはとりにおりて思ひやればかぎりなくとほくもきにけるかきと思ひわびてながめをるにわたし守はや船にのれ目もくれぬといひければ舟にのりて渡らんとするにみな人物わびし

大舍人	鬼をつとむ
鬼は外	福は内
柞賣	柞さし
名吉の頭挿	豆を燉
鬼の豆打	豆はやす
年の豆	節分
年内立春	厄はらひ
厄おとし	
浅草寺年の市	
浅草観音追儺	
船神祭	除夜
晩歳	餽歳
別歳	除歳
歳暮	年の末
年の終	年の尾
年の湊	春急く

くて、京には思ふ人なきにしもあらず、さるをりにしろ
 き鳥のはしとあしとわかき、川のはしとりにあそびけり、京
 にへ見ぬぬ鳥成ければみな人見しらす、わたしもりに
 これは何鳥ぞと問ひければこれなん都鳥といひける
 をきよてよめる『名にしおはゞいざこと問はん都鳥我
 思ふ人はありやなしやと』是を伊勢物語りの、九節に假
 り載せて前文略同じければはぶく京に思ふ人なきに
 しもあらず、さる折しも、しるき鳥のはしとあしと赤き
 しぎのおほきささる、水のうへにあそびつゝいをく
 ふ、京には見ぬぬ鳥云々と、古今集のかた川のほとりに
 あそびけりとあれは澤養鳥にして、都鳥なること明白
 なり、それを伊勢物語の作者は知らずして、鷗のことな

惜む年	年の限り
いぬる年	年の際
年の果	流るゝ年
春近き	年満
年の別	守歳
年の名残	小三十日
大三十日	年仕舞
私大	分歳
春隣	節季候
胸搗	姥等
煤掃	煤拂
煤取り	札納め
かまとを祀	餅つき
もち花	餅薙
青むしろ	薙賣
米洗ひ	鳴子舞

らんと誤りて、水のうへにあそびつゝと書かへたるよ
 り、世の人も沖の鷗のごとく思ひあやまりたるものな
 り、鷗うは鷗う鷗うの類にして雑なり

第六十九 かた鶉の事

鶉は必ず雄雌ひとつに居るものなり、それがかたぐ
 別れ居るを片鶉とは云ふなり、鶉のひとつ所に居るを
 鶉の床といふ、巢にはあらず、又巢らしくもいふ説あり
 『床しめて啼く』『床さびしく啼く』などよみならはせり、又
 或秘訣の書に『かた鶉はひとつ啼くなり』『かけ鶉ふた
 つ啼なり』といふ、是は取るべからざる説なり、かた鶉よ
 しひとつ啼にもせよ、かけ鶉のふたつ啼といふ事なし
 若しうけ鶉ともいふにや、かけ鶉は駈鶉と書いて藻汐

寶船 糺の札
糺の枕 年忘
年の市 神折敷賣
穂長賣 楪
かや かちぐり

年取物 葉竹
葉竹賣 飾り繩
手まり 手桶

張子達摩 蓬來飾
飾り松賣 小松賣
門松營む 年木樵

年木積 星祭
古曆 曆納
右に卷曆
卷はつる曆
曆の末 春を待

草に鷹狩なり、是は馬上にて鷹を居へて狩り立て鳥に合するをいふなり云云、鶉鷹のことにて秋季なり、又鶉のふけるといふは囀ることにて春季に取なり

第七十 ひもす鳥の事

ひもす鳥は鳥からすの事なり、ひねもす鳥といふをつしめたるにや『ひくれぬと駒をはやむるみやまぢに心安くもなくひもすどり』人丸のうたなり

第七十一 姫雛鳥の事

ひめひな鳥はひばりの事なり『春の野にひめひな鳥のあがるなり霞のうちに聲きこゆつゝ』興風

第七十二 松むしり鳥の事

松むしり鳥とは小松原をどに啼たてる春の蟬をいふ

年籠 年参り

掛乞 掛取

掛乞鬼 節季

三冬盡る 逆さ裳

岡見 大原囃喉寐

才藏市 王子狐火

終年 年の夜

とし守る 孟宗筍

早梅 冬椿

福壽草植る 臘梅

寒梅 年梅

八ッ目鰻取

蓑和田鯉取 寒鯉

寒鮒 鮭塩引 干鮭

塩鯉 口塩の鱈

鵲姑て巢作る

第七十三 閑子鳥の事

閑子鳥は和漢三才圖會に言ふ、加豆古宇鳥かづこならん、狀かたもの杜鵑かき及び虫食鳥むしくに似て、微赤色あかいろを帯び、腹白くして、黒斑くろまだらなきのみ、脚も亦二つ前二つ後あり、江戸にて杜鵑と偽りこれを賣、仲夏の後聲あり、秋後聲を止む、其聲大にして圓亮、加豆古宇と言ふが如し、山林に住みて人家に近づかば、又蚊母鳥、かすい、ぼつぼと、かつこ鳥、其聲羯鼓をうつが如し、俗に羯鼓鳥と書く

第七十四 八道志鳥の事

八道は仁義禮智忠信孝悌なり、此心に叶ふを以て八道志鳥といふ
仁鳥 鷹のことなり、冬夜小鳥を摺んで足を暖め、翌朝

鶏乳む 鯛みそ
豆腐氷る 蒟蒻氷る
長崎の柱餅
年の夜の太神樂
神田明神年越拂
龜戸鬼やらひ

○非季詞

(神)

諏訪祭 葉守の神
梅の宮 婆利塞女

(釋)

落葉の宮 鹿野園

妙法蓮華

僧聚の散す花

楊柳觀音 雪山童子

(天)

稻光り 初風

雷 霞谷 霞ヶ關

隴 虹 日蔭

(地)

和泉國 放生川 千沙

櫻川 黄泉 柳の浦

柳島 柳の水 柞の森

柞山 橋の都 藤原都

落葉山 木葉里

木葉沖 菜摘川

富士の雪 志賀山越

鶯塚 秋津島

(生)

鹿の角 鹿の皮

鹿毛の筆 藻に住虫

その虫 鰯

是を放すに其行たる方にて、其日一日鳥を取ずといふ
義鳥 鶯のことなり、昔帝御幸の折柄上意なりとて獲
ふるに少しも動す心妙なりとて五位を賜ひて放つに
三度舞ひ下りて謝したり、五位鶯を屬玉といひ、白鶯を
雪客といふ

禮鳥 鳩のことなり、三枝の禮とて親鳥より上枝に居
らす、必ず三枝を下り隔つといふ、禹夫とも班衣ともい
ふ

智鳥 雀のことなり、白雀は才智秀る、人の庭に來つて
囀るといふ故事あり、又勸學院の雀は蒙求を囀るとい
ふ、喜賓又巧婦及賀厦の名あり

忠鳥 鷄のことなり、函谷關の故事あり、亦飼養せらる

る主に時を報するあり、窓禽、朱翁又、翰音とも言ふ

信鳥 燕のことなり、年々來て古巢に栖す其家を忘れ
ざるといふ乙鳥なり

孝鳥 鳥のことなり、反哺の孝とて親を養ひ戻すとい
ふ卑居又報喜の名あり

梯鳥 鴈のことなり、飛中友を射らるゝ時翼を以て之
を覆ひ助け去り遠岸に至りて醫するといふ、鴈行亂れ
は敵有るといひ又蘇武の故事有り、陽鳥、鴉鵲、翁鳥の名
あり

第七十五 三疑題之事

秋の題の内にもつもの疑ひといふ事あり、蒹葭、河鹿、思草、
是なり此みつの物は古人より定まらず

鴉	鴉の巢	鴉	鴉の巢
玉虫	放れ鴉	鴉	放れ鴉
鶴の巢	鷹の巢	鴉	鷹の巢
鷗	鶯笛	鴉	鶯笛
都鳥	秋津虫	鴉	秋津虫
櫻鳥	雲雀毛の駒	鴉	雲雀毛の駒
黒牡丹	蛇	鴉	蛇
蜘蛛の巢	蟻	鴉	蟻
鮎	鯉	鴉	鯉
鯖	鰈	鴉	鰈
海老	鯛	鴉	鯛
鳴の羽盛		鴉	
(植)		鴉	
花紅葉	繁み	鴉	和布
榎	梨の木	鴉	柏
椋	千草	鴉	千草

○蒟枝。通名なり、和産未詳、幹を將軍樹といふ此實藥店にあり龍眼肉に似て少し大きく赫墨色、形丸く上に凹凸點有り、花實とも時を知らず、今秋季の題に有る物はこれならず

蔓蒟支、漢名苦瓜、時珍に錦蒟支とあり、秋に至り其實熟す、農人取て食す味ひ甘し通常是をれいしといふ、大きさは鴉瓜程にして鋸齒條の瘤あり、初青色熟して黄色と成る、種も鴉瓜の如く俗に大黒條茶黄色の物有り、葉は瓜の類にして蔓生なり、稀れに青物屋菓物店に有り、歲時記にいふ五月種を下ろし七八月小黄花を開く五辨なり、實は二三寸より四五寸に至る初青色後黄ばむ、外面瘰癧の形ちの如し、仍て瘰癧葡萄と號く

百草	菜種	百草	菜種
菜島	磯菜	百草	磯菜
忘草	淺茅	百草	淺茅
松	杉	百草	杉
櫻木の板	椿葉	百草	椿葉
薊	密	百草	密
くちあし	樹の葉	百草	樹の葉
まこも	藻	百草	藻
葎	胡桃	百草	胡桃
眞菰	蓬生	百草	蓬生
青葉	田を作	百草	田を作
綿	とくさ	百草	柿の澁
椿油	枯木立	百草	枯木立
(人)		百草	
末摘花	夕顔の上	百草	夕顔の上
空蟬の君	柳下惠	百草	柳下惠

古人より蒟枝と書き來たるものは此苦瓜のことにて蒟枝と蔓蒟支を誤りたるものなり

靈芝同音異物あり、一名さいはひ茸、赫黑色にして堅く光輝あり、俗に猿の腰掛といふ菌に似て莖あるものあり、四季の別なく山林岨森に生ず、此物庭前に生ゆる時は其家に幸ひありといふ仍て此名あり、是は菌の類あれども秋季にならず、偶季寄の内秋季に入れたる物あり、夫は悪しと先師鶴叟は言へり

○河鹿。此文字は河に有りて其聲鹿に似たりといふより押當たる名なり

土鱸魚はかくぶつに似て、小さく背黒色、腹油色、鱗かさものありと、食物本草に出せり、世人此ものを河鹿あり

梅林和尚 花娶
花智 苗裔
薄殿 櫻町殿
銀鹿 使の事

(食)

菜飯 茶の花香
花がつを煮梅 梅干
干蕨 干瓢 煎豆
味噌豆 馬の豆
餅を搗く 赤小豆粥
栗 ひね
きび 胡麻
芥子 麥
蕎麥 霰餅
鶉餅 椿餅
葛餅 粟餅

といふ啼べき物とは思はれど、又山川溪谷にすむ蝦虎魚に似たる魚ありて啼く、是を河鹿といふ覺束なき説あり
杜父魚かくぶつ季寄冬季に出る、是を秋河鹿と呼び杜父魚と唱ふるといふ説あり『春はこり、夏はいしぶし、秋かじか、冬はあられ、のかくぶつと知れ』北海にありて、鮫鱈河家の如く腹大きくふくる魚あり、霰ふる時腹を仰向け是にうたせて愉快とし啼とも眠るともいふ取がたき説多し
錦襖子蝦蟇の條、かたち雨蛙或は井手の蛙の如くにして少しく瘦せたるもの、赤黒色又茶褐色、指先に吸附點ありて枝蛙の如し伊勢の五十鈴川、鈴鹿川、京加茂川、美

蕨餅

藥種

鮭の櫻煮 しのぶ摺
衣葛袴 花の帽子 青田色
くちなし染 曙布
霰地の錦 乗掛布圍
經帷子
(人事)
詞の花 野遊ひ
顔の紅葉 頭の雪
眉の霜 寝汗
病汗 呂のしらべ
駿河舞 求古
椽程の泪 目星の花
雀躍 胸の踊 鴈の骨
雲雀骨 藤原氏 節會

濃長柄川信濃木曾川等清水に住み濁水には住まざ春秋ともによく啼きて其聲小鳥の囀るが如く、又水鷄の戯くにまがふ、よき聲なり、春子を産むなり、先師鶴叟は錦襖子は春の河鹿あり鱸魚は秋の河鹿ありと言はれたり、春の河鹿、蒼虬が附合中に出せりと、或人の説に昔京師の人河鹿の聲をきゝて其かたちを見まくほしとて、加茂川を望むに河鹿は蛙の如く賢きものなれば、其氣早く石おとの下へ隠れしを知らずして、其人水底をうかい見るに川はせの如き魚ありければ、これなんよき聲たてつと思ひ誤り、歌にも句にも詠ならはし、是より鱸魚をさしてかじかありといふ、されは錦襖子を以て河鹿と定むべし、句作は河邊に鹿のねのあるが如

柳文 櫻人
 (雜器) 柳營
 梅壺 柳樽
 柳筥 柳樽
 花眞壺 梨子壺
 あられ釜 笋皮笠
 網代屏風 網代笠
 網代車 網代輿
 あじろ箱 花塗
 花形 花土器
 浪の花 花丁子
 灯の花 年の花
 藤つな 藤つゝら
 藤繩 唐團扇
 軍配團扇 舞扇 禮扇
 ○正花の部

くすれば、初心といへども必かなふなり
 ○おもひ草 漢名未詳、俗に思草と書く俳諧歳時記龍
 膽の下に出たる説は、和歌八重垣の抜き書なり、其説は
 歌林良材の書寫、夫を略して書しもの其説は、おもひ草
 は草の名にあらす、たゞ草をいふなりと、或は龍膽とい
 ひ、或は露草といふ、通具郷の説「道のへのをはながもと
 のおもひ草いまさらにかそものをおもはむ」あまた本
 歌にとれり、又龍膽なりと定家郷の説あるよし云々と
 此歌万葉集の本歌に異なれり、萬葉集略解十の下三十
 一葉の裏に「道邊之乎花我下之思草今更爾何物可將念」
 之を訓にすれば「みちのべのをはながもとのおもひぐ
 さいまさらく」にかおもはん」おもひぐさいはくさ

花いかだ 水邊
 花の瀧 非水邊
 花の波 同上
 花の雨 非降物
 花皿
 花吹雪 同上
 花の雲 非聳物
 花鎮 神祇
 花がたみ 釋教
 花の友 人倫
 花守 同上
 花の主 同上
 花を友 非人倫
 花を主 同上
 花の宿 居所

く説あれども定かざる證有る事なし、さる草有るか
 るべし、めざまし草、にこ草あど今玄られがたきも多き
 あり、更の字一字脱しからん、集中何物二字なにと訓る
 例有り、上みは思はんといはん爲なりと、季吟叟の註な
 り、或人の説是と前の鱸魚かじかと同く此本歌をもと、して
 芒ある地を求めしに「おもひ草はあらで龍膽の咲たる
 を見て、思草とおもひたるなるべし」通具郷も定家郷も
 和歌にこそ秀たりけれと本草學にはまだ淺かりしに
 やといへり
 本草藥名備考卷の九に前略以下藻汐草に出ると
 おもひ草 女郎花を云ふ おもひ草 露草をいふ
 おもひ草 茅を云ふ おもひ草 龍膽をいふ

花の隣 居所

花を宿 非居所

花を隣 非居所

花に櫻 七句去り

餘花 若葉の花

氷室の駐 花摘 釋教

時鳥に花を結ふ植物
に三句去り

花火夜分 花の踊同上

花相撲 花燈籠

歸花 植物 餅花 食類

花衣 花の袖 花の春

此藻汐草の説も又取るべき所なし

本草綱目卷の十二に、列當つちあけび此一種おもひ草
本草綱目集解に云ふ、原州、秦州、渭州、靈州、皆有之、暮春抽
苗四月中旬采、取長五六寸至一尺以内、莖圓白色、采取壓
扁、日乾、蘇頌曰、草莖蓉根與肉莖蓉根極相類、刮去花、壓
扁、以代肉者、功力殊劣、即列當也

草木性譜の列當の條の下におもひ草漢名未詳おもひ
草は必ず芒あき所には生せず、秋、山中及原野芒多き地に
芒の氣を受けて生ず、宿株より生するものは旁に小苗を
萌し、或は根に小芽を萌す有り、其根微黃色至て脆し、江
紫色の苞を發し、四五莖生す、高さ五六寸許、葉かく黃色
細紫縦文あり、其本は微紫色を帶ふ、莖頭傾きて一花を

花の年 花の顔

花の姿 花かつら

花の都 花ころろ

織物の花 繪の花

作り花 花結び

花塗 花靱

花形 花かいらぎ

花香 花子

燈花 花かつを

花毛氈 花莖

花嫁 花聾

花の詞 花やか

花紅葉 雪月花

○戀の詞

戀 逢戀

開く、淺紫色五辨の末深紫色、外皮黄色細紫縦文、莖と
同し中に黄色の玉莖あり一花の狀、粗紅毛煙管の頭に
似たり、故にさせるさうの名あり、又白花の物あり、形狀
相似たり、ゆうれい草といふ、山陰滋地に多く生す、思草
よりや、細少なり

第七十六 三月盡九月盡の發句附方の事

三月盡の發句には脇春一句にて第三は雜を附てくる
しからず、九月盡の發句には第三冬季へ移るをよしと
す、其時は四句目に冬を連るなり、秋の發句なれ共第三
までの内に月をするにおよばず、七句目の月を夏にて
すべしと、是は元祿新式とて祖翁より去來へ遣はされ
たる傳書にのせたり

待戀	忍戀
別戀	恨戀
待れる戀	絶る戀
絶て久しき戀	思戀
思はれる戀	契戀
あかれる戀	憂き戀
戀衣	戀の奴
戀草	戀の使
戀は癖者	戀慕ふ
泪	情
夢	妬む
鼻白める	恥ふ
朧る	顔赤む
むつごと	嫩り
難面人	戀病
病患ひ	人目の關

第七十七 終日終夜之事

終日は、ひねもすといひ、終夜は、よすがら又よもすがらといふ、然るを近頃の俳人には、ひもすからとつかひ集かどに出せり、物たる人は大に笑らへり恥すべき限りなり、又終夜をよすがらともよもすがらともよむころは、夜すがらといへば只夜一ぱいにて終夜に叶ふなり、夜もすがらは夜も終にといふ意にて日も夜もといふころもれり、明月や池をまはるも夜もすがら、はせを、此句は祖翁廣澤の池にて吐き出せりと、此池晝も來たりて見、又夜も來て見て幾めぐり見るも見あかぬあり、されはよもすからに叶へり、又土佐日記の内に云ふ、「二日雨風やまを日ひと日夜もすがら神佛をいのる」

蜘蛛の行ひ	艶文
あふせ	あはせぬ
文	玉章
二道かくる	垣間見
濡衣	かさなる沓
つまづく駒	戀の占
後朝	きぬ
さらは垣	錦木
空たのめ	仇
伊達	春心
惚る	誓
戀の願	ねぎごと
鍋祭り	筑摩鍋
筑摩祭	鍋かむる
鍋を重ねる	水祝ひ
かゆ杖	常陸帶

云云と有り、夜すがら、夜もすがらのさかひ能く考ふべし

第七十八 嫁が君歳旦の詞となる事

嫁か君は鼠のことにて勿論雜なり、風俗文選の三序の部に、鼠ひとつの名は嫁が君、又よめともよめり云云、よめは夜目なり鼠は晝いねて夜る起るゆへあり、是を歳旦と心得たるは其角の句に「あくる夜のほのかに嬉し嫁が君」是は別に歳旦の詞なけれども、一句歳旦の調べあり文政天保頃江戸の俳人嫁か君を歳旦の詞とし集にもものせ季寄にも入れたり、京の蒼虬是を非なりとし歳旦の詞結ばねは雜なりといふ然れども是より歳旦の部に入りたり

第七十九 月の鼠日の鼠之事

月の鼠日の鼠といふは日月の立暮れる晝夜のとあり
樓炭經と云ふ佛書曰く『山上に虎有り池中に蛇有り、蔓
蔦をたよりて宇宙に迷ふ、蔦の根を白黒の鼠來りて噛
む、白黒の鼠は則ち日の鼠月の鼠にて日月の立行晝夜
惡虎は顯世の惡業罪、毒蛇は彼の世の地獄あり』よく圖
畫を以て示す有り

第八十 桂の花之事

桂の花は南方草木狀に、江南の桂、八九月花をひらく實
なし、本草綱目に、茵桂、巖桂、木犀もぎせの事なり、金木犀、銀木犀
とて二種あり、香氣高く人を酔はしむるに至る、今いふ
桂の木は月桂とて加茂祭りの冠に挿なり、是は別種の

移り香 袖の移香
袖すり 袖ひく
綻ふ袖 妹脊
妹脊祈る神
神を祈る 百度參り
禮參り ちぎり
むすふの神 寐亂髪
夕化粧 なまめく
門立 長まくら
浮名 前わたり
さゝめ言 肌ふるゝ
立聞 さゝやく
たはれ男 ふり袖姿
添寐 あだ枕
妹がり行ば
おもかげ 縁

笑窪 戯れ
出合宿 しりめ
辻占 あかで年ふる
あかぬ 近まさり
新枕 初瀬祈る
坊ま落 媒やう治郎
悵氣 渡り小姓
寺小姓 手かけ
丸びたひ 若後家
妾 夫婦
めどる 夫ぬし
女夫 夫
つま 夫
女房 嫁なや閨房
翠帳紅閨 洞房

ものなり、月の桂の實、蘇詩注に杭州の天竺寺八月十五
日の夜常に桂子ありて落つ、本草量經に江東衢路ちよだに桂
の實を拾ふ、破れは辛香なり、とあり猶詩もあるよし秋
季とするあり、按るに是肉桂の實あるべし

第八十一 隱顯の月并に花無き花の正座の事

隱顯の月とて支考が古今抄に出せる發句『秋立や朔日
沙の星しらみ』脇『はらく、松の岡に稻の香』とあり發
句に朔日の星しらみとあるにより月つけがたく、斯せ
し脇に第三は猶更月つけがたし、かかれども、三ッ物か
れば月あくては成がたし、此所に於て『姨捨の歌には誰
れも袖ぬれて』と仕たるよし、是を隱顯の月の極きまめといふ、
扱大鶴庵竹有、九州行脚の時或る俳諧に『白露に木槿の

肉陣	閨中
後宮	肉屏
美人の畫	美人の名
美人の噂	守宮識
返魂香	うつり香焼
黛	眉掃
紅付る	鉄漿染る
的紅さす	男色
雜姦	稚衆
野郎	美少年
かげ子	花街
廓	遊里
遊女町の名	色里
揚屋	茶屋
青樓	妓門
妓家	流れの身

花の咲揃ひ『なにともあしによき天氣あり』と如斯揚
 花の前を附けて是にても花の附やうやあるといひた
 るに『みよし野のよし野の春に見るものは』と附たれば
 一座興に入りたりと、是を俳諧といふ迄にはあらね共
 隠顯の月の格を取りたる、一座即妙行脚中にはかゝる
 働きもあるべきことなり、是を花無き花の正座といふ
 第八十二 俳諧に火事を忌む事
 俳諧には火事を忌むあり故に祖翁一代あまたの俳諧
 中火事の用具を附たるは『夕月に植木つり出す堀の破
 れ』此附に『見よ水籠をかけられし軒』と此句一句なりと
 いふ、七部集中北枝庚午の年家を焼くとありて『焼けに
 けりされども花は散りすまし』此外集中に見ゆる火事

○以下第八十三、芭蕉翁口授より、第八十四、諸秘事之事
 等は尤も斯道に於ては秘中の秘事と爲すことの一よし
 依て茲に封紙をなして他見を許さず
 この封紙はこの本御購求の上ならずば取除く事か
 ことわり申候

版元謹白

宮 肉屏
 人の書 美人の名
 人の噂 守宮識
 魂香 うつり香焼
 付る 5 眉掃
 紅さす 5 明色
 森 稚衆
 郎丸 7 藤少将桂離
 げ子 花街
 罪女 漢 葦中火事の御跡を中附の跡事多目録に植木多の出す事
 女町の名 色里
 屋 茶屋
 妓家 流れの身

花の前を附けて是にても花の附やうやあるとい
 るに「みよし野のよし 刈衣薙白」と附た
 一座奥に入りたりと、是を俳諧といふ迄にはあ
 申 願の月の格を取りたる、一座即妙行脚中にはか
 動さもあるべきことなり、是を花無さの正座と
 第八十二 俳諧に火事を忌む事
 俳諧には「火事を忌む事」に祖翁一代あまたの
 けりされども花は散りすまし此外集中に見ゆる火事

浅妻船	娼門
浮川竹	浮身
傾城	くいつ
白拍子	浮れ女
妓女	娼女
おやま	女郎
よね	遊女
たはれ女	出女
夜發	辻君
針仕兼	雛妓女
新造	ふり袖
前帶	後帶
了鬢	禿
小三板	女樂
舞姫	歌舞妓
女藝者	藝妓

は俳諧の禁物なりと蒼虬なども云ひたりと又寂葉に
 禁句の事として『炭の香の人あき壁にうつりけり』此句
 意到不到句、人なき家の燈火なく炭の火影壁にあかく
 うつりたるものあるべけれども、さは聞ゆる炭の火の壁
 にうつるとのみきこゆる是禁句なり『炭の火影人あき
 壁にうつりけり』とかくあらば禁句の難をのがれん、す
 べて公務にかゝはる事皆禁句なり、其余はおしてゑる
 べしとあり

第八十三 芭蕉翁口授之事

霞は朝うすく夕に深し 霧は朝深く夕にうすし
 雲は朝立て夕に歸る 春風は朝に寒し
 秋風は夕に寒し 夏は野山深し

舞妓 <small>まひこ</small>	鴛老 <small>うりて</small>	男藝者 <small>おとぎしや</small>	私窩子 <small>かしくほ</small>	伽野郎 <small>かんのら</small>	亡八 <small>うちはち</small>	神媒 <small>かみま</small>	密夫 <small>かしくしや</small>	間男 <small>まんの</small>	なひく	さくらふ
遣手 <small>まはし</small>	幫間 <small>かま</small>	私窩子 <small>かしくほ</small>	まはし男	伽野郎 <small>かんのら</small>	亡八 <small>うちはち</small>	神媒 <small>かみま</small>	密夫 <small>かしくしや</small>	間男 <small>まんの</small>	なひく	さくらふ
牽頭 <small>けんとう</small>	白眉神 <small>かみまゆかみ</small>	飛子 <small>とびこ</small>	色子 <small>いろこ</small>	舟 <small>ふね</small>	曉傘 <small>あけかさ</small>	妹許 <small>いもかり</small>	間夫 <small>まんの</small>	くどく	ふる	○非戀詞
奥様 <small>おくさま</small>	桂女 <small>かきめ</small>	淚 <small>なみだ</small>	枕 <small>まくら</small>	市女 <small>いちめ</small>	ゆかり					

冬は野山淺し
 五月雨は降つゝきてきたあし
 秋の雨はあはれなるもの
 水けふりは冬のもの
 海の音は晝さわかしく夜靜也
 草なひきて風を知る
 草の花は夕に咲く
 翡翠は夏なるべし
 下絃は廿二三夜頃の月
 法樂は寺社に納めす此方にて手向るを云ふ
 奉納は則寺社に納ること也
 右廿五ヶ條は一葉集に載たる處にて又三四考といふ

春雨はさうくしくねぶし
 夕立はさめたるもの
 霧は夏のもの
 川音は晝靜に夜さわかし
 草うつふきて雨を知り
 木の花は朝に咲き
 淡雪は春なるべし
 上絃は七八日頃の月

鐘	後家
賤の女	中女
乙女	下女
帶	櫛
尼	神子
●月の心得	
○春の部	
朧月	月霞む
春の三日月	
春の有明	月に花
月に春	
○夏の部	
月涼し	明安月
夏の霜夜	
夏の景物結びたる句	
○秋之部	

書には
 金屏は寒し
 銀屏は涼し
 蘆は寄麗ある所にも見ゆ
 埃りはきたかき所にたつ
 花の雲ははれやかに
 花曇りはうつとし
 花の吹雪は目ざましく
 花の雪は眠りを催す
 卵の花くたしは降物
 卵の花の雪は降らす
 萩は暗に音あり
 萩は月にしづまる
 清水は影を移し嗽をとすとも足洗ふべからず
 町の雪見は朝にして
 山の雪見は暮を望む
 しら梅は早く寒し
 紅梅は遅く暖かなり
 桃は賤しく賑はし又仙家めき在所めく
 李は艶やかにさひしく雨にちやめるもの

けふの月 今朝の月
 夕月 暮の月
 此分夜分にあらす
 三日月出る
 有明入る
 夜分に非す出る入
 る無ければ夜分な
 り
 月の氷
 水邊にあらす
 月の雪 月の霜
 降物にあらす
 月の桂
 植物にあらす
 月に姨捨更科付くべ
 からす

春來るは音なく
 秋來るは音あり
 花匂ふは淋しく静なり
 花薫るはきやしやにしてさゝめく
 春は物事静也賑ふ也
 秋は物事淋しく騒がし
 茶摘は風流に
 桑摘はわびし
 若菜摘は氣高く
 草摘は田舎めきたり
 田植は賑はし
 田草取は寂びし
 川狩は男かち
 茸狩は女かちなり
 夜寝ぬ鳥は 鴈、時鳥、鶺鴒、駒鳥、鴛鴦、梟、水鷄、矮鷄
 曉より啼は 鷄、鶯、鶉、雲雀、行々子、雀、鴉
 來る鴈は夕
 行く鴈は朝あり
 梅は花の兄にして
 菊は花の弟なり

姨捨更科に月付けて
 よし
 月に夜の字打を隔つ
 べし
 月前に戀起すべから
 ず
 ○冬の部
 月氷る 水邊ちり
 さゆる月 寒月
 冬の月 月さむし
 冬の景物結たる句
 ○雜の部
 眞如の月 心の月
 胸の月
 此類月の座に用ゆ
 夜分にあらす

霞の登るは夕にて
 霞散るは朝あり
 牡丹は花の富貴ある物
 菊は隱逸なるもの
 酒は賑はしきもの
 茶は静なるもの
 餅はこゝろよきもの
 飴は童らしきもの
 櫻はたつねて
 柳はたつねず
 花はをしみて
 紅葉はをしませ
 祭りとはかりは加茂
 御祭は伊勢なり
 神樂とばかりは禁裡にて余は皆里神樂なり
 鶯は枝に啼き
 時鳥はそらに啼く
 牡丹杜若歌には春讀み
 連歌には夏なり
 若葉は夏なり
 青葉は雜にも季にもなる
 草の若葉は春勿論あり
 草の青葉は雜なり

月にあらざる分
月草 月讀の宮
月卿雲客 星月夜
月次の月 月毛の駒
月輪寺

此分月の字有れども表の月には用ひず

○去嫌のあらまし
植物

三句去木草と品替りて二句去
生類
三句去魚鳥虫と品替りて二句去
神祇 三句去り

西瓜は秋にして

瓜は夏のもの

鷓鴣は秋の鳥あれども冬季としてをかし

鐘のねとはせぬといへども鐘のおどは歌にも詠むなり

礎うつとはいはぬといへども作りやうにて打どもいふなり

袷、蒲團、夜着、扇を發句の時は季に成る附合の時には難にもある前句作りやう次第あり

出代、彼岸、藪入、二季にわたる春秋の季なくとも前句のうつりにて其季を定む

村雨は難あれども四月七月の心持有るべし
沙干とあれは春なり
沙の干るは季にならず

釋教 三句去り

神祇釋教と替りて二句去り

戀 三句去り

無常 三句去り

戀無常と替りて二句去り

述懷 三句去り

人倫 二句去り

衣類 三句去り

食類 三句去り

衣食と品替りて二句去

降物 三句去り

雪と雪は折去、雨と雨は折去、露と

冬の月は更ておそろし

夏の月は更て面白玄

春の月は薄きを愛し

秋の月は隈なきを愛る

梅は瘦たるか風流に

櫻はふとぎにしかど

鶴は晝めてたく夜悲し

雉子は晝騒かしく夜哀れ也

蛙は晝をかしく夜淋し

薺ははかなく美し

木槿は隈あり

陽炎は消て明るく

稻妻は消て闇しされど月夜にもなきにあらず

白魚は美しく弱々し

櫻鯛は美しく賑し

とろ、汁はをかし

鰻汁は賤し

花園は廣うして春のかたち

花壇は狭く秋のかたち

初紅葉は山ふかき所より染

初花は人里が先也

紙衣は老の姿又稚き人あとに

衾は賤しく旅あとに

露は三句去り
 簞物 三句去り
 降物簞物と替りて
 二句去
 天象 三句去り
 月と月は表を去り
 日と日は五句去り
 星は三句去り
 風休 二句去り
 名所 二句去り
 地名 二句去り
 旅休 三句去り
 同字 三句去り
 心替りて二句去り
 春夏秋冬の文字五句
 去り春と春、秋と秋

淡雪は地に詠す
 吹雪は空をわかたず
 氷は雪よりも早く
 霜の氷よりも早し
 夏の蛙は高き所に啼き
 秋暮の蛙は地の下に啼く
 青簾は氣高く尊く
 菘簾は涼し
 紫陽花はかはる
 鷄頭は枯ても色變らず
 鮎は親子連れぬ
 鮎は親子連る
 百舌鳥は二羽と連れず
 いろくの鳥あり
 草薺は草の薺黄にして
 芦の角は芦の芽なり
 蝸牛は家を荷ひ
 蓑虫は枝に下がり父戀しと啼
 山路といへは道あるに極る
 前の廿五ヶ條に重なりたる、またはくたくしきもの
 はふきたり、猶合考として數ヶ條しるしたれども祖

折去

數字は同數三句去り
 他は二句去同數にて
 もとなへ替れは二句
 去り也
 人名 三句去り
 和漢の名替れは二
 句去
 書名 三句去り
 官名 三句去り
 職名 三句去り
 官職替れは二句去
 り
 余は推して知るべし
 此外披搆に差障るて
 にをば留等は折合を

翁口授に非ざればしるさざ

第八十四 諸秘訣之事

山といへは叡山
 寺とは三井寺
 何某寺とは鞍馬寺
 三の山陰は、須磨、宇治、小野也
 祭とは加茂
 花はさくら
 鳥とは鳳凰
 狩場の鳥とは雉子
 夜鳥は時鳥
 山鳥は尾赤がきもの
 門叩く鳥は水鶏
 曉の鳥は鷄なり
 花鳥といへは櫻に鶯
 もの云ふ鳥は鸚鵡
 鶴の巢雜なり
 諸鳥の巢は春
 水鳥の巢は冬
 鷹の巢雜とも春とも
 山姫は山姥にて神の名
 百敷、九重は内裏の事

嫌ひ又は三句去るこ
とあり

補言

四方拜の一月一日な
れは季は冬と成るも
付け方は歳旦の詞を
用ゆべし、彼岸の中
日春季皇靈祭は陰曆
にて二月おれとも陽
曆にて三月となる故
是は三春に渡る題に
て付べし、秋も又お
なし、神嘗祭は初冬
の景物、初霜、時雨、殘
菊、散紅葉、干土穗な
と又は暮秋のものに

雲の上人百官なり

黄泉は後の世

爪木は薪の事妻木とも書く
其曉は彌勒の出世の時

贄とは内裏又は神社へ生なから物を奉るをいふ春日
の若宮へ狐狸を奉り諏訪の明神へ鹿を備る類ひあり
諏訪の祭は雜なり一とせに七十五度有ゆへなり
御射山祭は七月なり

いせの神とは名所なり天照す神とは名所にあらず、尤
句作よく分つべし應安新式に、名神名所にあらずとは、
いづくにも勸請申所に現し賜へはなり、國々に社あり
只神の御名あり

かつらぎの神、明るわびしきかつらぎの神と云ふ、一言
主の神ともいふ或説に此神面体わろき神故姫宮方へ

て付べし、季は秋な
れとも第三の内に月
するに及はず、此場
合には月の座夏にて
すべし、都て陰陽の曆
違にて時季の合さる
ものは見合あるべし

○俳諧耳袋
天文部

○三辰は日月星なり
又三光ともいふ

○大虚は太極則無極
也

○日は太陽とも日輪
ともいふ、初日は一
月一日に限り永き日

夜ばかりかよひ賜へるとなり

山鳥のをろの鏡の事、むかし唐土より山鳥をわたしけ
るが、かつて啼かざりければ一人の官女雌鳥を見ぬ故
なりといひしより、籠に鏡をかけられければ、己が姿の
うつりたるをめでりかと思ひ啼たるとあり、又云ふ是
の誠の鏡にあらず、此鳥夜は鸚雄一所にいねまして山
の尾をへだて、いぬる也、夜の明ばのに雄鳥がはつ尾
を丸くわけて、鷓鳥の方を見て啼をいふとあり、尾を丸
くわげたるが鏡の形に似たるによりをろのかいみど
いへるとも、雉子山鳥は孔雀の如くさかるとき尾を丸
く立て鷓を追ふものなり

野守の鏡は野にある水をいふ 雄略天皇の御狩の時

遅き日は春の如月、彌生頃、あるなしの日とは陰曆五月廿五日なり、秋の日は世話しく、冬の日短かし、日の出はいさきよく、日の入は物淋し、日蝕とは日の病にて、太陰太陽を覆ふなり

○月は太陰、又月輪とて太陽の光りを受けて反謝するあり、春は臙々として夏涼しく、秋明光にして冬氷りて寒し上弦と

鷹翦れて見ぬさりしを、御狩野の野守水に影のうつりたるより失たる鷹を見いたしたり、夫より名つくるよし、又野守の池は南都春日野にあり『跡やその野守が池もつゝみ草』(玉仙)
漁り火魚をとらんため火を焚くなり
夜更るとは初夜より五更までの事、後夜より明るまでは夜ふかきといふなり

初汐とは八月十五日に限る、月を新月といふ此日に名付初る故なり、汐も月にしたがふ故也、是は陰曆の八月十五日なり
花前に戀せず
揚句は戀にてもする

唯の發句に旅の脇せぬあり第三苦しからず、但其角が五元集には第三の旅体大かたふるしすべからず、云々

とあり

は霽月を云ひ下弦とは有明月の名なり月蝕月の患ひは我地球太陽の光を隔るものなり

○星は歳とも晨ともいひ種類多し星合は陰曆七月七日、星月夜は星の照る夜なり、星降夜とは皐月水無月に多し、星の子は石を産むといひ、夜這星とは水氣の走るもの、慧星は日光の謝通す影なり、廿八宿とは、角亢房心

三物の俳諧とは發句より第三までにて神祇以下の名目をもゆるす事あり、さるは一卷の曲節を爰にちいむるものあればなり大方は歳旦に用ゆること、す千句の法式は表十句たるべし本式の表といふは千句の法より出たる名なり但し表と裏と二十四句余は表裏合せて二十八句をひと番ひといふなり花三十六、月七十二、此數傳有り世に言ふ四花八月とは此法なり、右は廿五ヶ條の附録として芭蕉翁より許六へ傳へられたるものなり

月花の座は百韻四折に四季の花をくばり、八面に其月をなぞらへ四花八月なりしを、宗祇の頃より名殘の裏

尾箕、斗牛女虛危室
壁、奎婁胃昂畢觜參、
井鬼柳星張翼軫なり
○四徳とは天道流行
の序也則(元)春にし
て仁(亨)夏にして禮
(利)秋にして義(貞)
冬にして智なり
○三才とは天地人也
○四方とは東西南北
○四維とは良巽乾坤
○五行とは木は春、
火は夏、土は四季、金
秋、水冬なり
○十幹の異名、闕逢
(甲)旃蒙(乙)柔兆(丙)

はみじかければ月をはぶき花ばかりとし是より四花
七月の定式となれり
都表にもすべし、名所にあらず湖同断あり
狩りにいろく、あり狩りとばかりは雑なり、生類に嫌
はず狩とて其國の治否を知らむ爲勅使を立らるゝ、是
を狩の使といへばあり
鐘は釋教にあらず、其故は時の鐘あればなり、泊瀬の鐘
釋教にあらず但句作り次第あり
世の字の事 浮世は述懐の氣味あり、世の中は平生に
て表にも苦しからず然れども浮世も述懐にならざる
あり『木がくれて浮世を覗くかはづかき』斯く句作りす
れば浮き世の意に通はねば述懐にならぬなり

強圉(丁)著雍(戊)屠維
(己)上 章(庚)重光
(辛)玄扈(壬)昭陽(癸)
○十二支の異名、困
敦(子)赤奮若(丑)攝
提格(寅)單閼(卯)執
除(辰)大荒落(巳)敦
牂(午)協洽(未)涿灘
(申)作噩(酉)閭茂(戌)
大淵獻(亥)
○五更とは、一更甲
夜戌の時、二更乙夜
亥の時、三更丙夜子
の時、四更丁夜丑の
時、五更戊夜寅の時、
○八專とは壬子に始

月次の月の發句には月の座有明とするあり
木曾路、鈴鹿路、山類にあらず遠く越る名なり、小野の奥、
吉野の奥、同断なり
櫻鯛は赤き小鯛なり、大鯛のことにいふ事をかれ、櫻は
時をあはするまでの名あり、爲家卿か歌に『ゆく春のさ
かひの浦のさくら鯛あかぬかたみにけふや引らん』櫻
鯛、櫻鯛、時を合せし名あり、櫻貝はすだれ貝の事にて其
色をいふあり
さくら麻は櫻の咲ころ蒔く故の名なり、すべて物種を
おろすに時節をたがへまじき農人ことばかり
簞といふは夏の物あり、是は唐土にて一疊の床を作り
四季とも此上にくらす也、其床の上に水波萍などいふ

り癸亥に終る凡十二日但丑辰午戌は專日にあらず之を間日として除きて八專と名づくるあり

○三伏とは初伏夏至の後第三の庚、中伏同第四の庚、末伏立秋の後初庚、是を合して三伏といふ

地理部

二都とは南都則大和國平城、北都山城國平安城

○三關とは近江の國相坂關、伊勢の國鈴鹿

關、美濃國不破關あり

○三津とは坊の津、

薩摩、博多津、筑前、阿

濃津、伊勢あり

○日本三景は、松島(

陸奥)、天橋立(丹後)、

嚴島(安藝)

○近江八景は、比良

暮雪、矢橋歸帆、石山

秋月、勢多夕照、三井

晚鐘、堅田落鴈、粟津

晴嵐、幸崎夜雨にし

て近衛政家卿の撰む

所なり

○日本の高山、駿河

富士、大和金峯山、加

涼しき物を綾に織り出したる菴を敷く是を簞といふ夏の敷物に限るあり日本にはなし」窓形りにひる寐の床やたかむしろ」是は屏風の簞を見て言出したる句なるよし、さればみだりにすべからず、世のうるたへ者晝寐を夏季と覺たるにや、折々其句あり、午睡は雜あり夏季結べばよし

御萩六月晦日に水邊にて萩ひすることなり、然れども晦日には限らず、鴨川の御萩の歌に月を讀みこみたるも有り、俳諧には猶以て廣く心得てよし

名越の萩、輪越の萩、共に茅といふ草にて輪を作り是を茅の輪といひ、潜り越ゆる事なり、女を名代として越を名越といひ、我と越を輪越といふあり

稻むしろ、稻のよく出來たる、菴の如く見ゆるをいふ、連歌には雜とすれども俳諧には秋季なり

網代とは氷魚といふ物を取る爲のあみあり、九月九日より十二月まで日夜ともに取るなり、是を天子へ奉るあり、近江の國田上の里にて取る、其取り洩らしたるを、

宇治にて取也、柴漬は魚を取らん爲、湖又川おとへ柴筐の類を漬け置けば其下へ魚のかみ集るを取る、是をふしづけといふあり、冬季なり、東近江にては笹漬ともいふなり

年内立春和歌には春季とすれども連歌俳諧には冬季あり、技折、^ねをりと讀む、みよし野や去年の^ねをりの道かへてまだ見ぬかたの花を尋ねん」西行音讀なれども俳

賀白山、大和葛城、伯耆大山、下野日光、信濃淺間、越中立山、越後妙香山、甲斐白峯、讚岐雲邊、近江膽吹、筑前背振、豊前彦山、出羽湯殿、信濃駒ヶ嶽、信濃御嶽、日向霧島山

○日本大河ハ、淀河、近江、丹波、伊賀、山城、河内、攝津の六ヶ國の水歸會し日本第一の大河なり、紀伊川は吉野川の下流なり、尾越川は本曾川

諧にはしをりと用の、木の枝を折かけて道のしるしとすることにて、深山路をへ分け入ることなり、俗に栗の字を書く姥捨山に古事あり
駒かへる草は若草のことなり
春告草匂ひ草ともに梅の花のことなり
軒の妻梨とは軒端に咲く梨の花あり
芋生の浦梨は伊勢の國芋生の浦の梨にて、年々片枝づゝ一年替りに實を結ふなり、古歌によめり、國分全圖に麻生浦として志摩の國ありもと伊勢の國ありしを分て志摩とする故なり「秋の寐覺」に芋生の浦とあり梨の名所なり
添水は鳥おとしなり、僧都にかよふ備中の國湯川寺の

の下流、洲股川は美濃長柄川の下流、天龍川信濃の諏訪湖より發し甲斐遠江を通して海に入、大井川富士川は駿河、狩野は伊豆、刀禰川は上野にて源は日光の奥より發し坂東太郎の名あり、筑後川は九州第一といふ
○山城の五大橋とは三條大橋、五條橋、淀の大橋、伏見の豊後橋、宇治の大橋
○東路の大橋とは江

玄賓僧都田に入て鳥雀を驚かし追ふを務とす、續今古「山田守る僧都の身こそかかしけれ秋はてぬればとふ人もなし」玄賓と此歌よりのち添水と僧都と打混じわやまれる人あり、添水は水邊によりてつくる所の鳥驚しあり、石川丈山が覆醬集に「竹笛尺あまり上短く下脩し、桔槔の如く流水に矯さするに其長さ方石を叩き、旋轉俯仰音我巨々と發す我巨々とは竹筒の鳴る音あり」と蓮心院の説ありといふ
つまづく駒とは人に戀らるゝ人の乗りたる駒は跪くといへり俊頼集に「くちぬらん袖ぞゆかしき我駒のつまつきたひに身をしくだけば」
前わたりは、おもふ人の住めるあたりを事によそへて

州瀬田の大橋、三州
矢矧橋、三州吉田橋
武州六郷橋

○大坂三橋とは天満
橋、天神橋、難波橋

○湖は近江の琵琶湖、
同國餘湖、若狭三方
の湖、信濃諏訪湖、伊
豆箱根の湖、下野日
光の湖、越中布施の
湖、佐渡越の湖、出雲
松江の湖、陸前會津
盤梯の湖

人紀部
○五常とは、仁は木
の徳、義は金の徳、禮

わたりありくをいふ、戀のこゝろあり
つけさし、とはおもふ人の、みかけたる酒などを取り
て呑むをいふ、廓のたはぶれなり
くつわ、とは亡八とかく、仁義禮智忠信孝悌の八を亡ふ
故也

歌を學ぶを敷嶋の道といひ、連歌を築波の道といふ、俳
諧は月花の道といひ、假名文字習ふを難波津の道といふ
一日を雞日、二日を猪日、三日を羊日、四日を狗日、五日を
牛日、六日を馬日、七日を人日、八日を穀日といふ、是は陰
曆正月のことにて、東方朔が占書より始まれり

七種、いろく説あれども、せりなづなはこべ、たびらこ、
は、こぐさ、すいあ、すいしろ、これぞ七草、この歌をとる

は火の徳、智は水の
徳、信は土の徳

○五倫とは、父子、君
臣、夫婦、長幼、朋友
○三徳を備ふとは智
仁勇の三つあり
○四民とは士農工商
あり

○十義とは、父慈、子
孝、兄良、弟弟、夫義、
婦聽、長惠、幼順、君
仁、臣忠

○三族とは父母、兄
弟、子孫、一説に父族
母族、妻族なりとい
ふ

をよしとす、五形は母子草、佛の座はたびらこあり、此七
種を北野、平野、内野、紫野、蓮臺野、嵯峨野、大原野の七野よ
りひと種つゝ取りて、禁裡へ奉りしとなり、加茂百首の
内慈鎮和尚の歌に「けふぞかしなづきはこべら、芹摘み
て早あゝくさのおもの参らむ」

しぐれハ雨、あられは雪、みぞれは雨と雪、ふきは雪と
風、しまきは時雨と風、雪しまきは雪と時雨と風とあり
みな冬季にして、しぶきは雨にも雪にも瀧にも添ふ風
の名にして、雑あれば其季の物に添ふて季を定め瀧に
添れは雑あり

貌鳥又かほよ鳥、春日山によめりいづれも雉子のこと
也と心得てよし、或はかたこひするものといへり、よる

○五儀は、聖人、賢人君子、士人、庸人
 ○人生年名曲禮に人生十年を幼學と云ひ、二十年を弱冠と云ひ、三十年を壯と云ひ、四十年を強と云ひ、五十年を艾と云ひ、六十年を耆と云ひ、七十年を老と云ふ、而傳八十、九十を耄と云ひ、七年未滿を悼と云ふ、悼と耄は罪有ると雖も刑を加へず百年を期といふ
 ○日本軍神とは、武

ひるたねを戀すといへり『まなくしば啼く春の野』と源氏物語にも有り、其鳥を定むる歟但し定家郷不知之といふ推之に只うつくしき鳥にして未決之とあり
 母子草又鼠麴草といふ五形のことあり、古代餅に搗入る親子むつまじきためしあり母子餅、草餅、よもぎを搗いる、は近來の事也
 をどり花は踊り子の笠着たるやうに咲く四月の季なり
 鶯の卷經はわくら葉のこと、又むすび草とも初夏なり
 茶挽草はからす麥の事 笹の子はさゝの筍あり
 あゆの筆とは思ひ草 かたひら雪は小雪なり
 たびら雪はたびらこの花に似る、もち雪は大きくかた

糞カフツ、經津主フツメシ、をいふ
 ○和歌三神とは、住吉明神、玉津嶋明神、柿本靈神

○俳祖三翁とは、貞徳、季吟、桃青なり
 ○四姓とは源、平、藤原、橘、藤氏の四祖とは、武智鷹を南家と稱し、房前を北家と稱し宇合を式部卿式家と稱し左京大夫鷹を京家と稱す

○本朝能書三筆とは嵯峨天皇、橘逸勢、僧空海あり、三跡とは

まりたる

鶉の草莖は今宵心安く寐たる所をおのがすみかにせんと草莖を目印に背もてしるし置に其草のびて知れぬをいふ、甲斐あき事によそへて讀むなり
 鶉の早贄は、虫蛙ちとを取り、荊はら袖の角なごへ刺し置くなり、寒天雪中の喰物に貯ひ後ち其有所を忘る、をいふ
 忘れ草に忍ふ草、わすれ草は普通には軒にありと讀む住吉の岸に生ふ、はくわんざうなり、大和物語には忍ふ草忘れ草同物なりといへり、忍ふ草の軒などに生ひ細く長き葉の裏に星のやうなる物あるあり、一名いつまでぐさ、漢名瓦葦俗にのさしのぶといふ今いふ葱とは別あり、忘草を萱草ありとせば秋季は根をとるなるべ

道風、佐理、行成の三人也

○貞門の七俳仙といふは、立甫、維舟、貞室、西武、季吟、令徳、梅盛、なり

○芭蕉翁諸國有墳地近江國粟津義仲寺は埋葬の地なり、元祿七年甲戌十月十二日武藏國江戸深川長慶寺

伊賀國上野万福寺
京都東山雙林寺
大坂道頓堀千日寺
美濃國大垣正覺寺

し花咲くは夏なり
しのお摺は陸奥信夫郡より織り出す絹の名なりといふ、又葱の葉を絹に摺りたるものともいふ、蔓しのふのことなるべし俗に唐草模様といふは蔓葱のことなり、是をみだれ染ともいふ『みちのくのしのふもぢずり誰ゆへにみだれそめにし我ちらなくに』
字あまりの句に字あま一つくる事苦しからせ、打越を嫌ふなり
下萌古式に下萌とばかりはせぬものあり、野とも山とも園とも讀み入るべしとあり、新式には下萌とばかり出して植物に打越を嫌ふとあれば野山を入れずしても春あり

肥前國長崎南京寺
尾張名古屋大曾根了義院

奥州高館古城跡碑
奥州桑折短尺塚
尾州星崎千鳥塚
此外名所勝地に多し略す

予、一夜銀座の町をそゝろ歩行して一書を得たり、題して「蕉門草枕」と言ふ、著者は、涼帝法師とやらんにて、寛延二年己春月寫とあり、讀

露時雨は本草竹葎などに添へ讀むべしとあれども、いまは本草なくても俳諧にはするなり
白尾の鷹といふは政頼といふ人、鷹の尾さきを鶴の君しらすといふ白羽にて繼きたるなり、其心は鷹の心におのが尾の白さを残雪と見て深山へいぬる心なからしめん爲と也
長鳴鳥ながなきどりとは日本紀の那加那岐登利なかなかきどり、鶏のことにて積陽せきやう火徳かどくの精なり、故に大陽出て鳴く此鳥五徳を備へたり、頭に冠を戴くは文あり、足樽距ふきよなるは武なり、敵の前に在て敢て闘ふは勇なり、食を見て相呼は仁なり、夜を守て時を失はざるは信なり、故に司晨ししんの名あり鳥丸光廣卿の鶏の畫賛に「人の身にいとまさらめやうることの

み見るに、面白しと思ふ節なきにあらねば、幸ひ秘事大全の余白をかりて、載することゝはなりぬ、

其中堂のあるし。

ゑるす

○芭蕉、北枝か許

に宿る、并に秋

風の句談の事

はせをの翁、越路を経て秋のちかは金城に入り北枝かもとに旅寐してその夕、其原を過し時、我かくいふ句を得たりと

五つあるてふ鳥すらの世に』
白雨は夕立ちり、白雨と書く事は天満の森、由己法橋山谷が詩にあると申されしかば貞徳が執筆の時書初たるよし

時鳥の古歌に、二四八とあるははつこゑとよみ初音の事なりそのゆへは鶏を八こゑの鳥と云ふ如く必ず八こゑ鳴にはあらねとも、初鶏曉に八こゑ啼よしに讀ならはす、二四八は八こゑ啼あり八こゑ啼は初音といふ事あり『ちらさかをさきさきとよます郭公二四八とこそをちかへりなけ』又『をちかへり庵に啼けとも時鳥二四八ともにめつらしきかき』をちかへりとは万葉に百千返と書けり

『あか〜と日はつれなくも秋の山』北枝、此句を難しけるは、誠に旅のなかめに三里の道をかへ、秋野らはおしむへく日の又はやくかたふかんとするに、霜枯たる袖に夕附日遠山松もくれあいはるは、まはゆき峯の夕日といはん、されど山と云字すわり過て景色の廣からねはと云に、翁もうなつきて、されはこそ、

柏餅の始りは五月三日宮川にて鱒を取り柏の葉に包みて太神宮へ獻す、端午に柏餅を作り節物とするはこれによそへるなり『御柱を遊ぶや鱒の柏餅』丈岳今の世魚類を神に供へ或は人に送るに笹葉又は青杉の類を敷こと是をちらへるなるべし
丹波太郎、魔耶九郎、ともに雲の峰のことあり、攝津播磨邊にていふ『京女郎田舎女郎や雲の峯』紀之是は備前の沖に京女郎田舎女郎といふ二つの島あり十余丈の巖石、人の立たるが如し京女郎の方は十二ひとへを着たるが如く、田舎女郎は賤女の水仕のすがたなり、此句は雲の峰が京女郎田舎女郎の如く立たりとあり、丹波太郎は丹波のかたに立たる名、魔耶九郎は魔耶山より立

金城に北枝有り相聞へたる其人也、我秋の風と案したり、さりや此秋の風は身にしむ情をつくし、あか〜と日はつれなくも入果て、風ぼう〜と肌にあたる、爰に旅人の姿あからんや、もし初めより風といは、聞得る人あからんとしはらく、山ととはりし、これ北枝予をしらざる罪也、三神ゆるしおはしませと、

たる名あるべし
残る花は春中のこることにて、餘る花は夏までもあま
り若葉か中に交り咲くをいふ
花といふ題にはさくらの句いふも苦しからず、櫻とい
ふ題には花の句すべからず
附かたの八体とは、其塲、其人、時分、時節、時宜、天相、觀相、面
影也
一卷の揚句には必ず頌の心有るべしと、定家卿の曰く
頌は神明に告る心なり、頌はいはひなり、ほむるなり、稱
讚の義なり
第八十五 不易流行の句の心得
不易 何となく冬夜隣を問はれけり 其角

夫より斷金の交りに及ふ

○はせを行脚物かたり、并に藤の句

或人翁と物語せるは、貴坊は宗祇の跡を追、雲に別れ水に伴ひ、いつちを宿と定め給はず、行脚いつれの日かおかしかりし、翁は、るみ、旅せぬ人は誰もさこそ、行脚は苦樂を翼とす、けふは暮て笠軽く、けふはしくれ

流行 風なりに青い雨降るやなきかな、 其角
不易 杉の葉の雪臙なり夜るのつる 支考
流行 とし〜や御意得るたひに初時雨 全
不易 御簾より内は古風のあわせかな 乙由
流行 結構な日を啼くらすかはつかな 全
不易 くだけずに奥山椿なかれけり 柳居
流行 梅さくや片枝は伽羅に朽なから 全
不易 卯の花に尺八さゝて暮にけり 鳥醉
流行 大井川鮎も七瀬のな〜ころひ 全
これらの吟にて不易と流行とを考へ見るべし
流行 これは〜とはかり花の吉野山 貞室
全 朝夕の人もめつらし今朝のはる 宗因

て袖重き紙子の夜着
草の枕、引かわり移
り行もさとりてこそ
おかしけれ、奥の細
道降つゝきて、泥に
取つく杖をちからに
曾良はつかれて行べ
きもあらず、我は笠
嶋を見んと云、同行
もまた腹あしき事あ
り、况や煤拂に居所
を追はれ、或は鼎かなへを
かきあらしめてめしは
はや過たるなど情な
き日も有とよ、旅
は彌生の末つかた、

流行 月代やむかしにちかき須磨の浦 貞 徳
これらの吟は流行あれども、その内に不易を忘れざる
がゆへに俳諧の旨全く世に名吟とはいふなり
不易 元日や神代の事のおもはるゝ 守 武
全 雪月花いち度に見せる卯月かな 貞 徳
全 梅か香にのつと日の出る山路哉 芭 蕉
これらは萬代不易とて動なき名吟あり
第八十六 發句諸疵の事
古風 芋の葉の露も手向んあまの川
此類俳諧する人の毎年々々おもひ寄る所にてむかし
より云ひつくしたるなり、初心の句、かからず古くなる
ものなり其人はあらたにするとおもへども必ず年來

卯月の半こそ氣しき
立て覺ゆ、一とせ大
和路に分入て、おへ
るものに、道をはく
れ、永き日影をたど
り暮らし、何かしの
宿をからんとする
に、むら鳥森にいそ
き、野山はいたふ霞
たる、晝によくも似
たるかなと、行合せ、
たゝすむかなたの垣
に、藪翁のおほつか
なく咲懸りたるを見
て『くたひれて宿か
る頃やふしの花』か

の先吟有もの也
理屈 岩穴にたまごや置いて雉子の父子
上五文字むつかしく、下の父子、是又聲にいふは物にも
寄れど得ては理屈に成ものなり、いかに文才ある人と
いへども必ず理屈はのがれざるものなり考ふべし
聞ぬす 御佛事や矢挾間の前にをりあらひ
作者のみ知りて聞人に知られぬ句なり、矢挾間といふ
は城の要害に切たる堀の穴なり、是は實物ならで、報恩
講などの平皿に盛りたる、大根の丸き輪、豆腐の角なる
を、矢挾間に見立たるあり、一作の働きは面白けれども
聞ぬねば疵なり、初心にして心ばかり先行し修行たら
ぬもの、句を案じ出してたらぬ心地するより、再三案じ

くいふ句のうかひたる、我ながら二ツをく覺ゆ、これらのけしき旅中の榮花なりし

○芭蕉、古人の句

評、并に稻妻の

吟

秋のはしめ暑さいや増りて、降かぬる雲の晝はむらかり、夜は曇りて恐ろしけ成に、稻妻のくたけちる夕暮かた、浴してゆかたなから物折敷、椽の柱にもたれ

直して趣向を失ひながら、おのれには聞ゆるとおもひ、人に聞かすれば合点せぬを返つて其人を初心ゆへ得聞き取らぬと思ひ、獨り功者貌するは、不修行の限りといふべし

動く句 おもしろや筈より覗くはるの雨

是は一通りよけれども、下の五文字、秋の雨とも、けふの月とも、雪の朝ともうごくなり、春雨は春雨、けふの月はけふの月とさたまらねば疵あり

勿論 ひし餅のはれも雛の節句かな

菱餅のひさの節句にはれあるはしれた事にていふにおよばぬことあり、余りやすらかにせむとたくめば又かやうの句となるなり、是を勿論の疵といふ

寄りてむつましき爺と古きを語る、『いさ

つまやくたけてもとの入り所』よし人のしりたれば、其比の名句ともいわん、されど發句のけしきをしらす、我今此詠ありとて『いさつまや闇のかた行五位の聲』

○芭蕉、去來文通

の答

又ある物語に、老て春はまたるゝものから、師走のあはた

工過 行鷹やはさみ將基の駒あがり

これ又見立の句にて面白けれども、趣向をまかにして余りたくみ過たればかやうにあるなり、趣向に趣向をかさねるか故疵とある、美濃ふうの吟これにちかし

只言 座禪するや師走も隙を僧こゝろ

是は只つねのはさしを十七文字にあらべたるまでに、俳諧のこゝろを、俗談の中にも風雅のこもるか又ハ艶言葉にてもなからんには發句なりとせず、あまり心安く案じたるなり、是も又ある事にて疵となす

賤しき ふんどしの相模や金のちから癩

是は前句附けに似て句がら賤し、昔も万句の高点に『百文出して張る面もなしけさの春』いかに点取なればと

しきにのかるし身は、指折て明るをいそぐ春の面白きは、山里或はまた田舎にあり、一年のはかり事は鋤鋤にうつふきて暇なき身の年暮てより、前ふかく帯かたふしめて、雪駄をならすも断そかし『山里は萬歳おとし梅の花』去來へ此句送られし返事に、此句意二やうに解へく候、山里は風寒く、梅花の盛りに、萬歳

て淺間敷かぎりなり、俳諧にいたとへ年始ならずともかゝる姿情はたしあむべし
趣向不慥 手向なすや三伏の夏三廻忌
是は追善の三廻忌の三を三伏の三に比へたる迄にて外に何も取るべき趣向あし、かやうの類を趣向不慥といふなり、凡右の類は多くあるものなり
冠着す 郭公はなたち花のにはひかな
是は中七文字、下五文字つゝきて時鳥はなるゝなり、此類は多くあるものなり
帶せず 啼けとまつ牡丹も見たし郭公
是上み下の五文字通ひて中七文字はなるゝなり
沓はかす 香に匂ふ花橘やほとゝぎす

の來らん、どちらも遅しとやうけたまはらん、又山里の梅さへ過るに、萬歳どのの來ぬ事よと、京おつかしき詠にや侍らん、翁此返事に其事とはちくて、去年の水無月五條あたりを通り侍るふに、あやしの軒に看板をかけた「はくらのんの妙薬有」と記す、伴ふどちおかしかりて「くわくらの薬」なるへしと、笑しまゝ、某

是上五文字と中七文字つゝきて下五文字はなるゝ也
自他違 遠目にも船の寒よ朝あらし
是は朝嵐に船の寒さよといふは、船の中なる句なり上五文字はそれを外から見て居る体なり、一句の内に自他ありて連続せず、此体付句にも有りがちなり心得べし、譬は『障子に影の見ゆる菓子盆』といふ句に其座敷の内句を付れば則自他の違ひなり前句せうじの外から見て居る句なれば其心あるべし尤發句の疵、かくばかりにもかきさるまじく委敷は其句々に寄りてさまゝなれり書き盡しがたし

第八十七 本草の異名并引歌
加賀見草 正月一日餅の上置大根をいゝ咲くさの中

はて「はくらん病み」
か買はんと申さ、

○はせを近江行

脚、并に路通入

門

翁一とせ草津守山を
過て、松蔭に行休ら
うかたへを見れば、
色白き乞食草枕涼し
けに、菰はれやかに
けやりて、高麗の茶
碗のいみしうなれた
るに、爪の皮ひらい
入、破れ扇にて蠅追
なから一眠り樂しめ
る也、あやしうて立

にもはやきかゝみ草やかて御調おんしらにそなへ
つるかな』

初代草

正月二日内裏にうゆる也』大内や百敷山の
はつ代草幾とせ人のなれてうゆるん』

初見草

松なり』年ことにみどりのはなもはつ見草
かはらぬいろの名にはめつらし』

千代見草

おなじ』神山のふもとにうゆる千代見草う
ゑ置てこそためしともなれ』

翁々さ

おなじ』住吉やさしのあたりの翁々さ長居
してみる人を遠近』

根白草

芹のこと』瀬々にたつ波こそはなよ根しろ
草つむ我袖にゆきぞ降つ、』

とまり、さし覗は目

をひらき、又ふさき、

麝なを元の如し、何

者のはふれたる押て

名を聞まほしく、目

の覺るまで腰打かけ

『晝顔に晝寝せしも

の床の山』折からの

吟も此時あり、所は

琵琶の海ちかし、比

良の根おろし薫り來

れば、並木の古葉こ

ほれかゝりて、蟬の

聲あたりをさらす、

涼しと思ふ程に空た

けたり、おのこつと

色見草

櫻なり』尋ね行よし野のさとのいる見草は
なより上に花さきにけり』

仇名草

おなじ』あだな草いかなる人のうへおきて
かゝる浮世にちるを見すらん』

夢見草

おなじ』うへ置て見る人やある夢見草あす
をもしらぬけふの命に』

手向草

すみれなり』花さけば是を宮ぬに手むけ々
さひと夜のうちに二葉にぞなる』

二葉草

すみれなり』二葉々さ詠むる人もありつべ
し月の宮ぬのはなといひつ、』

一夜草

おなじ』一夜々さゆめさましつゝいにしへ
のはなと思へは今おもふらん』

起あかり、何夢や見
つらん膊を打て獨る
み居たる猶ゆかし、
松風聞畢て午睡濃な
りとは、さとれる人
の口すさみあるを、
今此人を見る事よと
心おきやられ、ちか
く寄つてしかく、お
あたましを問ふ、お
のこはいとおかしが
りて、君の寶を費す
ものは劍の下に眼を
ふさき、親の寶を費
すものは松原に袖を
乞と、我その袖を乞

たむけ草

松の萱山かげの里のあたりの手むけぐさ
花や咲まし名残とおもへは』

三葉草

檜木なり』大内や名を紫のみつ葉ぐさ家づ
くりゑの陰そ久しき』

河高草

柳のこと浪にふく風はよし野の河高草あ
らしの瀧の上に落らん』

二季草

藤なり』夏までの算や待らん二季ぐさまつ
の下枝にかゝる名なれば』

二季鳥

鴈のこと』いづかたをふるさととてかふた
き鳥年にひと度すぎかへるらん』

御酒古草

三月三日に酒へ入てのむもの』のむ人や千
代をへぬらんみさこ草かなふよはひの心

者なり、只今出口の

柳をく、つて襟りと
覺たる夢、鳥の糞に
てありし物を、昔を
手枕に樂む身は、八
捨の舌打より、瓜の
皮の蟻をはらつて朝
夕無味の禪にほこ
る、御坊もしらざる
所なりと、白き齒を
あらはして笑ふ、翁
荷へる晝筥をひらひ
て、此めしのいと白
き味とに勝たるも、
人の食を乞るは同じ
く、もとより我もの

枯生草

春草の惣名』春雨の谷にかれふの、さゝか
へ根をふましやは秋に成らん』

山根草

蕨のこと』山根草折て山路をかへるさや炎
さとおゝきかざしなるらん』

初見草

卯の花』はつ見草まだ咲かぬまにほととぎ
す立田の山の里に啼なり』

雪見草

おなじ』おとるらん我袖ぬれし雪見草名に
こそゆきにふりてふれた』

垣見草

おなじ』時鳥来てやなかまし垣見くさはな
咲にけり山ざとの庵』

形見草

撫子をいふ』我思ひうつりて花の咲ならば

にあらすとしらは此
松かねも相ほしく、
かつける薦もひとし
からん、只元を知と
知らざると、實に見
ると假にみると、是
を迷悟の二葉ともい
ふ、おのこもし我に
玄たかは、茶碗を旅
籠屋の膳にかへ、薦
をかり着の小袖にか
へ、廓の夢を風雅に
かへて老の杖を助け
よや、樂また其中に
あらん、おのこうち
ついで翁にむかい、

貌吉草

かた見草とは何をいほまし』又』かたみ草
花とやいはん石竹のなきよの人の跡をの
こせり』
杜若なり』夏草の色の中にもかほよ草をる
袖までもむらさきとなる』

雲見草

あふちせんだんの木』山遠き軒ばにかゝる
雲見草雨にはならでとくぞくれける』

庭古草

たち花』植し頃はむかしの宿の庭こ草咲る
花のみ今の思ひよ』

秋待草

夏田なり』水かけて秋待々さのよなくくに
ひかるは露かまたはほたるか』

水掛草

稲をいふ』とく植し我田の面に秋待てみづ

その晝筈をたまはら
むと、清水にひたし
て是を喰、首を扣い
て曰、誠に此飯五味
をあさむく、咽に
甘露を通すがこと
し、實に雪の日は寒
くこそと、むまきは
むまきに極りたれ
は、けふより御坊の
言葉にそむかし、こ
し折をこのみ、元は
一もしの數をも知、
御坊わらひ玉ふなど
て、矢立をもて扇に
玄るす、手つたぢか

池見草

かけ草ぞ蒔しほにゐる』
蓮のこと』影うつす花やくもらん池見草浪
にかゝりて青葉そひつ』

露堪草

おなじ』なびきつ、花や咲らん露た草をら
ぬ葉ごとに風の残れば』

水堪草

おなじ』花さけは浪もやみぬん水た草青葉
にうかぶ咲かぬさきには』

庭堪水

五月雨の頃庭に溜りたる水』五月雨や降る
らん庭のにはたつみ行方もなき老の夕
暮』

氷室草

芦のこと』難波にはあしといふなる氷室ぐ
さ世々のためしにかゝる葉もあし』

らす見えて『露と見
るうき世を旅のまゝ
ならぬいつこか草の
枕ならまし』翁歎し
て曰、我仵城に仕へ
し時、洛の季吟か歌
枕をたゝき、敷島の
道にいさきはれし、
今は俳諧のみしかき
に遊んで生涯の計と
とす、汝後へ來れど、
夫より師弟のあわれ
み深く、玄はらく蕉
門の人なりし
○芭蕉小町の附句
の事

吹喜草 あやめなり『大内や玉の軒ふくふき、草お
ほくは千代にひかれてや來む』
光ぐさ 百合あり『夏の野を心しづかに分行ばはな
におどろくひかり草かき』
火借草 螢のとひ光るをいふ『夜ることに川瀬の波
のひかりぐさ月のあるよはかよひ路もあ
し』
夜半立鳥 ほたるあり『よはた鳥立らん川の夕ぐれに
影のまぎるゝ月出にけり』
不可見草 ぼたんをいふ『名斗りを聞ても色の深見草
はな咲くならば何に見てまし』
名取草 おなじ『折人のこゝろあしとや名取草はあ

尙白に物語ありしは
『うき世の果はみな
小町也』といふ附句
久しきよりその趣向
ありて、むなしく思
ひ入前句なかりし、
いつそや正秀會の席
にて『坂ひとつ見上
て杖に物思ひ』と云
前句あり、是にこそ
と思ひ候へは、實ま
さしく小町の姿あれ
と句中の實をあらは
す事かたし、其後撰
集の思ひ立に、いろ
く品かわりたる

且見草 見るときはどがもすくなし』
『みちのくの忍ぶの里のあさか山あさかの
沼のかつみ草かき』
夜白草 大豆とも牡丹とも説あり『ひるのだに雪と
は見ぬす夜白草かりそめの間の花の夕は』
以前草 小豆なる歟『いさゝ草いかなる風に馴るら
ん花は咲ども雪と見ぬぬは』
涼暮草 松の聲なり『さゝ波は山の高みに聞ぬけり
すゝくれ草の風の夕暮』
手馴草 扇のこと『手馴れ草人の形見になるならば
涙のそはぬ時もあれかし』
風珍草 おなじ『朝またき夕の色の風珍ぐさ手なる

戀をしてと聞へた
 れは、うれしと斗に
 句を入れる、これを浮
 世のあた成るより、
 百と世の姥に色をさ
 ましたる我家の寂と
 い、俳中の教とも
 いふ、若き二三子聞
 へしとかんはせうる
 はしかりしと也
 ○其角野波に句を
 問ふ事
 炭俵、撰集の時、其
 角は『秋の空尾上の
 杉にはなれたり』と
 案して、野波にむか

る袖に月や出てまし』
 おなじ』とはぬまも波に吹らん風有草ゆふ
 べに見るや閨の月影』
 萩のこと』けふ咲きて露も色あるはつ見々
 さきのふの夏の萩とおもへど』
 萩なり』庭見ぐさ早咲初る此野にもともし
 の鹿をからぬ斗りに』
 おなじ』花咲ばつれなき人もこぞめ草いろ
 にめでつゝ今やとふらん』
 鹿なり』時雨ふる立田の山の紅葉鳥もみぢ
 のころな啼てもや知る』
 すゝき』我宿の庭になしなんつゆるぐさ竹

ひ、此句いかんか見
 るやと問、野波は曰、
 何ともいふへから
 す、只秋の晴たる氣
 色、空に一点の雲も
 なしと、其角悦んで
 卷頭に定む、
 ○義仲寺の法蓮、
 并に其角俠客に
 威をふるふ事
 其角翁の終りを取
 置、初七日の法蓮を
 義仲寺に聚會す、大
 津の智月、情有尼に
 て、路通か不興をふ

よるはかり風や吹らん』
 尾花をいふ』水はなし風にこそたて波はた
 だしきなみ草を折にまかせて』
 葛なり』春みれば花むらさきの松な草かゝ
 る露だに玉とこそなれ』
 芭蕉なり』吹風の夢ややぶらん庭忌草花と
 ばかりのともし火の影』
 朝貌のこと』明がたははづかしげなる朝貌
 のかゝみ草にも見わたけるかな』
 おなじ』名にはたゝ朝の花の咲ならば夕か
 げ草と何をいはまし』
 女郎花をいふ』誰かをる嵯峨野のはらの思

かくかきしみ、芭蕉終焉ちかき頃、いろく言葉を盡し、許すの一言は得たれども、門人路通をうんとすれば此席に登る事あたはず、寺のまきみも越かたくて、智月乙州を以て連中をなたむ、其角答へけるは、路通か罪かろんすへからず、されど此愁時いたれり碑前の焼香は許すへしとてすけかく席にすゝめされは、路通

形見草

ひ草我なきあらは花はなくとも』
菊のこと』なき人に折て手向るかたみ草ときてもそみれ花やみてまし』

百夜草

おなじ』名にしあふ翁が庭のもよ草花咲てこそ白妙になれ』

水懸草

みそはぎ』誰も只けふや折らん年毎に水かけ草を人に手向て』

河玉草

竹の露をいふ』秋かせは峯なる松にかよふなり川玉草にしかはきめまし』

夕玉草

おなじ』月に置夕玉草の秋かせにおと幾度のねざめなるらん』

霜見草

さくかり』時雨たいふらぬやさきの霜見草

智月の後にまのひまほくと庭を過るに、會蓮の徒四十四人いすれもつばきをはいて見むかす、路通いさとほりおさるかねて、大津の俠客をかたらひ來り席を犯さんどす、其角文臺をおどり越て、十徳の袖高くはさみまくりて短劔をぬいて俠客に立向ふ、支考、丈草袂にすかれは、洒堂正秀俠客をふせく、其角聲胴より發

秋無草

秋にあまりて花や残れる』
冬草の惣名あり』花ちりて其名ばかりに秋無草かたみに置けるけさの白露』

初無草

冬咲梅』萬代を咲ける中にも初無草春を待てや花を見るらん』

ひもかゝみ

は月影に水の氷るをいふ説ありそうじて氷の異名なり』緑せし御前の錦ふく風にひもかゝみこそあらはれにけれ』

親子草

ゆずり葉とも又齒朶とも』年毎にたねをや生る親子草人にしたしき花や咲らん』

六の花

雪なり』冬風に咲なれて散る六の花手折袖にもゆきのかゝれる』

してひいき龍虎のと
し、我國中に人と成
つて、今は天下の城
府に家居す、仰武城
に日本橋あり、日本
の人其橋を過さるは
なし、其橋を過る者
其角か名をしらさる
はなし、やうやく大
津壁の鼠穴に住ん
て、牛の涎に命をつ
かくさかやきの青瓜
さね、圃に茅を出す
二葉次郎、是を俳偕
にあわれといひ削懸
にあくたいと云、汝

夕見草

心あり折にふれことにつれつゝ夕見草月
や今宵の花と成らん』

暮見草

おなじ』花と月なくば何をかくれ見草山の
外には雪のあれども』

朝見草

おなじ』夜にあまる月をや山の朝見ぐさす
ごきをのこす秋の曙』

折見草

おなじ』折見草枝もやあらんことにふれあ
くさみ多きけふの夕暮』

物見草

おなじ』物見草袖にかさゝん折りくゝの涙
をだにもはあとおもへば』

寐覺草

おなじ』名にさかでたねとはならんねざめ
草心の外に葉も枝もなし』

戀種

おなじ』かるあらば千束もあらんこひぐさ
のたねとは袖のなみだありけり』

問れ種

おなじ』月なくて詠めもなしととはれ草曇
れる旅に獨りあかせば』

此ひきうたのうちさゝとりかたきもあれど、そはうつ
しあやまれるにや、またはさとこととはなぞのあらむも
しらねばもとのまゝしるしおきぬ

第八十八 俳諧の變化風派の分離

俳諧は連歌の俳諧なり、連歌は古昔より傳はり、俳諧歌
も又久し、侍公始て宗匠と成り、連歌常に俳諧あり、宗祇
古今傳授して花の下と稱す、應安新式成りて連歌に掟
を正しくす、宗鑑、犬筑波を撰してより連歌を貴み俳諧

ら去らすんは物みる
へしといきおひ、忠
盛の子のとし、俠客
腕のふときをさす
り、我譽にのゝしつ
て去りしとと

○其角三井寺に登

る二章

法菴已に終りて、正
秀酒堂等か亭に遊
ふ、ある夕大津の人
人にいさなわれ三井
寺に參る事あり、瀬
田の夕日かすかに残
つて、粟津は眞柴た
く烟りの中に、おほ

ろくくと暮かゝる、さるは歸花おしむかど見へて、此寺の晩鐘もなし、さゝ波は疊のこどく浮める間なく、立てこき行舟の跡にかはり、四山落葉して遠きを極む、烟波何處に可消愁とすゝんて、登りくくして山門に至る、『からひたる三井の仁王や冬木立』名にしあふ鐘樓にのほりて『風やかはるく』に鐘つかん』此二章

をいやしむ、貞徳御傘を纂して連歌と俳諧全く道を別にす、掟をゆるめて道を廣む門人多く、立甫、重頼、梅盛、貞室、季吟、皆一派を興す、貞徳俳諧の花の下と成り貞室次て貞恕に譲る、皆古風といふ、浪花の宗因檀林と唱へ、才麿一派を立て椎本と稱す、桃青出て季吟の門に學ひ檀林に交る、後ち慨然として俳諧の一派を開く是を正風活眼といふ、門下頗る多し、其角、蘭雪、去來、丈草、を以て長とす、滅後門葉又派を分つもの、角門、雪門、加賀風、美濃風といふ

第八十九 蕉門十哲

其角 寶井氏醫師竹下東順の子、幼名源助父の業醫を繼ぐ、始め檀林の俳諧に遊ひ、後蕉門に入る、儒を寛齋

中國にひいき、芭蕉第二世とはさゝやきあへる、明月正秀か亭に會す、人々又集りてきのふの二章感にたへす、今宵の巻頭いつれに定めん、其角是を聞て、翁の墳墓もあたりちかし、風の吟においては二たひ目やひらき給はんといへり
○其角支考か行脚に移文す
支考奥の行脚せん

に學ひ、書を玄龍に習ふ、號を晋子、又雷柱子、善哉庵、文合庵、六病庵、狂而堂等の別號あり、書は英一蝶を師とし、薯子と稱す、詩を大巖禪師に學て、徂徠を友とす、東都茅場町に住す、編纂の俳書句集數編有り、其調蕉翁と異にす、不角此門より出て號を次く今角門と稱し關東に擴ま
嵐雪 淡州小榎並村の人、服部氏、幼名久馬助長して彦兵衛といふ、江戸に出で諸家に奉公す、或時帶劔を棄行雲と共に一身を立、出て蕉門に入る、初俳名を治助と云ひ、後嵐雪に改む、號を雪中庵とし、又不自軒、玄峯堂とも稱す、濟雲禪師に従て悟道を得る、正風を守りて名吟多し、晩年山伏井戸に居を定め、寶永四年十月歿す、歳五

と、芭蕉庵より別る時、其角は白川に知るよしあれば移文をしたゝめ、支考に屬す、其ことはに此度芭蕉席の新參支考、其かたへ行脚いたし候、一宿ツ、御とめ可被成候、成程俳諧も能いたし候、ある程欲も御座候、かからす〜辨舌にはたされ給ふへからす、もし二宿と御とめ被成候は

十四辞世「一葉ちる咄一葉ちる風の上」門人周竹號を次く今雪門と稱し東都に多し、
去來 向井氏肥前の人通稱平次郎といふ幼年兄に従ひ京師に出て俳諧を蕉翁に學ぶ、當時關西の渠魁にして名吟多し、師翁没後抄を作りて其派の便とす、天性實體深切なり落柿舎と號して其舎に壁書して曰く
一我家の俳諧に遊ぶべし世の理窟をいふべからず
一朝夕かたく精進を思ふべし魚鳥を忌にはあらず
一速に灰吹をすつべし烟草を嫌ふにはあらず
一隣の居膳を待べし火の用心にはあらず
これ風雅にして掟はおきてなり
丈草 尾州犬山の藩内藤氏の長子なり、幼少にして

は、鼠のくはへたるものか、用心

○支考還俗

支考ひと、なり他にことなり、氣臆は胸にささめるとく工夫は一黙の中にあり、身は俳諧の小技にありて心は青雲の外に登る、此人は蕉門の逸物あり、初は許六にむつひふかく、笈日記撰せしころ、彦根の一卷夜光のことく、天下の俳

和漢の學を究む、繼母に事へて孝なり、其意を慰め弟に家を譲らんとて、斧にて薪を割ると偽り態と左の食指を伐る、士にして刀を握り得すと武を辭して禪門に入る、其時口ずさみて『多年負屋一蝸牛、化做_{トダリ}蛞蝓_{トダリ}得自由_{トダリ}』火宅最惶_ナ涎沫_ナ盡_ナ、偶尋_テ法雨_ニ入_ル林丘_ニ』又發句に『涼風にさゆるを雲のやどりかぢ』常に法華經を讀誦するより他事なしといふ、蕉門に入て風雅に遊ぶ、江州粟津の山に草庵を結び去來と交りを深ふす、寶永元年二月遷化す四十四歳
許六 江州彦根の藩士森川氏、百仲、字羽官、五老弁と號し、又菊阿佛と稱す、文學に長し、畫を善す、蕉翁俳諧を教へて弟子とし、畫は取て師とす、蕉翁歿後櫻の樹を伐

諧を照さんちと許六
文通もありしなり、
後才をたゝかつてへ
たゝる、されは老師
のもとへ衣鉢をかへ
し、我は還俗して遊
ふ也と『蓮の葉に小
便してもお舍利か
な』と調撥無の吟を
残す、

○支考福壽草の花
に觀す

或年の春福壽草をい
けて左右に愛し、此
花を見そめ一輪光り
をはなつて後凋めは

つて肖像を刻み恩遇の深きに報ゆる事斯の如し、晩年
癩瘡を發し人に逢はず、正徳五年に死す俳書風俗文選
を編す

越智越人 徳川幕府の士にて熊本藩佐分氏に養子
す、其家故有て浪す、實家の知行なるに依り美濃に行き、
後名古屋に住す、蕉門の秀弟也、翁歿後美濃の支考、先師
の遺稿かりと妄言を構へ杜撰つざんの書を多く表あらわはして世
人を欺く、越人大に怒り、『不猫蛇ふねび』といふ百三十余ヶ條の
書を著して詳に是非を辨せり、支考『削懸の返し』と題す
る書を出して答ふ、後歸參叶ひて熊本に歸るといふ
野坡 越前敦賀の商人、はしめ江戸に遊ひ後浪華に
住す、樗木庵と號して蕉門の徒あり、附合の體を備たる

次の枝にひらき、其
次又盛りをつく、支
考つくく觀して、
人間の子孫此ことく
我風流もかくのと
し、されは金剛の色
をひらくとも、此花
につく事おくんは久
しき愛物とは云へか
らす、我か俳諧はつ
ぐ人も有へし、文章
はつたふまし、さら
は東花坊の名残りて
その門人も又我にて
注をあらはし、解を
かへ、三世の變化を

は此人と越人に越たる者なしと、發句も又妙手あり、或
夜盜賊その家に忍入たり、野坡相對して云ふ、我に一物
の貯なし、唯一斤の茶を整へ置り、今宵寒ければ柴折焚
て快く寛話すべしと、盜賊机上を詠めて、草庵の急火を
逃れ出ると端し書して『我庵の櫻も寂ひし煙り先』とあ
る句を見つけ何時いつの火事にやと問ふ、野坡其爾々なる
よし答ふ、左あらば今目前の有様も句作あるべきやと
いふ野坡即ち『垣潜る雀ならず雪の跡』と賊大に感じ
去るといふ、其放逸なる事斯の如し、老後先師の無名庵
を高津野に移し、自ら高津野の翁と稱せり
杉風 江戸の人、その身魚問家にして鯉屋と號し、頗
る家富めりといへども生涯耳聾の憂ひあり、兄仙風共

つくさんと、北越に
行脚して十論の旨に
門人をすゝむ、難陳
の集作りし時『橋の
あちらは皆野町な
り』と云句に、希因
か『印籠は提ぬ聲か
と念を入』支考此句
を聞て、此子の我に
敵すへきものと云し
は、果して希因は麥
林を信して支考と終
に席をへたつ
○支考、非亮へ文
通、并に乙由の
句評の事

に蕉門に入り雀歩と稱す享保十八年八十餘歳にして
死せり
北枝 加州金澤の磨工にして牧童が弟なり、蕉翁そ
の俳才を感じて北方の逸士なりと稱せられたり、元祿
年間金城舞馬の災ひあり、房舎大半曠野とある北枝が
家も類焼に逢ふ、友人訪ひ來る答に『焼にけりされども
花は散すまし』とて自若たり、門人多く末世此派を加賀
風といふ
支考 美濃國大野郡北野村の人、始め禪門に入り鎮
座主といふ、弱冠のころ『吹毛劔也春三月、斷腸牡丹花下
風』といへる偈を作りて宗門の高僧に稱賛せらる、東都
或寺の大會の時、碧巖の講師へ八條の荆棘を難問す、故

支考金城の非亮へ文
通せるは、今年は美
濃の山家に隠れ、東
西二花の風流をため
す『芋よりも我名立
らんけふの月』、『ち
かつきの顔みか移る
月見かな』かく案し
置し所へ、伊勢の乙
由より文通『やかて
染る山を晒やけふの
月』とや來候、かや
うの手つま愚老も閉
口に及候、誠に風雅
はやさしきもの連、
次第に理屈に沈倫す

に衆僧其才を妬み遂に禪機を挫きけり、勢州山田に潜
居す、時に涼菟その才を惜み俳諧を勸て蕉門に入らし
む、學成りて歸郷す號を東花坊、西花坊と唱へ、野にある
時は盤子と呼ひ家にある時は獅子老人といふ、支考と
いふは始の名なり、俳諧十論、古今抄、又確論等の書を著
す、始めは僧形を替へ老僧律を守りて居たりしが、既に
して衣鉢を解の心起りける時、蓮の葉に小便すれば御
舍利かな、夫より戒を破り肉食も放はしにせしかば、或法師
諫て曰く、若墮落せば來世は必ず牛になるべしと、答て
『牛になる合點ぢや朝寐夕すいみ』常に旅に有て諸國を
巡り晩年故園に歸りて天年を終る時に當て其風を慕
ふ者多く後世連綿として美濃の一派と唱ふるは此老

る也、優におたやか
成る吟一句思ひかけ
す候、定て金城の事
に候間伊勢より申参
り候半と存候、

○支考は夕暮の第
三を案

支考は夕暮の集撰に
『いつくも秋の橋に
探幽』と云脇に、第
三を案し入、只月と
云ふ句あらばよしや
と、朝にあふむき、
夕にふし、食をたち、
席わきにつけす、か
くする事三日にし

の徳といふべし、十哲中、北枝支考最も年若くして永く
教を擴むるが故也(艸枕参照)

第九十 先師鶴叟の俳系

鶴叟は竹村氏尾陽徳川の重臣織田某の家來なり、初士
朗の門に寄り後京師に出て蒼虬の門となる、俳名を夙
也と稱し執筆たる事數年、二條殿に參降し俳諧宗匠を
勤む、故有て破門し伊勢の松坂に在り、晩年國に歸り蒼
虬に謝して立机す、鶴巢又鶴叟と改む號を止丘軒とい
ふ門人頗る多し

祖翁—北枝—希因—蘭更—蒼虬—鶴叟なり

第九十一 後師醉雨の俳系

醉雨は尾藩吉原清左工門(黄山)の五男なり、幼名竹三郎

て、『細にはしかすと
月の空に消へて』し
はらく此句に俳狂し
て、玉を拾へるもの
のとし、又四句目心
に入らずと、其夜も
臥さず、あくる夕に
『水を一桶汲んでお
かばや』希因此物語
したるに、或人かた
わらに聞居て、句は
案するにしくはなし
と、終に遅吟に成し
ものあり、世の俳人
多くは斯のとし、上
手はほどを知りて案

後五郎又東海と改む父に就て俳諧を學ひ而后の門に
入る、中頃同藩上田仲敏の家に遊んで冬道、良樹等と共
に和歌を學ぶ、慶應年間立机して父の竹意庵を次く、別
號梧老又梶童といふ眞假名は上代様貫之を學ひ能書
の名あり

祖翁—木因—巴雀—白尼—蓮阿坊—曉臺—士朗—而后—黄山—
醉雨なり

第九十二 俳諧の稽古心得

俳諧の稽古を爲すには先歌仙立の兩吟三吟より始む
べし、兩吟は通常宗匠の發句に脇を付添削を乞ふべし、
本懷紙に立句を認め付句は別紙(是は半紙を横に二ツ
に折り豎三ツに折り發句の添削に同じ)に前句を認め

し、下手は無用の工案に入て、王手飛車手を案る如し、句作は捨て取所あり、はやく取捨の用を去らんにはしかし

○支考、童平を差はさんて、芳野山に登る

支考美濃の草庵にこもり、雪になり行梢を詠めて、初雪の句を案しつつ、芳野山の一句を得たり『歌書よりも軍書に

付句の案したるを次に認むべし、一句付はせぬものにて代句は二三句もするあり、附方は八体とて諸秘訣の末項にあるを見合せ句案すべし、宗匠の添削の上本懐紙に寫し取ることなり、三吟の時は他の一人附前の人にも相談するを例とす、四吟五吟の時は文臺を立るともあり、然れども詠草は用ひて宗匠の添削を乞ふべし、又出勝惣俳諧の時は銘々の詠草を取集め執筆別紙に書込宗匠の点を乞ひ、其秀逸あるを取りて本懐紙に附るあり、宗匠の外は組硯を用ゆべし、近頃略して銘々墨池を携へ草稿に裏無き紙を用ゆれども稽古なれば見ゆるすべし、去なから斯るものと心得違ふべからず、吟割は兩吟なれば長句短句を一折の境にて替るなり

かなし吉野山』支考時におもゑらく、此吟雜にして名所の法をたかへす、我に一生の句なければ是をもつて名句とせん、天下誰か舌をくたさん、されど其場にあらされは人の信を起す事かたしと、童平へ申遣しけるは、今年雪の面白さ、しきりに吉野山を思ひ出ぬ、春立は相伴ひ大和路に行脚せん、吾子ゆかんやいなや

又は第三より後を二句二句と附るもあり、三吟五吟は順附けにて四吟は二句四句の法を用ゆるなり、逐次斯の如く一卷終りたる時は是を宗匠に委ね校正捌きを受け清記すべし、途中に差合去嫌を見出すも自儘に加除すべからず、尤俳諧中の懐紙は宗匠の免し無くして他人に見すべからず、他人の俳諧を見るべからず、文音又は宗匠の机邊に付句を差置時は下圖のふりに本懐紙に添へ差置くべし

とま打かけて云々
大聲の喧嘩仕出す濱の方
.....
濱の風大あみ笠を吹取て
宜御引直し奉願候
.....
芭蕉先生
蘭風

第九十三 人の方へ句を送る折紙認様

人の方へ句を送るには、紙四ツ折一の折に先の名氏或

半残り旅立を送る

陽炎におもかけ移れ
橋の上

年月日

芭蕉稿

山岸氏

宜爲車來候

年號月日

芭蕉判

と云に童平も是に同し、春もささらさの末つかた、吉野の麓にさかりを待得て、杖を引てちもとにかゝるかくれ松は、雪間のとく一目千本の雲井を分て、吉野院に登りみれば、南帝のむかし今更にして、古戦の跡に涙をそゝく日も心細く木の間にかくれ、谷の水音むせふかと、支考童平相ならんて、石上に尻かゝけすれ

は、同志の聲く人家をもちめ、花の色ここに臥すゝむとみゆ、支考時に頭をあげて、我天下の總唱を得たり聞くべしやくと、かの句を高らかに吟ず、童平眉をはつて曰、いみしき盗人かな、よくもくたふらかして我を行脚のやつことはあせる、此吟孕句なり、はやくしらは來らざりしものを、支考打ゑみて童平か背

は號を書事前に出せし圖の上の方の如く付け紙を張り何々子又は何何老翁の賀祝に送るなど尊卑によりて認む、付紙の色通常赤きを用ゆ、悼追善は青紙を用ゆ、外包は紙袋又は上包にてもよし上に拜机又は令爪をせと書く、尊卑によるべし

第九十四 俳名を送る折紙認様

俳名を人に附與へるには檀紙、奉書を二ツに折三ツに折前に出せし下の圖の如く書くなり上包に「俳名」とはかり書く

第九十五 俳諧に教導職を置く、權輿

俳諧は國教の一端なるを以て明治六年五月三日東京當時宗匠關爲山、鳥越等裁橋田春湖、を教部省に於て訓

中をたゞき、あなか
しこ、もらすへから
すと口を掩て山をく
たる(以下略之)

導に補らる同七年四月十七日教林盟社之結社を聞届
となり是より諸國の俳人に教職を命せられたり

鼈頭の部尾

鼈頭 俳諧秘事大全 大尾

明治廿六年六月八日印刷
全 年六月十八日發行
全 年八月一日再版

*** 定價金三十錢 ***

著述者

愛知縣名古屋市小林町廿八番戸
松井紋之丞

發行者

愛知縣名古屋市門前町十七番戸
三浦兼助

印刷者

東京京橋區州間堀貳丁目一番地
堀井安太郎

印刷所

全 日本橋區通本石町二丁目
明教印刷所

大賣捌

全 京都市三條御幸町角
覺張榮三郎

全

京都市心齋橋北詰競争屋
大谷仁兵衛

全

中 村芳松



中をたゞき、あなか
しこ、もらすへから
すど口を掩て山をく
たる(以下略之)

龍頭の部尾

第九十五 俳諧に教導職を置るゝ編集

二百三十二

導に補らる同七年四月十七日教林盟社之結社を聞届
となり是より諸國の俳人に教職を命せられたり

龍頭 俳諧秘事大全 大尾

明治廿六年六月八日印刷
全 年六月十八日發行
全 年八月一日再版



著述者
發行者
印刷者
印刷所
大賣捌
全
全

愛知縣名古屋市小林町廿八番戸
松井紋之丞
愛知縣名古屋市門前町十七番戸
三浦兼助
東京京橋區舟間堀貳丁目一番地
堀井安太郎
全區全町全番地
明教印刷所
全 日本橋區通本石町二丁目
覺張榮三郎
京都市三條御幸町角
大谷仁兵衛
大阪市中心齋橋北詰競爭屋
中村芳松

定價金三十錢

其中堂發兌圖書販賣所

○言文材料譬喻漫録 ○三十日間將基獨習新法 ○說教心
 の種(第三版) ○三大家說教 ○說教洒落囊 ○替題因緣
 說教之葉(第二版) ○西洋說教之葉 ○佛說學(二版) ○新
 說教 ○佛說演說辨(三版) ○各宗管長演說 ○佛說四恩の解
 ○佛說演說軌範(三版) ○同三回 ○僧侶の辨護(二版)
 ○佛說演說軌範(二版) ○心學道の葉(三版) ○日本佛法史
 ○心學一夕話(三版) ○破邪金鞭 ○通俗因明學(二版)
 ○耶蘇大敗北(二版) ○通俗十七宗綱要 ○日蓮深密傳 ○
 ○通俗論理學(二版) ○佛說心理學 ○大乘洒落禪 ○通俗原
 釋門必携記事論說 ○佛說滅亡論(二版) ○佛說不滅論 ○尊皇奉
 人論講義 ○佛說滅亡論(二版) ○佛說不滅論 ○尊皇奉
 佛大團圓 ○足立普明意見書 ○印度古代哲學 ○元三大師御
 闕の箋 ○米商必携相場大要 ○八木賣買相場秘傳集
 (以下畧之)

其中堂發兌圖書販賣所

東京日本橋區通二丁目	大倉孫兵衛	同	橫山町一丁目	出雲寺書店	同	三條通御幸町角	大谷仁兵衛
同	小林新兵衛	同	兩國若松町	榊原友吉	同	富小路三條上ル	中村淺吉
同	丸善書店	同	日本橋新大阪町	鶴喜書店	同	大津	澤宗次郎
同	金櫻堂	同	湯草三好町	大川屋錠吉	同	四日市	小川儀平
同	春陽堂	同	同廣小路	淺倉久兵衛	同	桑名	伊藤善太郎
同	東雲堂	同	本材木町	林平次郎	同	津	森傳四郎
同	吉川半七	同	芝愛宕下町	須原富吉	同	同	河島書店
同	辻本丸兵衛	同	飯倉五丁目	森江佐七	同	松阪	豐住謹次郎
同	青木嵩山	同	大阪備後町四丁目	梅原龜七	同	上野	中西嘉助
同	目黒書店	同	北久太郎町四丁目	吉岡平助	同	古屋京町	有文堂
同	中川書店	同	同	柳原喜兵衛	同	本町三丁目	安屋勝二郎
同	山中孝之助	同	博勞町四丁目	中川勘助	同	玉屋町一丁目	鈴木吉兵衛
同	上田屋書店	同	安堂寺町四丁目	青木恒三郎	同	同五丁目	川瀨代助
同	中西屋書店	同	心齋橋北詰	中村芳松	同	同	若山文次郎
同	開省堂	同	本町四丁目	岡本仙助	同	同	豐田三郎
同	三山房	同	三條通寺町東	東枝律書房	同	同	小澤吉三郎
同	富山堂	同	三條通寺町東	福井源次郎	同	同	片野東四郎
同	三山堂	同	三條通寺町東	田中治兵衛	同	同	三輪次郎
同	富山堂	同	三條通寺町東	藤井佐兵衛	同	同	尾頭吉次郎
同	三山堂	同	三條通寺町東	出雲寺書店	同	同	淺見鉦太郎
同	三山堂	同	三條通寺町東	同	同	同	稻垣勝之丞

